

13278

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第142集

8412

MARU KUMA YAMA

丸隈山古墳 II



1986

福岡市教育委員会

古墳時代入海

山崎

山ノ鼻2号 山ノ鼻1号

丸山

若八幡宮

今宿

下谷

女原C14号

堀氏A1号

天王寺

飯氏白14号



丸隈山古墳Ⅱ 正誤表

頁	行	誤	正
表紙		調査報告書第146集	調査報告書第142集
背表紙		"	"
見返し		"	"
奥付		"	"
本文目次		IV 1 墳丘 31 2 出土遺物 39 3 横穴式石室 31 V 4 結語 51 (付録 1) 52 21 31 39 52 54
6	24	女原遺物も	女原遺跡も
9	Tab.2	28 子持塚	28 坂氏二塚(子持塚)
		33 約47m	33 約47m 木棺
		39 福岡市西区今宿	39 福岡市西区今宿青木
10	34	管玉14、ガラス小玉2	管玉14、ガラス玉2
11	30	内高7m	同高7m
13	往(13)	福岡県教育委員会	福岡市教育委員会
14	小見出し	遺物	遺物
17	23	昭和46~49年	昭和41~44年
24	Fig.17	S K01	S K01
26	Fig.20	1	1) 墳輪
31	4	1) 墳輪 (Fig.26~28)	急激に
35	14	強烈に	突起径17.8cm
	34	径24.2cm	底部の
37	30	低部の	(Fig.34)
41	33	(Fig.33)	0 2m
47	37	0 2m	0 2m
PL.1		陶製六獸鏡	陶製六獸鏡
"		陶製二神二獸鏡	陶製二神二獸鏡
PL.14		前方部各トレンチ I	前方部各トレンチ II
PL.24		7 8	6 7
PL.26		陶製二神二獸鏡	陶製二神二獸鏡

丸隈山古墳

II



遺跡略号 MKY
遺跡調査番号 8412

1986
福岡市教育委員会

序

西区周船寺に所在する丸隈山古墳は、市内第2の規模を誇る前方後円墳です。後円部にある横穴式石室は、江戸時代の初めに開口し、その当時の記録ばかりでなく、出土した遺物も現在に伝えられています。こうしたところから、いちはやく学界に紹介され、昭和3年には史跡の指定を受け、今日にいたっています。

この間、丸隈山古墳は九州古墳文化の基準となる古墳として、また後円部の横穴式石室の構造が中国、朝鮮半島と深い関係にあることなどから、多くの研究者のとりあげるところがありました。

先年、指定地境の崖面補強工事を実施することになり、これに先立つて古墳の規模や形態を確認する必要が生じ、発掘調査を行いました。

その結果の詳細は本書に記されているとおりですが、これまで推測の域を出なかった墳丘についての数多くの資料を得て、工事による古墳への影響を最小限にとどめることができました。

調査に関係された組織、機関の諸氏、多々ご協力をいただいた地権者の方々、調査にあたってご指導、ご助言をいただいた諸先生に厚くお礼申しあげます。

昭和61年3月1日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が昭和60年度事業として実施した史跡丸隈山古墳範囲確認、ならびに法面補強工事に伴う発掘調査の報告である。
- 2 調査は、昭和59年8月17日～9月30日（1次）、10月29日～12月7日（2次）の2回にわけておこない、昭和61年2月4日～12日に石室実測図を作成した。1次調査は、墳丘各部のトレンチ調査で調査面積は123m²である。2次調査は、法面補強工事にかかる範囲と墳丘トレンチ調査で調査面積は163m²である。
- 3 調査は、福岡市教育委員会文化部文化課（現埋蔵文化財課）が担当した。1次調査は、山崎純男を担当とし、常松幹雄、佐藤一郎、米倉秀紀が参加した。2次調査は、柳沢一男（現福岡市埋蔵文化財センター）を担当とし、杉山富雄、岡部裕作（前原町教育委員会）が協力した。また全期間にわたって朴美子氏の援助をうけた。石室の実測は、柳沢を担当とし、小路永智明、池ノ上宏、金子正勝、伊勢知亮（以上福岡大学歴史研究部）の諸君が参加した。
- 4 本書の作成は、山崎、柳沢の討議のもとに、柳沢が執筆、編集した。
- 5 遺構実測は参加者全員があたり、浄書は柳沢がおこない、一部を埋蔵文化財センター吉田扶希子の協力を得た。
- 6 遺物実測は2点の石器を吉留秀敏が、他は柳沢があたり、浄書は柳沢がおこなった。
- 7 遺構の写真は山崎、柳沢が、遺物の写真は柳沢が撮影した。
- 8 裏表紙タイトル、サマリーの英訳は中村女子短期大学講師林田憲三氏による。
- 9 石室、石棺の赤色顔料の分析は、埋蔵文化財センター本田光子による。
- 10 (付録3)に掲載した妙正寺所蔵文書の読み下しは埋蔵文化財センター原野綾子による。
- 11 1970年に刊行された『丸隈山古墳』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第10集）と区分するため、前書を「丸隈山古墳I」、本書をIIとする。
なお、前報告は発行部数が少なく稀観本となっており、本書と重複しない石室内出土遺物に関する報告を付録として本書に再録した。
- 12 本書に使用する方位は磁針である。真北との偏差は西偏6°10'（1981年）である。

本文目次

I	はじめ	1
II	位置と周辺の遺跡	4
III	研究略史	14
IV	調査記録	21
	1 墳丘	31
	2 出土遺物	39
	3 横穴式石室	31
V	総括	42
	1 墳丘	42
	2 横穴式石室の復原	45
	3 横穴式石室の系譜	49
	4 結語	51
(付編1)	丸隈山古墳横穴式石室出土遺物	52
(付編2)	筑前国続風上記(抜粹)	57
(付編3)	妙正寺所蔵文書	57

図版目次

PL. 1	石室内出土鏡	15 9、10トレンチ
2	墳丘トレンチ	16 10トレンチ
3	墳丘全景(空撮)	17 横穴式石室
4	後円部	18 横穴式石室各部I
5	クビレ部全景	19 横穴式石室各部II
6	クビレ部	20 石棺I
7	後円部葺石	21 石棺II
8	後円部トレンチ	22 前方部トレンチ断面図
9	4トレンチ	23 墳輪I
10	7、8トレンチ	24 墳輪II
11	7トレンチ、S X02	25 墳輪III
12	8トレンチ	26 石室内出土遺物I
13	前方部各トレンチI	27 石室内出土遺物II
14	前方部各トレンチII	

挿図目次

Fig. 1 九隈山古墳指定地籍図	24 9、10トレンチ平面図
2 九隈山古墳丘測量図	25 9、10トレンチ断面図
3 周辺遺跡分布図	26 10トレンチ埴輪列実測図
4 大塚遺跡Ⅲ区全景	27 塹輪実測図I
5 糸島地方前方後円墳分布図	28 塹輪実測図II
6 若八幡宮古墳墳丘図	29 塹輪実測図III
7 銚崎古墳墳丘図	30 塹輪実測図IV
8 今宿大塚墳丘図	31 土師器実測図
9 石室の復元修理	32 弥生土器、土師器、石器実測図
10 老司古墳墳丘図	33 横穴式石室実測図
11 銚崎古墳石室実測図	34 石棺実測図
12 墳丘トレンチ位置図	35 墳丘復原図
13 1トレンチ南壁断面図	36 石室平面図と方眼の適用関係
14 クビレ部トレンチ位置図	37 墓道の構造
15 4トレンチ実測図	38 石室復原図
16 4トレンチ埴輪列実測図	39 和爾下神社境内所在棺材
17 クビレ部実測図	40 初期横穴式石室編年図
18 S K01実測図	41 仿製二神二獸鏡
19 S X02実測図	42 仿製六獸鏡
20 7トレンチ実測図	43 巴形銅器実測図
21 8トレンチ実測図	44 鉄鎌、劍実測図
22 前方部トレンチ断面図	45 鉄刀実測図
23 6トレンチ断面図	46 玉類実測図

表目次

1 指定地面積
2 糸島地方前方後円墳・大形円墳地名表
3 墳丘トレンチ計測表
4 墳丘規模計測表
5 墳丘規模復原値
6 初期横穴式石室玄室規模
7 玉類計測表

I はじめに

1 調査にいたる経緯

丸隈山古墳は、福岡市西区崩船寺251-1ほかに所在し、昭和3年2月7日に国史跡に指定された、全長80mをこえる前方後円墳である。

この古墳は、後円部中央にあった横穴式石室が早く江戸時代の初め、地元住民によって発掘された。その後、石室内から採集されたとする小仏像が信仰の対象となり、石室内に堂宇を設けて永く地元民の祭るところとなった。大正15年、堂宇の朽ちたのを契機に、地元崩船寺村は石室の復元修理を行うべく内務省に許可を求めて、昭和2~3年にかけて工事を実施した。

現在の指定範囲および公簿上の面積は右にしめすとおりである。指定後、前方部墳丘上は地元の奉会や行事に利用されることもある、積樹が行われ、よく手入れされている。しかし前方部は明治末年頃まで現状より1mあまり高く残っていたといわれている。

昭和59年、こうした状況のなかで、指定地の西に接する地権者から法面補強の要請があった。境界となっている高さ3mほどの崖面で、家屋新築に伴うものである。市教育委員会はこれを受けて工事を実施することになったが、墳丘の変形が著しいため、現状では範囲を確定できないこともあって、まづ墳丘規模、範囲の確認を行ったのち、改めて工事について協議することになった。

8~9月に文化課文化財主事山崎純男を担当として、工事範囲を中心に墳丘規模確認のトレンチ調査を実施した。その結果、西側クリビレ部から後円部側邊が工事範囲にかかることが分った。墳丘破壊範囲を最小に限るべく、再度地権者と協議し、指定地範囲の拡大を求め、了承を得た。それでもなお、後円部墳丘の一部が法面工事に伴って破壊される可能性が残されていたため、直接工事にかかる部分と外方2mまでの範囲を発掘調査することになった(2次調査)。2次調査は、文化課埋蔵文化財第2係柳沢一男を担当とし、11~12月の1ヶ月間実施し、合わせて指定地外に抜がる後円部の範囲確認を行った。

また昭和61年2月、報告書作成にあたって、柳沢を担当として横穴式石室の実測図を作成した。

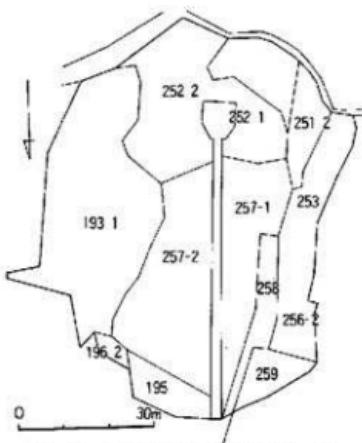


Fig. 1 丸隈山古墳指定地範囲(1:1200)

指定面積	3355.84m ²
公有地	2479.61m ²
民有地	821.23m ²

Tab.1 指定面積(1986年3月現在)

2 調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会	
調査統括	文化課長	生田征生（前任）、柳田純孝
	埋蔵文化財第2係長	折尾 学（前任）、飛高憲雄
調査庶務	埋蔵文化財第1係	
	文化財管理係	松延好文
調査担当	文化財主事	山崎純男（第1次）
	埋蔵文化財第2係	柳沢一男（第2次）
調査補助	角浩行、平川祐介（奈良大学）、前川要（名古屋大学）、小路永智明（福岡大学）以上1次。郭鍾詰（九州大学）、朴美子 以上2次	

なお調査にあたって、文化庁、福岡県教育委員会から多くご配慮を得た。また森貞次郎、岡崎牧、横山浩一、小田富士雄、西谷正の諸先生からは多くの指導助言をたまわった。丸隈山古墳管理員の任に当つておられる妙正寺住職丸隈淳仁氏には、保存遺物調査に際して数々のご高配を得た。記して謝意を表したい。

3 墳丘の現状

丸隈山古墳は、標高416mの高祖山麓の北西端に位置する。山麓部には北方の博多湾に向つて八手状に開析された丘陵が派生し、その尾根先端部に築造されている。後円部を丘陵部の南側に、前方部を丘陵端の北側に向ける。長軸はおおよそN7°Eとほぼ南北に近い北面する前方後円墳である。

江戸寛永年間に後円部石室が地元村民によって発掘された。後に、石室内から出土したと称する小仏像が信仰の対象となり、石室内に觀音堂を設けたこともあって、墳丘全体が著しい変容を受け、かろうじて前方後円墳と認定しうる程度に変形している。墳丘の東西側縁は、もともと丘陵端に近い緩斜面であったと思われるが、宅地化のために削り取られ墳丘とのあいだに2~4mの崖面を形づくる。そのため、古墳の位置する丘陵端が、あたかも独立丘陵状の高まりに見える。

現在後円部に残る横穴式石室は、昭和3年（1928）に復元修理されたもので、後円部墳頂はその際積みなおされた。石室の前面は前方端に向つて広くテラス状に削平されているが、明治末年頃までは今より1mほど高かったらしい。

後円部南側は墳丘端が削りとられ、2~3mの低い崖面となる。しかし、後円部墳丘の南半部に沿つて、丘陵上位とのあいだに一段低く畠地・宅地がめぐつており、墳丘の築造が丘陵尾根を割断して行われたことをしめしている。この畠地面は標高16.6mで墳丘基底面に近い数値と考えられる。しかし、16.5mの等高線をトレースしたばあい、おおよその墳形を想定しうるが、やはり変形が著しい。

なお墳丘裾部周辺には拳~人頭大の転石がみられ、まれに埴輪片を採集することができた。墳丘に葺石がめぐり、埴輪列が配列されていたことはまちがいない。

こうした古墳の現状から墳丘規模を推測することは困難だが、前報告では、全長79.5m、後円部径44.5m、同高7m、前方部幅20m、同高5mと復原している。

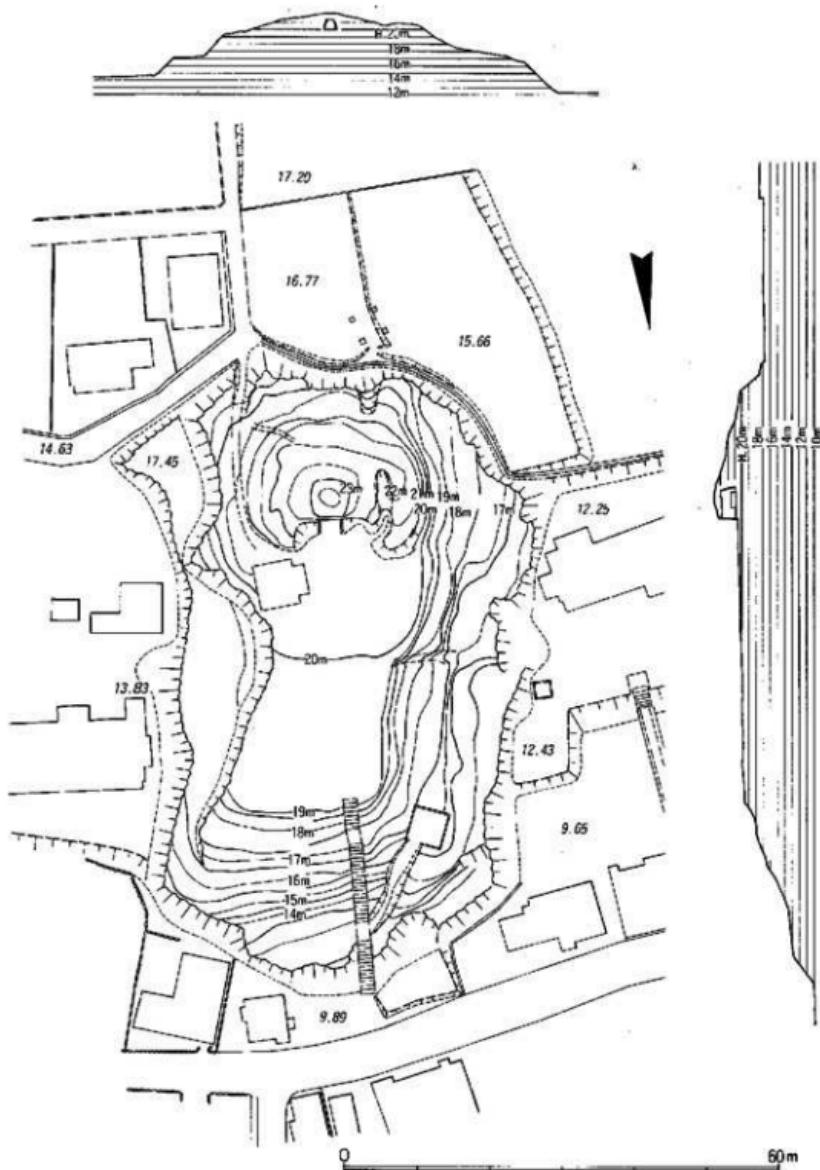


Fig. 2 九联山古墳墳丘実測図(1:800)

Fig. 3 周辺遺跡分布図(1:25000)



- 1 山ノ森1号墳
- 2 牛八幡古墳
- 3 銚崎古墳
- 4 丸隈山古墳
- 5 山ノ森2号墳
- 6 今宿大塚古墳
- 7 下谷古墳
- 8 蝶氏二塚古墳
- 9 鮫氏C14号墳
- 10 女原C14号墳
- 11 谷上B1号墳
- 12 本村A1号墳
- 13 鮫氏A1号墳
- 14 山崎古墳
- 15 今宿小塚古墳
- 16 今山通跡
- 17 今宿遺跡群
- 18 今宿五郎江遺跡
- 19 大塚遺跡
- 20 女原遺跡
- 21 新開窯址
- 22 銚崎遺跡
- 23 地ノ内遺跡
- 24 青木遺跡群
- 25 女原先掛遺跡
- 26 通町遺跡
- 27 鮫氏引地遺跡
- 28 鮫氏遺跡群
- 29 関新寺遺跡群
- 30 千里里遺跡群
- 31 千里向川原遺跡

II 位置と周辺の遺跡

福岡県の北西、玄界灘に面する海岸部は、背振山系を源とする河川と派生した丘陵に画されて、いくつかの平野部が形成される。その西端の糸島平野は、かつて東西に貫通した糸島水道に流れ込む瑞梅寺川、雷山川、長野川などの沖積作用によって生みだされた低平な地形である。とはいっても、背振山系から北に延びる低丘陵によって、微地形上数地域に分断される。ここに報告しようとする丸限山古墳は、糸島平野の北東端に小さく開けた今宿平野に位置する。

われわれが今宿平野と称する一帯は、博多湾の左転回潮流によって形づくられた横浜～長垂間の弓状砂丘と、南に位置する標高416mの高祖山麓とのあいだに形成された沿海性の小平野である。早良平野とを画する叶樹～長垂丘陵を東端、瑞梅寺河口を西端として、東西3kmをはかる。平野東部は叶樹と高祖山のあいだに扇状地が発達し、扇端が海岸砂丘近くまでのびる。西部は、砂丘後背地のラグーンが沖積地化した部分と、江戸時代後期以降の干拓事業によって開かれたところがある。南の高祖山麓は、北流する小河川の開拓によつて八手状に丘陵尾根が派生し、部分的に奥深い谷地形をなすところがある。

九殿山古墳は山麓北西端にあり、こうした北に向ってゆるくのびた丘陵尾根の先端部に築造された、全長85m前方後円墳である。ちなみに、国土地理院刊行の1/5万地形図「福岡」では、岡幅上端より21.3cm、左端より1.1cmの位置にあたる。

周辺の遺跡

1980年、福岡市に地下鉄が開通し国鉄筑肥線との相互乗り入れが実現したことによって、今宿地区も都市近郊型ベットタウンと化しつつある。これまで数えるほどの調査しかなかつた地域であったが、近年になってバイパス建設、圃場整備あるいは宅地開発などに併せて埋蔵文化財の調査が急増し、遺跡の破壊とひきかえに次第に豊富な考古学資料が明らかになりつつある。

まづ弥生時代の遺跡としては、開始期の遺跡に平野西端の沖積微高地（千里シビナ遺跡⁽¹⁾）や山麓谷部（大塚遺跡⁽²⁾）などがあり、夜臼式土器が出土している。前期末葉には、砂丘北西端の玄武岩独立丘——今山で石斧生産が始まる。これまで数次にわたる確認調査によつて、1 石斧生産開始期が前期末まで遡ること、2 石斧素材として山腹、山頂の岩頭ばかりではなく、山麓の転石を多用していること、3 工房址は山麓の西～南部傾斜面に広がること、などが明らかにされている。

弥生時代
の遺跡

また、砂丘上には前期末～中期にかけての甕棺墓を主体とする墓地群が点在する。今宿遺跡群では、中央部で水道工事に伴つて延長100mにわたり甕棺墓が検出された。その北西部では甕棺のはかに土塙墓らしき遺構があり、再加工された細形銅劍や硬玉製勾玉などが出土している。

集落遺跡は、これまで良好な資料がなかったが、最近注目されるべき調査が行われた。

平野東部の扇状地の扇端近くに位置する今宿五郎江遺跡は中期後半から後期に継続するが、遺跡西端で中期末まで遡る可能性の高い掘立柱建物で構成される集落が検出された。

建物は 1×2 間、 1×1 間の小規模のものが多いが、集落を画すると思われる大溝中から、中期末～後期前半の土器に伴って小銅鐸が出土している。小銅鐸は高さ13.5cm、朝鮮式小銅鐸にくらべてスマートなプロポーションで、鐸身はほぼ正円に近い。舞線よりも内側についた紐は断面円形だが、上部と側縁の3箇所に小突起がある。甲張りが偶然残ったものではなく、飾耳を模した感がつよい。また鐸身上部の型持孔も方形で、朝鮮式小銅鐸とは系統を異なる。近畿式銅鐸のある種をモデルとしたミニチュアの可能性がつよいようだ。また、同遺跡では地点を異にして、後期前半～中葉に幅3m、深さ2mあまりの溝で画された環濠集落が成立する。部分的な調査のため環濠規模は明らかでないが、先の掘立柱建物を主体とした集落や、小銅鐸の保有などから推して、この集落が、三雲遺跡を中心に形成された「伊都国」外縁の拠点集落の一つと想定される。

こうした大形拠点集落以外のものは、高祖山麓の谷に面した丘陵斜面に点在する。大塚遺跡高田地区では、後期後半から古墳時代前期に継続する竪穴住居址群30棟あまりが、谷の河川に面した斜面に検出されている。

古墳時代の今宿は、高祖山北麓に沿って分布する12基の前方後円墳と、300基を上まわる群集墳が集中する地域だが、近年の調査によって、集落や生産関係の遺跡の実体が次第に明らかになってきた。

まず集落遺跡は、さきに述べた大塚遺跡高田地区や、それと丘陵を挟んで位置する大塚遺跡III・IV区、¹⁹女原遺跡などのように、いずれも谷に入り込んだ丘陵緩斜面で検出されている。

大塚遺跡III区では6世紀初めから7世紀前葉にかけて集落が営まれており、40棟あまりの竪穴住居址と掘立柱建物が検出されている。女原遺跡も同じく6世紀代の集落で、約20棟の住居址が調査された。²⁰いずれも圃場整備にかかる調査で検出されたため、限られた範囲内のものだが、一集落の規模はさほど大きくないようである。

該期の農業については、水田の調査が行われていないため明らかでないが、海岸砂丘では製塩、山麓部では須恵器生産と鉄生産が行われたことが知られる。

今山の東側砂丘では、中山平次郎採集資料に脚台付きの製塩土器があることが紹介され²¹た。近年の調査でも相当量の製塩土器が出土し、布留式に併行する段階の土器製塩であることが確められたが、炉や工房などの遺構は未検出である。

須恵器窯址としては、高祖山北麓に新開窯址がある。作業用道路の開拓で2基の窯体が須恵器生産切断され、小田富士雄氏らが一部を調査し、生産の開始が第I型式に遡ることが明らかになった。窯址規模、生産継続期間など今後の調査に俟たねばならないが、窯址から0.5kmほ



Fig. 4 大塚遺跡 III 区全貌

ど離れた大塚遺跡Ⅲ区では、住居址の一つから粘土をつめた土塊が検出され、また各所から窓壁片が出土しており、須恵器生産にかかわった丁人集団との関連が予想される。

この地域の古墳時代後期における生産活動のなかで注目されるのは、遅くとも6世紀後半に開始したとみられる砂鉄を素材とした鉄生産があげられる。長垂~叶嶽西麓、高祖山^豊鉄生産東~北麓を中心に、これまで20ヶ所の鉄滓散布地が確認され、一部が調査されている。残念ながら炉体の検出に至っていないが、その多くは丘陵斜面を整地して構築しているようだ。先に、鉄生産の開始を6世紀後半としたのは、群集墳調査例のなかに供獻鉄滓出土古墳のあること、加えて近年の調査で6世紀後半の土器を共伴した祭祀土壙からの鉄滓出土例があることによる。この地域の鉄生産は、以降奈良・平安時代に継続するが、その終焉については不明なところが多い。確実な調査例といえば、大塚遺跡II区で検出された12世紀前半頃の製鉄遺構が最新のものといえる。

九州では、古墳時代に遡って砂鉄製錬による鉄生産を行った地域は、いまのところ玄界灘に面した北部九州（今宿、早良、福岡、宗像）と、有明海沿いの一部（熊本県小岱山麓部）に限定される。いずれも低チタン質の良質な砂鉄を産出する花崗岩地帯である。

糸島の前方後円墳

九重山古墳の位置する今宿を含めて、旧糸島郡には42基（1986年1月現在）の前方後円墳が知られている。旧糸島郡は、令制期の怡土・志摩2郡に等しく、筑前国全体の前方後円墳約130基のうちの4割弱が含まれ、一地域での前方後円墳数としては、九州でも有数の集中的密度といえる。

糸島地方前方後円墳の分布は、南半の怡土に集中するが、河川流域を単位とした小地域ごとに区分することができる。いま、おおまかに4地域に細分すると次のとおりである。分布

I 糸島平野西部で長野川、一貴山川流域に西群（11基）、大形円墳として径56mの翁塚古墳がある

II 雷山川、瑞梅寺川流域を中心とした中央群（15基）、径32mの孤塚、40mの向上2号墳などの大形円墳がある

III 平野北部の志摩半島側で、泉川流域から半島丘陵部南麓にかけての北群（5基）、大形円墳に径32mあまりの泊城崎古墳がある

IV 今宿平野周辺丘陵部に分布する東群（12基）、大形円墳として径31mの飯氏A1号墳（兜塚）、約30mの今宿小堀古墳、30mの山崎古墳などがある

糸島地域の前方後円墳は総じて小規模のものが多く、最大でも一貴山銚子塚の103mにすぎない。80mクラスの規模となると各群ともみとめられ、西群では先の一貴山銚子塚、中央群一端山、築山、北群一泊大塚、東群一丸隈山古墳などがある。

各群とも前期から造営が開始されるが、そのなかでもっとも遅るのは、北群の御道具山古墳である。全長60mあまり、クビレ部が細く、かつ前方部端が撥形に開く形態をしめ造営開始期す。西群では後漢鏡2面のはか8面の仿製三角縁神獸鏡を副葬した一貴山銚子塚が、中央群では出土した土師器からみて翁塚古墳がそれぞれ開始期の古墳と想定される。今宿地区の東群のばあい、三角縁神獸鏡、堅矧板革綴短甲などを出土した若八幡宮古墳があげられるが、谷をへだてて北側に位置する山ノ鼻1号墳が先行する可能性が指摘されている。こ



Fig. 5 米島地方前方後円墳・大形円墳分布図 (旧文献第4 図補差)

Tab. 2 米島地方前方後円墳・大形円墳地名表 (旧文献表1を一部改変・補筆)

番号	古墳名	所在地	全長	主体部	出土遺物	備考
1	開1号	志摩町井田原			接溝鏡1・鐵器・円筒埴輪	葺石・段築
2	御道具山	前原町泊	約55m			前方部ハチ形
3	泊大塚	前原町泊			円筒埴輪	前方部斜平
4	立野	二丈町松末	約50m			帆立貝式
5	徳正寺	二丈町上深江				葺石
6	跳子塚	二丈町田中	103m	竪穴式石室	鏡10・玉環刀7・劍6 鏡分14・鏡柄14・十郎脚片	
7	長石二塚	二丈町長石	約50m			
8	東二塚	前原町東				段築
9	横枕	前原町木	約40m	横穴式石室		
10	日明3号	前原町飯原	約35m	横穴式石室	円筒埴輪	
11	日明11号	前原町飯原	約40m	横穴式石室		(前方部に主軸方向に開口)
12	日明13号	前原町飯原	約45m	(竪穴式石室)		後円部西側
13	日明16号	前原町飯原	約25m	横穴式石室		
14	日明17号	前原町飯原	約30m			段築・葺石
15	有田1号	前原町有田		竪穴式石室?		

番号	古墳名	所在地	全長	主 体 部	出 土 物	備 考
16	先山	前原町曾根		横穴式石室?		消滅
17	ワレ塚	前原町曾根	約42m			段築・葺石
18	錢坂塚	前原町曾根			家形埴輪・円筒埴輪	段築・葺石(瓦なし)
19	高上大塚	前原町高上			鹿角装刀(直彌文)	関西大学藏
20	三雲茶臼塚	前原町三雲			(鉄刀・鉄矛)	墳丘消滅
21	端山	前原町三雲			土師器(埴丘・眉峯)	眉峯・段築・葺石
22	築山	前原町三雲			土師器・壺形埴輪(埴丘)	周濠・段築・葺石
23	向上4号	前原町末松				
24	井原1号	前原町井原		大型箱式石棺?		
25	井原2号	前原町井原				消滅
26	星敷1号	前原町高上				
27	高祖	前原町高祖		横穴式石室		消滅
28	子捨塚	福岡市西区飯氏	55m	横穴式石室?	須恵器	
29	飯氏B14号	福岡市西区飯氏	24m	横穴式石室		
30	丸隈山	福岡市西区周船寺	85m	横穴式石室	鏡2面・巴形調器・五枚・劍・刀・鉄矛・円筒埴輪	3段・葺石
31	山の鼻1号	福岡市西区德永	約48m	竪穴式石室?		葺石
32	山の鼻2号	福岡市西区德永	約60m			墳丘消滅
33	若八幡宮	福岡市西区德永	約47m		鏡2面・五枚・劍甲・刀・劍・單頭盾・複製有孔円錐・他	3段築成・葺石
34	下谷	福岡市西区德永	?			消滅
35	女原C14号	福岡市西区女原	24m	横穴式石室	須恵器	墳丘半壇
36	谷上B1号	福岡市西区今宿	28m	横穴式石室		
37	今宿大塚	福岡市西区今宿	64m	横穴式石室?	形象埴輪・円筒埴輪・須恵器	二重眉濠
38	本村A1号	福岡市西区今宿	?	横穴式石室		前方部消滅
39	鍋崎	福岡市西区今宿	62m	横穴式石室	鏡6面・刀・劍・劍甲・円筒埴輪	3段・葺石
40	元岡池ノ浦	福岡市西区元岡	55m		円筒埴輪	
41	高祖東谷1号	前原町高祖	36m	木棺・石棺	刀・劍	葺石(1)
42	師吉	志摩町師吉	約40m	竪穴式石室	鐵斧・鍬先・土師器	葺石(2)
A	泊城崎	前原町泊	32m以上		鐵斧・鎌・陶質土器・土師器	周濠・葺石
B	長須隈	二丈町鹿家	約30m	舟型石棺	須恵器	段築
C	塚田古墳群	二丈町深江	11~20m	竪穴式石室	琴柱形石製品・櫛・須恵器	3基・葺石
D	釜塚	前原町神在	56m	横穴式石室	円筒埴輪・形象埴輪	段築・葺石
E	長嶽山1号	前原町川付	約30m	横穴式石室?		段築・葺石
F	鶴ヶ坂古墳群	前原町飯原	約20m	横穴式石室?		段築・葺石・3基
G	平原	前原町有田		剖竹型木棺	鏡4面・土瓶・刀・刀子・鐵矛・劍・土器・他	方形周溝墓
H	狐塚	前原町曾根	32m	横穴式石室・小石室	劍・刀子・玉・鏡・鐵矛・土師器	3段築成・葺石
I	古賀崎	前原町西堂		横穴式石室	鏡・大刀・馬具・鞍馬・鎧・須恵器・他	
J	向上2号	前原町末松	約40m	横穴式石室		段築・葺石
K	飯氏A1号	福岡市西区飯氏	約30m	横穴式石室	円筒埴輪・(鏡1面・鏡の全具)	葺石

(1) 1984年、前原町教育委員会調査

(2) 1984年、志摩町教育委員会調査

うした既存資料によれば、詳細は略すが、北群の御道具山古墳は墳形上4世紀前半を下らず、ついで中央群・東群が4世紀中葉頃、西群が4世紀後半に前方後円墳造営を開始したと想定される。

開始期の前方後円墳以降、各群の動向は一様でない。後述するように、今宿地区（東群）では6世紀後半にいたるまで40~80mクラスの前方後円墳が継続し首長墓としての系譜を辿ることができるのにたいして、北群では5世紀中葉前に前方後円墳の造営は断絶するらしい。中央群のばあい、5世紀代に入ると前代にくらべて墳丘規模が著しく縮小してしまう。また6世紀代の系譜はよく分らない。西群については、調査例が少なく一貴山銚子塚以降の系譜は今後の課題である。

今宿の前方後円墳

くり返し述べてきたように、今宿地区には高祖山北麓を中心に東西3kmにわたって12基の前方後円墳が分布し、加えて丘陵部には320基にのぼる後期群集墳が分布する。

12基の前方後円墳は、立地状況と墳丘規模で二つのグループに区分される。一つは、山麓丘陵部に独立的に造営され、墳丘全長が50m弱以上のもの。いま一つは、丘陵上にあって群集墳中に取り込まれ、規模も30mをこえない小形のものである。前者8基、後者4基である。小形の4基（本村A1号、谷上B1号、女原C14号、飯氏B14号）は埋葬施設に大型石材を用いた両袖形横穴式石室を採用しており、6世紀中葉以降の造営にかかるものである。これにたいして、前者のグループは最小規模の若八幡宮古墳でも46~48mと推定され、おおむね60m前後のものが多く、小形前方後円墳グループとは隔絶した墳丘規模をもつ。またこの8基の前方後円墳群は、既存資料によって4世紀中葉~後半に造営を開始し、6世紀後半にいたる200年あまりにわたって継続したと想定され、いわば本地区を本貫とした首長層の墳墓系列とみなすことができる。以下、既知の資料を要約して紹介しておくことにしよう。

若八幡宮古墳（Fig. 6）1970年、県教育委員会調査。

高祖山北麓中央の、丘陵端瘤状高まり頂部に築造され北面する。前方部先端が土取りのため崩壊しており、正確な全長を知りがたいが、46~48m前後に復原される。後円部3段、前方部2段築成、斜面に葺石をめぐらせる。後円部中央に、長軸に直交する長さ2.75m、幅0.85~1.2mの木棺を直葬している。棺内から「作鉢・三角縁・二神・獸鏡1、管王14、ガラス小王2、棺外から環頭大刀2、剣1、鐵鎌19、刀子1、鉈1、斧1が、また墳頂部土壠状遺構から銅製有孔盤が出土した。他に墳頂部とクビレ部から布留式中段階平行期の土師器が出土して

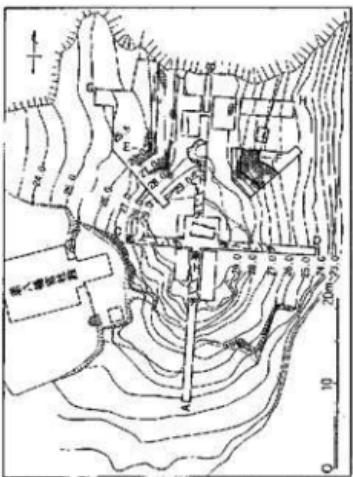


Fig. 6 若八幡宮古墳墳丘図(注21文献より)

おり、4世紀後半の造営とされている。

鎌崎古墳 (Fig. 7) 1981~83年、市教育委員会調査。叶樹から北西に派生する丘陵端に位置する。全長62m、後円部径39m、前方部先端幅22m、後円・前方部とも3段築成、新面に葺石をめぐらし、埴丘裾、I・II段テラス、埴頂の4段に円筒埴輪列を配する。後円部と前方部墳頂には、家・桶・轍などの形象埴輪が配列されていたらしい。埋葬施設と

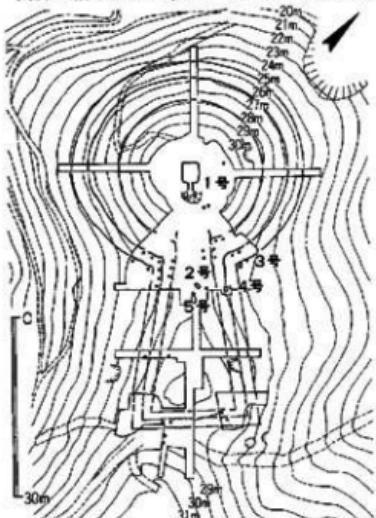


Fig. 7 鎌崎古墳埴丘図(注22文献より)

にされた。おもな遺物として、後漢鏡2、仿製鏡4、長方板革綴短甲、素環頭大刀2、燕手刀子3などがある。石室内遺物、埴輪、土師器などから4・5世紀の交わり前後に造営されたと考えられる。

丸限山古墳 (江戸寛永年間に開口、1969年 墓丘・石室実測、1985年 市教育委員会調査) 本書収録

今宿大塚 (Fig. 8) 1977年、市教育委員会調査。高祖山北麓東部の丘陵端に築造され、西面する。前方部端が掘除されているが全長64m前後に復原される。後円部径30m、円高7mをはかる。埴丘は2段築成で、1段新面にのみ葺石をめぐらした可能性がある。桶形の周濠がめぐり、丘陵高位の南側にのみ外堤の周囲に外濠があつて、一部二重濠となる。二重の周濠外縁長は100mに近い規模である。埴丘I段テラス、外堤、外濠縁に円筒埴輪列がめぐっていたらしいが原位置をとどめるものはなかった。外堤の一部に形象埴輪(武装人物、馬)が配置されていたらしい。他に織席席印文に沈線をめぐらした陶質土器片、第II型式初期の須恵器が出土しており、6世紀初~前半の造営と推定される。埋葬施設は未調査。

以上の4基が、埋葬施設あるいは埴丘調査等によって造営時期を確認しうる例であり、とりあえず4世紀後半から5世紀前半の若八幡宮→鎌崎→丸限山という首長墓の系譜を想定

して、後円部に横穴式石室1、クビレ部から前方部にかけて埴輪棺3、小石棺1が発見された。後円部の横穴式石室は、前方部に向って開口するもので、一辺8m、深さ2mあまりの巨大な墓壙のなかに構築されている。玄武岩割石を小口積みした石室は、幅2.6m、長さ3.4mの玄室に、幅0.5m、長さ0.7mの狹小な狭道部を付す。玄室上部は崩壊していたが、3枚の扁平な大石を天井に架したもので、石室高は2mあまりに復原される。石室内面は赤色顔料を塗布する。玄室床面は礎床、素材を異にした三つの格が認められていた。墓道~狭道部に追葬時の改変が確認され、棺の数に対応する3度の埋葬が明らかになった。石室の崩壊が早かったためか、内部を搅乱されておらず、数多くの遺物がほぼ原位置から検出され、それぞれの棺との帰属関係が明らかにされた。

することができる。そこで残る4基について合せて検討しておこう。

飯氏二塚 高祖山西麓丘陵上の飯氏二塚（子持塚）は、全長55mを測る。前方部幅が後円部径を上まわり、高さも前方部がわずかながら高い。後円部には、長軸に直交して大きな抜き取り穴があり、横穴式石室を埋葬施設としたとみられる。墳丘外周からII型式3～4段階の須恵器片が採集されており、それが直接の決め手にならないとしても、墳丘形態、右室位置から推して6世紀後半造営の可能性が高い。

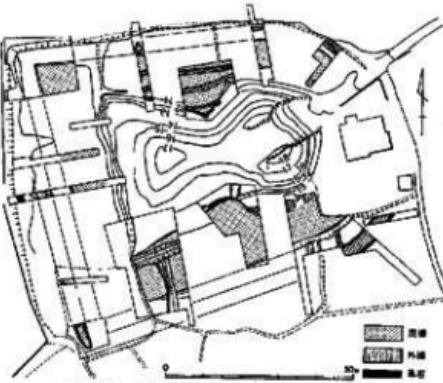


Fig. 8 今宿大塚墳丘図 (24文献より)

下谷古墳 若八幡宮古墳の南方に位置する下谷古墳は、昭和40年代に墳丘が削平されてしまったが、削平前の航空写真から全長50mほどの南面する前方後円墳であったことが知られる。また削平直後に、大形石材が散在していたことが伝えられており、埋葬施設が横穴式石室であったとみてよい。これだけでは年代推定の根拠に不充分だが、横穴式石室構築の石材運用の一般的な傾向からすれば、大形石材の使用は定型化した両袖形石室成立と密接な関係をもっており、6世紀前半以降と推測しうる。さらにおな、あえて首長墓系列のなかで理解しようとするならば、先に記した6世紀後半造営の飯氏二塚の存在を考慮し、下谷古墳は今宿大塚と飯氏二塚のあいだに位置づけられるべきであろう。

山ノ鼻1号墳 最後に残された2基、山ノ鼻1・2号墳に関しては、われわれはほとんど情報を持たない。1号墳は若八幡宮古墳の北に位置し、丘陵の瘤状高まり頂部に築造されている。北面し、全長約48mをはかる。変形が著しく正確をきしがたいが、前方部はあまり開かない墳形をしめす。埴輪、土師器など採集されていない。

山ノ鼻2号墳 2号墳は、谷をはさんで1号墳の西側に位置し北面する。占く墳丘を削平され、わずかに高まりと一部に残存した周濠の凹みから規模を推定しうる程度である。全長約60mをはかる。葺石はあったようだが、埴輪の有無は明らかでない。今宿地区前方後円墳の立地状況と墳丘形態を勘案すると、1号墳のばあい若八幡宮古墳に、2号墳は今宿大塚に近い。積極的な証左とはいえないが、歴史的点を考慮するとともに大形首長墓の系譜を一系とみなすならば、2号墳は九隈山古墳と今宿大塚のあいだに、1号墳を若八幡宮古墳に先行する開始期に位置づけることも可能ではないか、と想定する。

以上を約すれば、今宿地区の8基の大形前方後円墳は、まず4世紀の中頃前後に山ノ鼻1号墳が造営されたのち、若八幡宮→鶴崎→丸隈山→山ノ鼻2号→今宿大塚→下谷→飯氏二塚と、ほぼ200年強にわたる同一の系譜上にあるとみとめることができる。これにたいして、6世紀中葉以降に造営された4基の小形前方後円墳のばあい、立地状況は大形前方後円墳と異なり群集墳中に含まれる様相をしめし、その盟主的な位置にある。6世紀中葉

小形前方後円
墳の位相

頃を両期として、急激に造営を開始した群集墳を成立させた社会・政治的動向のなかで、新たに前方後円墳造営に表象される政治社会に登場した階層を、そうした小形前方後円墳の被葬者と想定したい。見方を変れば、古墳時代社会の体制内階層分化に対応する新たな支配→被支配関係が、群集墳の造営、さらに小形前方後円墳の成立をうながしたと考えることもできる。今宿地区の320基にのぼる群集墳と、わずか4基ではあるが小形前方後円墳の存在は、この地でも、汎列島レヴェルで進行しつつあった、社会的変動をそのまま反映した動きをしめすことが知られるのである。

注

- (1) 「千葉シビナ遺跡」(福岡市報第88集)1982
- (2) 1983年、福岡市教育委員会 調査
- (3) a 中山平次郎「今山の石碑製造所址」(福岡県報 6集)1931
b 下条信行「今山道路」「福岡市立歴史資料館調査研究報告」1 1973
c 「今山・今宿遺跡」(福岡市報第75集)1981
- (4) (3) C 文獻
- (5) 1985年、福岡市教育委員会 調査
福岡市教育委員会「今宿五郎江遺跡」(福岡市報第132集)1986
- (6) 1984年、福岡市教育委員会 調査
(5) 文獻
- (7) 「今宿高田遺跡」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第7集 1982 福岡県教育委員会、福岡市教育委員会は同遺跡を含めて広い範囲で大塚遺跡という名称を用いており、それにしたがって、同遺跡は大塚遺跡高田地区と呼ぶ。「福岡市文化財分布地図(西部II)」1983
- (8) 1983年、福岡市教育委員会 調査
- (9) 1985年、福岡市教育委員会 調査
- (10) 橋口達也「福岡市今山下遺跡の製塙土器」(九州考古学 49・50) 1974
- (11) (3) C 文獻
- (12) 柳沢一男「福岡平野を中心とした古代製鉄について」「広石古墳群」(福岡市報第71集)1977
- (13) (12) 文獻
福岡市教育委員会「相原古墳群」(福岡市報第28集) 1974
福岡市教育委員会「徳永アラタ古墳群」(福岡市報第56集)1980
徳永古墳群調査会編「徳永古墳群」1985
- (14) 1983年、福岡市教育委員会 調査
- (15) 大澤正巳「古墳出土鐵津からみた古代製鉄」「日本製鉄史論集」1983
- (16) 柳田康雄「糸島の古墳文化」「三雲遺跡」III(福岡県報 63集)1982、同文献では39基が掲載されているが、その後の調査で3基追加できた。柳田氏からは多々ご教示いただいた。
- (17) (16) 文獻では、堀深江平野古墳群(3基)、長野川流域古墳群(8基)、有田・井原・三ヶ古墳群(13基)、今宿・周船寺古墳群(12基)、泊古墳群(2基)と、独立する開古墳に区分する
- (18) 福岡県教育委員会「今宿小塚遺跡」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第5集 1977、同文献では古墳名を記載していないが、地名をとって今宿小塚古墳と仮称する。
- (19) 小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究」1952
- (20) 福岡県教育委員会「三雲遺跡」III(福岡県報第63集)1982
- (21) 福岡県教育委員会「若八幡宮古墳」「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 1971
- (22) 福岡市教育委員会「鰐崎古墳調査概報」(福岡市報第112集)1984
- (23) 福岡市教育委員会「九隈山古墳」(福岡市報第10集)1970
- (24) 柳沢一男「今宿大塚」「福岡平野の歴史 緊急発掘された道路と遺物 原始時代~江戸時代」1977

III 研究略史

丸殿山古墳は、江戸時代は江戸寛永年間に地元村民によって後円部石室が発掘され、埋葬人骨と出土遺物の一部が今日に残されている。村民による発掘経過が文書に残され、あるいは「筑前国統風土記」に記載されていることもある。いち早く研究者の取り上げるところとなつた。昭和3年には石室の復元修理が実施され、同3年に国史跡の指定を受け現在に至っている。

この間、丸殿山古墳については、副葬遺物や埴輪あるいは石室構造をめぐって、九州における基準たるべき古墳の一つとして考究の対象となってきた。しかし石室開口以後、墳丘に関する組織的な調査は行われておらず、ほとんど不明なままであった。また、今では横穴式石室として疑うべくもない石室も、少なくとも昭和20年以前は異例の堅穴式石室と考えられていたことが知られる。以下、石室の発見から今日にいたる丸殿山古墳の状況と、研究推移を辿ることにしたい。

石室の開口

石室の開口状況についての記録は、自ら発掘を行った周船寺村民新蔵の手になる口上書^正（寛政8年再写体 妙正寺蔵）と「筑前国統風土記」（1704年 貝原益軒編著）の2種がある。両者の内容は類似するところも多いが若干の差異があり、前者をA、後者をBとして開口時の様子をみておこう。

Aによれば寛永16年（1639）4月12日、夢のなかで観音より丸殿山に籠っているので掘開口年りだすようにお告げを受け、その後たびたび催促された。Bでは、寛永6年（1629）4月11日、新蔵が丸殿山というところに石棺があるという夢を見た。そしてA・Bとも同年8月21日から掘り始め27日に口を開いたと記す。

石室内には石棺があり、A・Bとも「長七尺横五尺」と記し、中央の隔壁に触れている。石棺しかし石棺内の状況は、Aが「シャレコウベ一つ」とするのにたいして、Bでは「髑髏両方に二つあり。一つは女人の首と見えて、手をふれし時刻だけぬ。一つは大なる髑髏にて今猶存せり」とある。どちらにせよ、現存する頭骸骨がこれにあたるとみてよい。またBは棺内に「石の枕有」とするが現存しない。

開口時の出土遺物に関する記事は両者とも少なく、鏡三面、刀、鎌数点のみにすぎず、該期遺物の首長墓としてはやや物たりなさを感じる。鏡についてはBが「大なるは八寸、中なるは五寸五分、小なるは五寸許」としており、大が現存の六鈴鏡、中が二神二鈴鏡に相当するが、小は散逸して所在不明である。

もっとも注意されるのは石室入口部の構造に関する記載である。Aは石室規模を「長式間石室入口 長七尺高空間」として「口は北向にて御座候」とし、Bでは「上は大石をおほひ、口も亦石を以て是をふさぐ」とする。Aの記述は抽象的にすぎるが、Bの内容は閉塞石の存在を予想せしめ、横穴式石室の構造を想定させる。なお現在、石棺周囲には棺蓋と思われる石材が散乱するが、A・Bともこの点についての記載はまったくみられない。

小仏像 またAは、発掘した年の10月18日に再び新蔵が夢のなかで観音の夢をみ、同21日に仏像を石室内から掘りだしたとするが、Bにはこの点についての記載はない。

その後、石室内に仮屋を設けて観音を祀り、慶安二年（1649）五月、福岡藩主黒田忠之から三間四面の堂を給わった（A）が、「寛永年中（1661～1673）頃破して今はなし」（B）とある。

A・B二つの記録内容を比較したばあい、Aは全体的に観音信仰を背景とした発掘譚的色彩が濃く、むしろBに事実に即した記録性をうかがうことができる。同時に、両者の記載にみる奇妙な一致、たとえば石室・石棺の規模についての表記法や数値、あるいは遺物の名称や数値などがある。あるいは、新蔵口上書は「筑前国統風土記」を下敷きにして、寛政8年なる写体の段階で内容の改変が行われたか、もしくは新たに作成された文書の可能性すらあると思われる。

石室の復元修理

石室開口後は内部に祀堂が建て繼がれたが、大正15年に堂が朽ち倒れたのを機にして石室の復元修理が行われた。その間の事情はよく分からぬが、周船寺村民が内務省の許可を受け、当時の福岡県嘱託島田寅次郎の指導のもとに実施したらしい。

修理は昭和3年に竣工したが詳細な記録がないため細部の状況を知りがたい。島田寅次郎による概況報告と掲載写真を手がかりにして、修理状況を観察しておく。

石室の復元修理は、堂宇を撤去したのち、遺存していた奥壁上の天井石をはずし、石室開口後祀堂建立にともなって垂直に積み直されていた側壁上部を再び旧状に近くアーチ形に積みかえ、天井石三石を構架したものである。その際、壁体を積みかえるにあたってセメントで補強しており、旧状をとどめる壁体と容易に鑑別することができる。また一部破損していた石棺も補修しているが、これはあまりにも粗雑にすぎる。

島田報告に移ろう。

「1の堂宇は寛永六年発掘後棺上に建てられたる観音堂のつぎつぎに建て繼がれたるもの。左右後方に建てる大石は古墳石棺の蓋石なり」（傍点筆者、以下同）

「2（中略）正面に積まれたる割石と、其上にある蓋石一ヶは古墳當時の儘を保存したるものにて左右の築石は発掘の際に築直したものとす。石棺に覆ひありし蓋石は、其の破片を取集めたるに棺の右方（向て）にのみ施しありしことを発見せり（破片7ヶ）」



Fig. 9 石室の復元修理

「3（中略）石槨の割石を穹窿形に積直せり。図は其状況なり。左方上部は古墳の築造せられし當時、穹窿形に積まる、割石に押へ石の施されありしことを発見し、其押へ石の残りし状況を写したるものなり。此の押へ石は其の石槨の上部に在りては第一の割石（外部に露出せるもの）を第二の石にて押へ、第三、第四と押へて内面より外へ約四尺相連りて押へられ、其の上下は粘土にて堅めありたり」

以上の島田報告で留意すべきは、傍点を付した部分である。1では入口部左右の板石以外に、島田の記するように堂宇後方の左手に板石の一部が見える（後述するが、島田は大形板石を6枚確認している）。2では石棺に蓋石のある点、3では石室壁体裏込めの状況で、壁面から1m以上にわたって割石と粘土を用いていることを指摘したことである。概略とはいえ、要点を押えた島田の報告は貴重なデータとなっている。

既往の研究

丸隈山古墳をはじめて学界に紹介したのは、明治33年の八木英三郎による「九州地方遺跡調査報告」を鏡欠とする。八木は墳形を前方後円、石室の位置を後円部と正確に認識し、前方部の一部を試掘して埴輪片を採集した。つづいて明治45年、浜田耕作の依頼による出土頭骨の鑑定結果を長谷部哲人が、古墳の概要を浜田が報告した。この段階で、古墳出土人骨鑑定の必要性を訴えた浜田の卓見には敬服する。八木、浜田とも石室内出土と伝えられた仏像に関しては、様式上新しく当初からの副葬品ではないとしている。

大正末年から昭和の初めにかけては、島田寅次郎の精力的な考究がつづいた。とくに「筑紫史談」に寄せた論文は、当時の資料的制約を免れないとしても、精緻をきわめたものであった。いまそのなかで注意されるのは、前述したように板状大石の数である。島田は丸隈山古墳の石室を竪穴式石槨（室）と信じて疑わなかった。そのため石室周辺にあった大形板石をすべて天井蓋石としたが、彼は6石を確認した。現状の石室は3枚の天井石（ほぼ妥当と考える）である。とすれば、残りの3石はどこに用いられたか、という疑問が生じよう。彼がもし、続風土記にいう「口も亦石を以て是をふさぐ」をそのまま評価しておれば、この石室を横穴式石室とみとめた最初の研究者となつたはずである。

じつは、昭和20年以前、島田のみならず丸隈山石室を観察したほとんどの研究者は、異様なる竪穴式石室と見なしてきたらしい。たとえば昭和18年に、九州の横穴式石室を三系統に分類した梅原木清も、丸隈山古墳については触れるところがなかったのである。

この石室をもって、はじめて横穴式石室と断じたのは菅見による限り森貞次郎である。森貞次郎 昭和21年、埴丘測量と石室実測を行った森は、「丘陵の尾根を利用して築造した畿内前期様式の前方後円墳で、狭長な前方部に向って開口する横穴式石室と推定。（中略）羨道は極く短かったと推定される。（中略）壁面は扁平な板状割石の小片を精密に小口積みにした整美なもので（中略）平滑な壁面を表現していて、大陸に於ける塙室墓の制の影響を受けていることが考えられる」と大胆な推測を下した。さらに石人山、浦山古墳などの妻入横口式石棺などとの比較から、それらを通り、もっとも古い段階の横穴式石室と位置づけたのである。いち早く喜田貞吉によって、わが列島の横穴式石室の墓制が、三国時代朝鮮半島より伝來したと指摘されて以来ほとんど具体的な検証をみなかった石室の系譜についてこの指摘は、編年的位置づけとともに卓見というべきであろう。

これにひきつづいて小林行雄^{註15}は、最古の横穴式石室として佐賀県横田下古墳とともに九隈山古墳をとりあげ、遺物の詳細な検討のもとに、ともに5世紀中葉を下らぬとの実年代をしめした（後に、5世紀前半に修正）。

この森・小林論文の影響は大きかったが、一方では、横穴式石室の系譜を辿ろうとする研究も進められた。樋口隆康^{註16}は、九州の横穴式石室を一つは「長方形の玄室で、室の断面形が梯形を呈し、梁石積みで、玄室の奥壁に石棺や石屋形を設ける」タイプで筑後平野を中心とし、いま一つは「方形玄室で、天井穹窿形となり、割石を小口に積んで、玄室内は梆壁によって、四区にわけられている」タイプで熊本平野を中心とする二者に別け、前者を高句麗・百濟、後者を東漢・帶方の古墳と関連をもつとした。この推測は今日では修正されねばならないとしても、列島の横穴式石室の系譜を多方向に求めようとする視点は評価されるべきであろう。

こうした視座のもとに、列島全域の横穴式石室の系譜を総体的に把握しようとする壮大

な試みを行ったのは白石太一郎^{註17}であった。論旨多岐にわたるので、必要部分に限って取りあげれば、九州の初期横穴式石室は、中国の堵塞性墓が朝鮮半島の高句麗・百濟を経由して5世紀中葉に伝播したものとし、北九州に分布するタイプを百濟熊津期（漢城期の誤りか一筆者）、肥後を中心に分布するタイプを酒波期（熊津期の誤りか一筆者）にそれぞれ祖源が求められると、さらに一步踏み込んだ系譜論を開拓した。

その後昭和46～49年にかけて実施された福岡市老司古墳^{註18}の発掘調査の結果は、九隈山古墳をはじめとする初期横穴式石室の系譜と年代観の見なおしをせるものであった。老司古墳後円部の中央に設けられ、前方部に向って開口する3号石室は、幅2.1m、長さ3.2m、高さ1.4mの割石小口積みで、前方部側小口壁の中央上位に外方に突出する棚状造り出しが

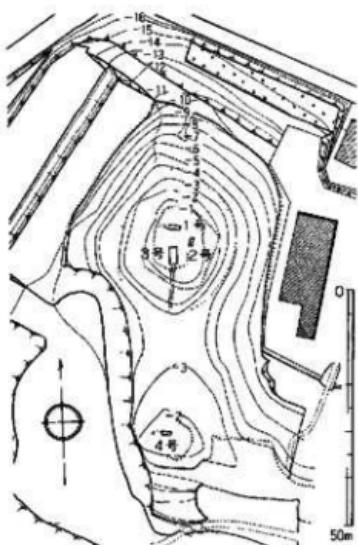


Fig.10 老司古墳壇丘図(注15文献より)

あり、その上部に斜めに板石をかけて閉閉装置としている。石室断面形は、小口壁が垂直に近く積みあがれているのにたいして、側壁はつよい持ち送りをもたせる。この3号石室のはかに、後円部に2基、前方部に1基の小形石室が検出された。いづれも幅1m未満、長さ2～2.5mの小形横穴式石室なのだが、小口壁の一方を開口し板石を立てて閉塞する構造である。こうした構造の石室は、それ以前から北九州を中心に分布することが知られており、「豎穴式横口式石室」と呼ばれていたものに等しい。老司古墳の造営年代は、出土遺物の検討から5世紀初頭を下らぬと報告され、従来最古とされていた丸隈山・横田下古墳石室をさらに遡ることとなつたのである。

小林行雄

樋口隆康

白石太一郎

老司古墳

豎穴式横口式石室

昭和45年5月、福岡市教育委員会は、はじめて九隈山古墳についてのまとまった報告書『九隈山古墳』を作成、刊行した。三島格、小田富士雄、下條信行氏が執筆し、永井昌文氏の頭骨鑑定報告の刊行を載せた精緻をきわめた丁寧な報告である。この段階で、墳丘測量、石室実測、および石室内出土遺物の実測が実施され、そのデータはすべて報告書に網羅されている。ここにいたってようやく、九隈山古墳に関する情報が明らかにされたわけである。

小形竪穴式石室を母胎として、小口壁の一方に開閉装置を設けた竪穴系横口式石室は、いち早く小田富士雄が朝鮮半島洛東江周辺の加倻に類似する石室の存在することを指摘し、さらに「伝統的な土着の墓制が、横穴式石室の伝播に対応したあらわれかたと考えられるので、南鮮と北九州で時を同じくしてあらわれた同性質の文化現象」と解釈した。

こうした竪穴系横口式石室は、老司古墳の発掘によって年代的に遡ることが確認されたとどうじに、3号石室をその最古例と見なすことになった。その後、石山歎、佐田茂、柳沢らがこの石室の系譜と展開を論じたが、竪穴系横口式石室の概念規定に明確な基準がなく、必ずしも充分な成果を得たとはいいがたかった。とくに筆者のばあい、あまりにもその範囲を拡大解釈して混乱を招いた。

昭和50年代に入ると、ソウル市東郊部で百濟漢城期横穴式石室の調査が行われ、その実体が明らかになった結果、改めて初期横穴式石室の系譜を整理しようとする気運が高まつた。永島輝臣は古墳の詳細な紹介とともに、列島横穴式石室との関連を指摘した。朝鮮半島における横穴式石室形成過程を含めて、列島の初期横穴式石室の系譜を論じた小田富士雄は、導入期の相を竪穴系横口式石室と、二系統の横穴式石室（横田下一関行丸古墳の北九州タイプと肥後タイプ）に大別し、九隈山古墳石室を老司3号石室の系譜をひく竪穴系横口式石室のなかに位置づけた。

柳沢は、これまで竪穴系横口式石室としたものを、石室規模とプランの差異にもとづいてA・B二つの型に区分した。A型は大型で幅広いもの、B型は小型で狭小なもの、前者

永島輝臣
小田富士雄

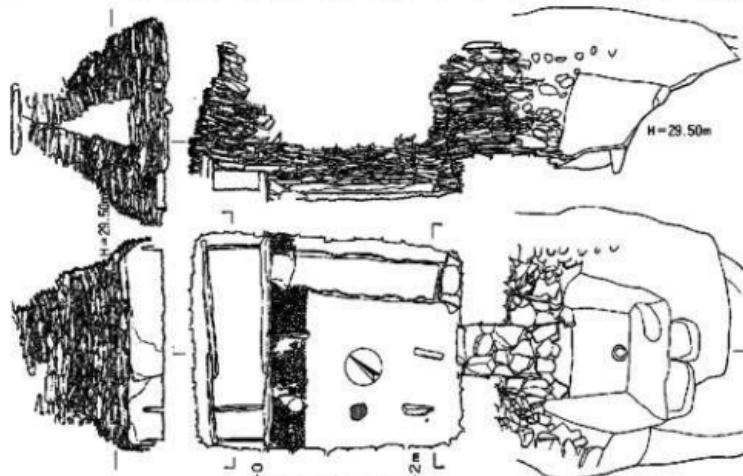


Fig.11 鶴崎古墳石室実測図(注24文献より)

は老司3号石室を最古例として九限山・蘇塚などという系譜が辿れ、基本的には大型首長墓にのみ採用される石室型とした。B型は老司1・2・4号石室を最古例とするもので、一般的に小形墳墓、大形墳の二次的埋葬施設に採用されることが多い。B形石室の成立は、大形のA型石室の影響を受けて在来埋葬施設に開閉装置を取り入れた結果と解釈し、本来竪穴系横口式石室とするのはこの型に限定すべきとした。またA型石室最古例の老司3号石室の平面形は、該期の竪穴式石室に準拠し横口部を付したというべきでなく、あくまでもモデルとして横穴式石室の存在を想定した。九限山古墳石室のばあい、系譜的には老司3号石室上にあるとしても構造上のヒアタスがあり、この間の事情を漢城期石室壁体構築技術の新たな導入という視点から理解しようとした。

昭和56～58年にかけて調査を行った鶴崎古墳の石室は、導入期の横穴式石室を考える上で少くことのできない資料である。九限山古墳の東方3kmの鶴崎古墳は、埴輪・土師器・副葬品などから丸限山古墳に先行し、かつ今宿地区を本貫とした同一首長墓系譜に属する。いわば丸限山古墳被葬者前代の首長墓である。後円部中央に設けられた横穴式石室は、前方部に向って開口し、狹小な羨道部を連接する。石室の壁体構成は全体的に老司3号石室に類するが、明確な羨道をもち、横穴式石室として完成されたスタイルをしめす。この石室を老司3号石室と丸限山古墳石室のあいだにおくことによって、北部九州初期横穴式石室の推移過程を読みとることができるようにになった。

しかしながら、老司、鶴崎古墳横穴式石室の直接の祖型たるべき石室を朝鮮半島内に見いただしえない。丸限山古墳の段階では明らかに漢城期石室の手法が取り入れられている点からすれば、漢城期石室に祖型を求める可能性がある(石村洞4号墳もその一つ)。だが、性急に解決される問題ではなく、広く旧東洋地域から百濟漢城期にいたる横穴式石室の形成過程のなかで深められるべき課題といえよう。

註

- (1) 岡船寺妙正寺藏。寛永8年(1661)再写本に現る。一通は発表した翌年即代に提出した「紙書御出候次第從御上御尊二位に付口上御出候御事」(反りに口上書とした)。いま一通は寛安2年(1649)の「御夢想之文」で、ほとんど同様に所異はない。前記の読み下し文を付録に載せたので参考されたい。
- (2) 元禄16年(1703)11月に完成し、藩主鍋田頼政に獻じ、宝永7年に松原をえた。元禄元年に逆襲の命をうけ元禄元年三月末に松原とおどされている。また元禄14年には徳川家宣の許について松上郡代と連絡をとっている。(「松村日記」「松家日記」「益財実料」2、3、所取(九州歴史資料叢書)。純風十記については埋蔵文化財センター水野継氏から教示をえた。)
- (3) 鳥田寅次郎「丸限山古墳」(福岡県県第1編) 1925
- (4) 鳥田寅次郎「丸限山古墳の保存工事」(福岡県報第3編) 1928
- (5) 久木英三郎「九州地方遺跡調査報告」(人類学雑誌第16卷1号) 1900
- (6) 長谷部曾人「所記「伊豫系主源氏に就て」浜田耕作・附記」(人類学雑誌第28卷3号) 1912
- (7) 鳥田寅次郎「丸限山古墳を廻査して同時代前後に於ける本県内の主なる古墳に及ぶ」(筑紫文庫38) 1926
- (8) 梅原末治「後論」「武前国高麗王塚(御塚古墳)」(東京報告第15番) 1939
- (9) 鳥田寅次郎「北九州古墳の前の考察」(西日本史学研究会) 1949
- (10) 寺田貞吉「古墳時代の研究(下の一)」(考古学地図第24卷第6号) 1914
- (11) 小林行雄「古墳時代における文化の伝播」(史論33卷3・4号) 1950
- (12) 小林行雄「波佐古墳の変遷」小林行雄著「美術山形」 1964
- (13) 鰐口隆雄「九州古墳群の半精」(史論38卷3号) 1955
- (14) 鰐口隆雄「九州」「日本考古学講座」5 1955
- (15) 九州考古学研究室編「老司古墳調査報告」(福岡市報第5集) 1969
- (16) 小田富士雄「九州」「日本の考古学」IV 1966
- (17) 石山徹「石室の構造」「片山古墳群」 1970
- (18) 佐田茂「竪穴系横口式石室の一侧面」(史論112号) 1975
- (19) 椎沢一男「北九州における初期横穴式石室の展開」、「九州考古学の諸問題」 1976
- (20) 富士地区遠藤亮蔵調査「駿賀地区遺跡発掘調査報告」「経國考古学年報」3 1977
- (21) 水島輝崇編「横穴式石室の源流を探る」「共同研究日本と朝鮮の歴史」 1979
- (22) 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」、「東アジア世界における日本古代史講座」4巻 1980
- (23) 椎沢一男「竪穴系横口式石室再考」「森真太郎博士古跡紀念古文化論集」 1982
- (24) 福岡市教育委員会「鶴崎古墳調査報告」(福岡市報第112集) 1964

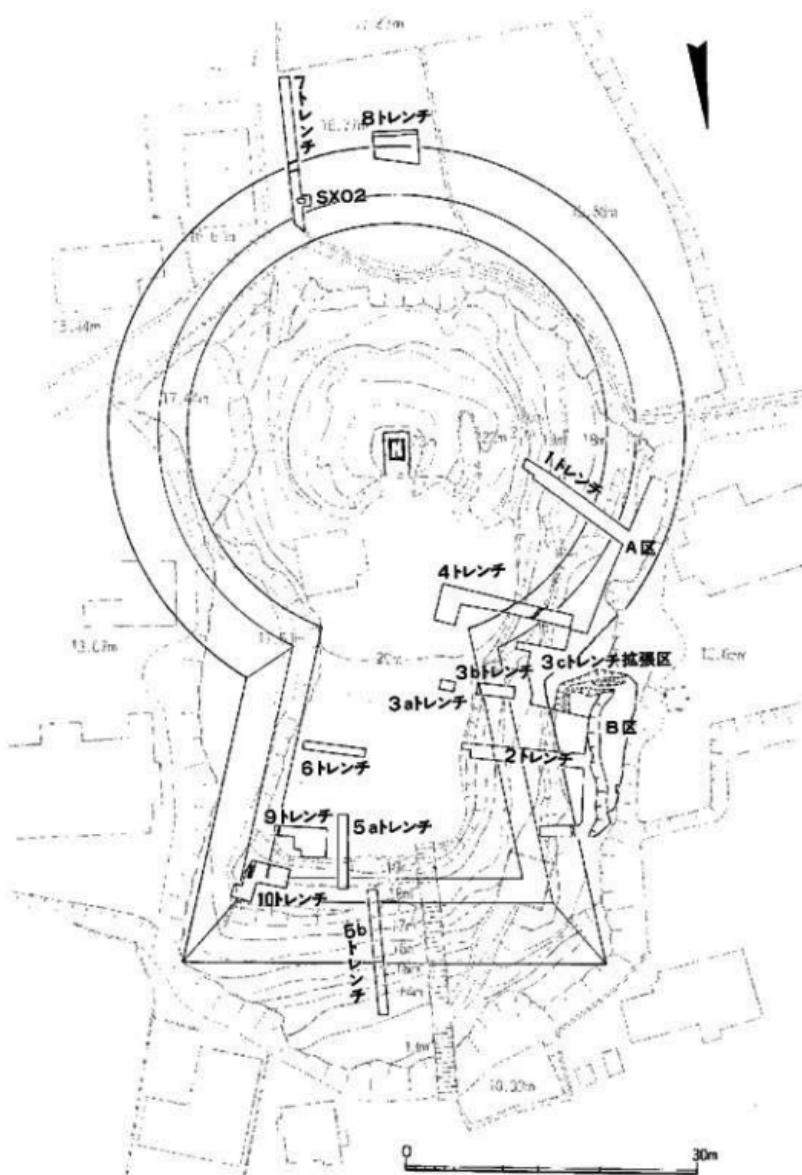


Fig.12 墳丘トレンチ位置図(1:600)

IV 調査記録

1 墳丘 (Fig.12)

1次調査 これまで推測の域をでなかった墳丘についてのデータを得るために、墳丘西斜面を中心にして6ヶ所にトレントを設定し、発掘を行った。しかしトレントの設定にあたっては、既存樹木をいためないという制約のため必ずしも意図した位置に設けることができなかった。発掘トレントは以下のとおり。

後円部 1、4トレント

クビレ部 3a、3b、3cトレント

前方部 2、5a、5b、6トレント

調査結果の詳細は後述するが、3、4トレントでクビレ部から後円部にかけてのI・II段斜面とI段テラス面が検出され、斜面には玄武岩軸石を主体とした葺石があること、またテラス面に円筒埴輪列がめぐることなどが明らかになった。前方部側縁の2トレントでは葺石の遺存はないものの、地山を削りだして整形した墳丘基底面を検出した。前面に設定した5a、5bトレントでも葺石は遺存していないが、地山を削りだして整形した基底面ならびにI段テラス面を確認した。これによって、大まかながら墳形、規模の推測が可能となった。

2次調査 法面工事にかかる範囲のA区（クビレ～後円部）とB区（前方部裾）を主体とし、前方部II段隅角および後円部裾部のトレント調査を行った。設定したトレントはつぎのとおりである。

後円部 A区、7、8トレント

前方部 B区、9、10トレント

A区では1次調査で検出されたI段斜面が円弧を描いて南につづくが、葺石基部の遺存状況はよくなかった。B区では北端部で墳丘基底面の一部を検出したほか、地山削り出しによる整形の端部を確認した。後円部南側の畠地に設定した7・8トレントでは、現墳丘端から南8mの位置にI段斜面基部を検出し、墳丘全長を確定した。前方部隅角の9・10トレントでは、II段斜面とI段テラス面を検出した。

1) 後円部～クビレ部

1トレント (Fig. 13, PL.8) 後円部中央の西斜面に設定した。表土下に20~30cmの擾乱土層をはさんで直ちに地山にいたり、この部分の段斜面、テラス面は削平されてい

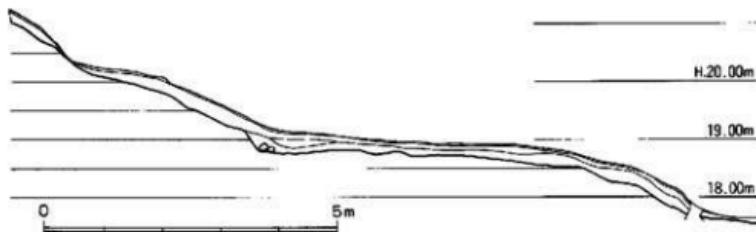


Fig.13 1トレント南壁断面図(1:100)

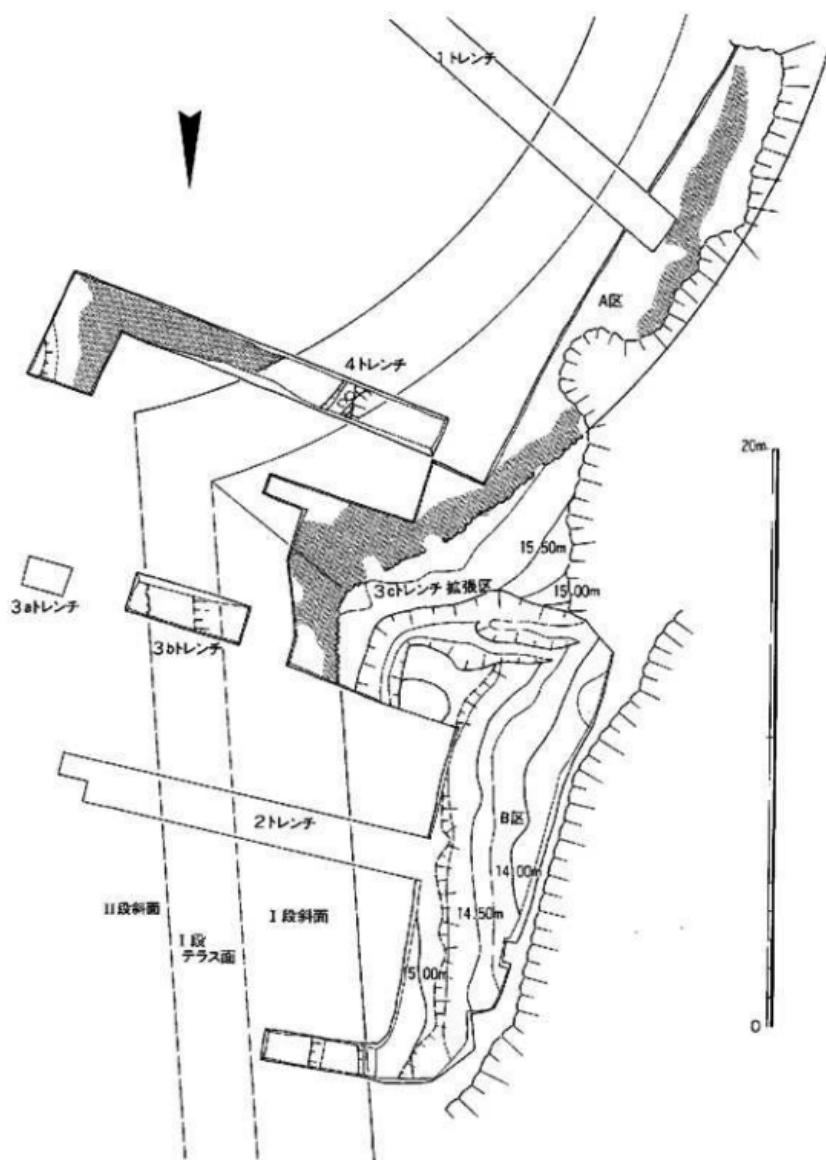


Fig.14 クビレ部トレンチ位置図 (1:200) アミ部は巣石

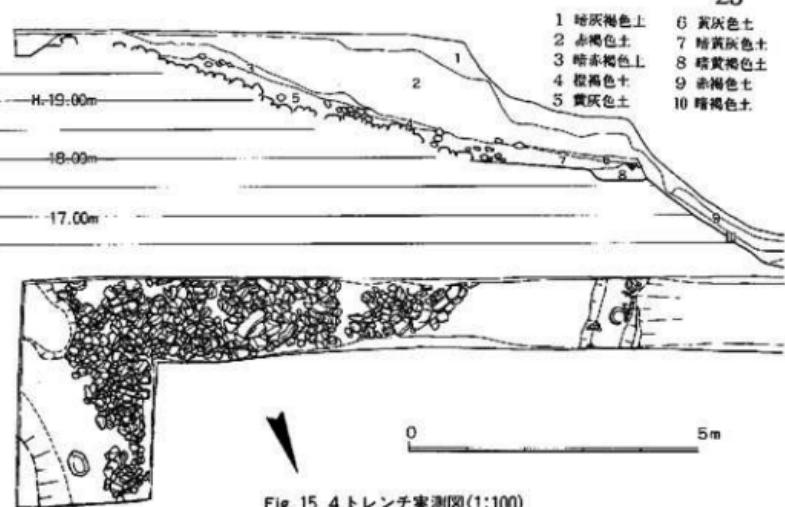


Fig. 15 4 Trench profile survey diagram (1:100)

ることが知られた。しかしトレンチ上端の位置は推定されるⅢ段斜面下部に相当するが、この部分でも盛土がみとめられず、地山削り出しによる成形と確認したことは調査前の予想を覆すものであった。

4 トレンチ (Fig. 15, PL.9) クビレ部に接する後円部に、I・II段斜面の位置確認を目的として設定した。幅1m、長さ14mで、上端をU字形に拡張した。トレンチ最上部一現前方部上面の直下からⅡ段斜面の葺石が検出され、さらに上方へつづくことが知られた。Ⅱ段斜面基部のレヴェルは17.9m、傾斜角度23~25°である。トレンチで検出された

たⅡ段斜面葺石はほとんどが10~20cmあまりの玄武岩板石を使用し、まれに花崗岩板石をまじえる。基部に30~40cmの大ぶりの石材を横位に据え、その上を石垣状に積みあげる。I段テラス面は地山を削り出して整形している。端部が崩壊しているため正確な幅は分らないが、現状最大幅2.9mをはかる。埴輪列はテラス面の端部に近い位置に原位置をとどめて検出された。埴輪列の中心線はⅡ段基部から2.3~2.4mにある。埴輪は幅0.9m、深さ0.25mの布掘りの掘り方に突帯第1段以下を埋める。配列は密で側縁を接するように樹立する。

3 トレンチ (Fig. 17, PL.13) クビレ～前方部を確認するために設定した。樹木に

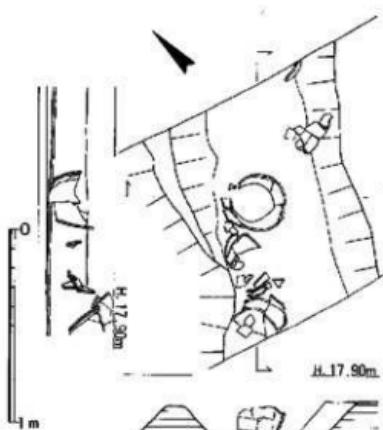


Fig. 16 4 Trench profile survey diagram (1:30)

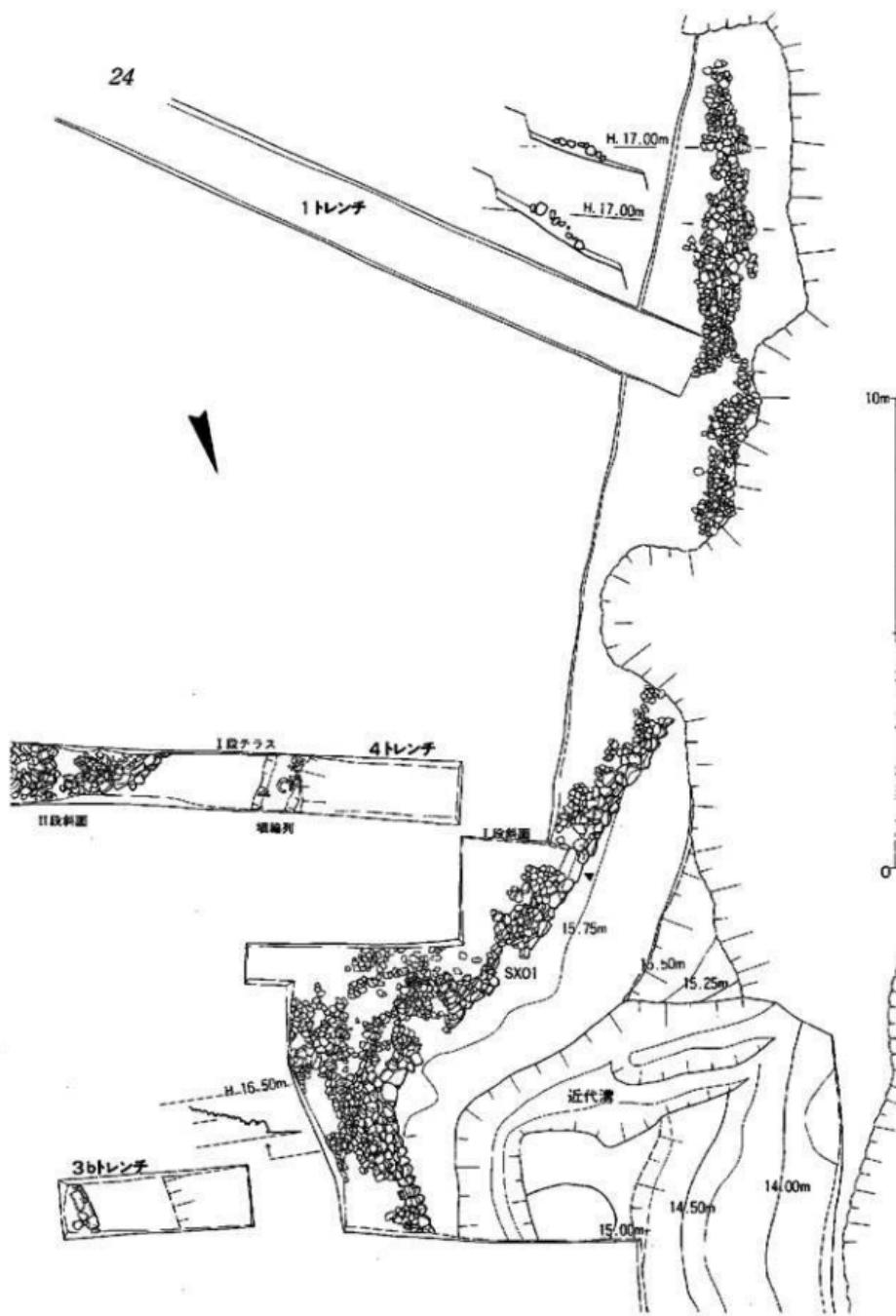


Fig.17 クビレ部実測図(1:120)

制約されて、同一線上の3ヶ所を発掘し、上から3a、3b、3cトレーナーとした。3cトレーナーでI段斜面が検出されたため南側に拡張し、クビレ部を確認した。

3aトレーナーは表土下に近代擾乱の段落ちが検出されたにすぎないが、盛土はみとめられず擾乱土の下はすぐ地山となる。

3bトレーナーでは、現地表下1.3m下に、II段斜面の葺石基石の一部とI段テラス面を検出した。テラス面のレヴェルは18.0m、テラス面はII段葺石基部から1mほどの範囲を確認したが、端部は崩壊し埴輪列は検出されなかった。

3cトレーナーおよび拡張部ではクビレ部から前方部にかかるI段斜面を検出した。墳丘基底

面レヴェルは15.7m、地山を削り出して平坦に整えている。葺石は基石に40~50cmの大ぶりの転石を横位に据え、その上に15~30cmの転石を積みあげる。ほとんどが玄武岩、ごく少量の砂岩と花崗岩をまじえる。斜面の傾斜角度は19~20°ときわめてゆるい。クビレ部付近の基底面はテラス状になっているため、後に種々利用されたらしい。後円部寄りのクビレ部下端で、葺石基石の一部を除去して小上塙S K01が掘られている。平面形は0.75×0.55mの楕円形、深さ0.2m、壁面は焼けて赤変している。埋土に炭が含まれ、底面近くから獸骨と思われる焼成をうけた骨片が少量と、底面糸切りの土師器杯が出土した。またクビレ部から前方部にかけて検出した溝は江戸後半期のものと思われる。

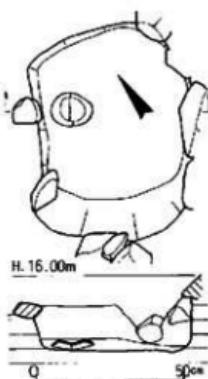


Fig. 18 S K01実測図(1:20)

A区(Fig. 17, PL. 7) クビレ部から南側の後円部I段斜面と墳丘基底面を検出した。クビレ部から9.5mまでは葺石基石が残っていたが、その南側の表土は崩落しており、葺石の一部が残っていたにすぎない。確認できた基底面南端のレヴェルは15.7mでクビレ部付近と同高である。I段斜面の傾斜は18~20°をはかる。なお、I段斜面葺石の使用石材がFig. 17の▲印を付した基石を境にして、南側は花崗岩主体に変化し、全体的に小ぶりとなる。

7トレーナー(Fig. 20, PL. 10) 後円部南側の畠地に、墳丘端と丘陵割断状況を確認するため、幅1.1m、長さ16.5mを設定した。全体に削平を受けているため、はたして墳裾が遺存しているか否か不安であったが、現後円部墳丘の端から7.2mの位置にかろうじて削平をまぬがれたI段斜面葺石を検出した。畠地耕作土の下に暗茶褐色土が堆積し、その下は地山(花崗岩風化マサ土)となる。暗茶褐色土のなかには、埴輪片のほかに土師器、須恵器、瓦器などが含まれている。

墳丘基底面レヴェルは16.3m、I段斜面基部の外側に幅90cm、深さ7、8cmの浅い溝があがる。葺石基石はその溝をさらに1段掘り下げた掘り方のなかに据えられている。この部分の葺石はすべて花崗岩転石である。

このトレーナーでは、墳丘端から墳丘内に3mほど入ったところに埴輪棺S X02を検出した。後の削平や溝のために破壊され、東端部と上半分を欠く。

S X02は、地山を掘削した0.75×0.55m、深さ0.2mの楕円形の土壙内に埴輪棺を据えて

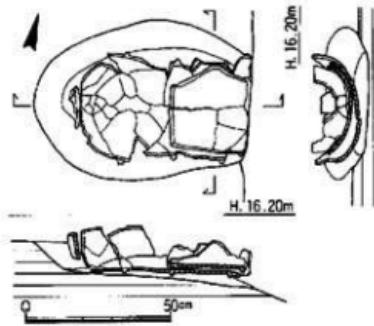


Fig. 19 S X 02実測図(1:20)

いる。長軸は N82° E、棺底面レヴェルは 15.98 m である。棺は I 段突帯上位を打ち欠いた円筒埴輪基部と、口頭部・I 段突帯以下を打ち欠いた朝顔形埴輪を組み合わせ、棺の小口部に他の埴輪片を立てる。遺存した棺の幅 37 cm、長さ 57 cm である。棺内からの出土遺物はなかった。この埴輪棺は後円部 I 段斜面の上部に位置し、棺の埋置にあたっては葺石を取り除き、少なくとも 1.5 m 以上の深さに墳丘を掘り込んだ異例といえる。

8 レンチ (Fig. 21, PL. 12) 7 レンチで墳丘端が検出されたので、その延長部の遺存状況を確認するため、同一墓地内の西側に 4.5 × 3.5 m の範囲に設定した。土層堆積状況は 7 レンチに等しく、I 段斜面葺石は耕作土直下に検出した。7 レンチ同様、墳丘端の外側に幅 1 m あまり、深さ 5 ~ 10 cm の浅い溝がめぐる。ここでは葺石はその底面から積みあげたもの。基石を横位に据える。確認された範囲での葺石使用石材はすべて花崗岩転石である。なおこのレンチでは数個の柱穴が検出されたが、いずれも墳

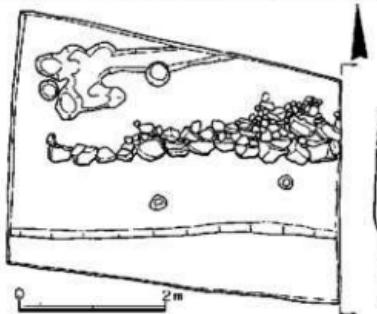


Fig. 21 8 レンチ実測図(1:80)

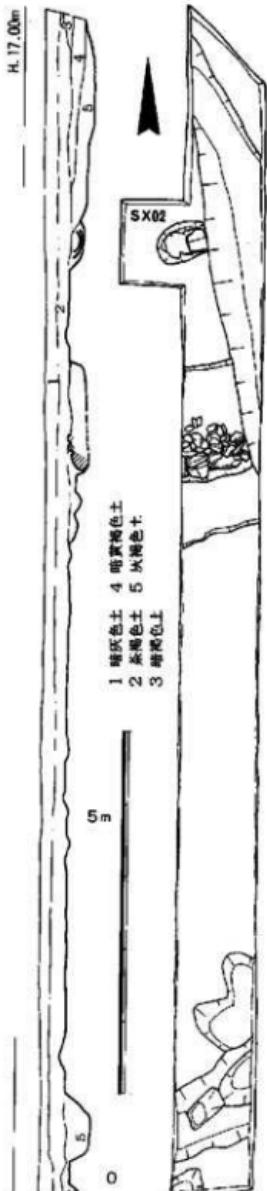


Fig. 20 7 レンチ実測図(1:80)

丘削平後に掘り込んだもので中世以降と考えられる。

2) 前方部

2トレンチ (Fig. 22) 前方部の西側縁に、幅1m、長さ15.5mに設定した。I、II段斜面とも葺石は遺存していなかったが、I段斜面下部に地山を削り出して整形した基底面を確認した。またII段斜面下にテラス面らしい平坦面を検出したが、擾乱を受けているらしい。基底面レヴェルは15.2mである。

5トレンチ (Fig. 22, P.L.12) 前方部前面に設定したが、樹木のため軸を同一線上にとることができなかった。上部の5aトレンチは幅1m、長さ8mでII段斜面の検出をはかった。表土下に厚さ10cmほどの整地層をはさんで、直ちに填丘盛土となる。盛土は硬くしまっており、赤褐色土と黄緑色土を細かく互層に積む。トレンチ下部でI段テラス面と思われる平坦面を検出した。検出面レヴェルは17.9mである。

下部の5bトレンチは、幅1m、長さ13mに設定し、I段斜面と填丘基底面の検出を行った。その結果、地山を0.6mほど斜めに削り出して整形した基底面と、その上部の盛土によるI段斜面およびI段テラス面端部を検出した。I段斜面の葺石は一部を除いて転落していた。基底面レヴェルは15.1m、I段斜面傾斜角度は約28°、斜面長6.5mをはかる。I段テ

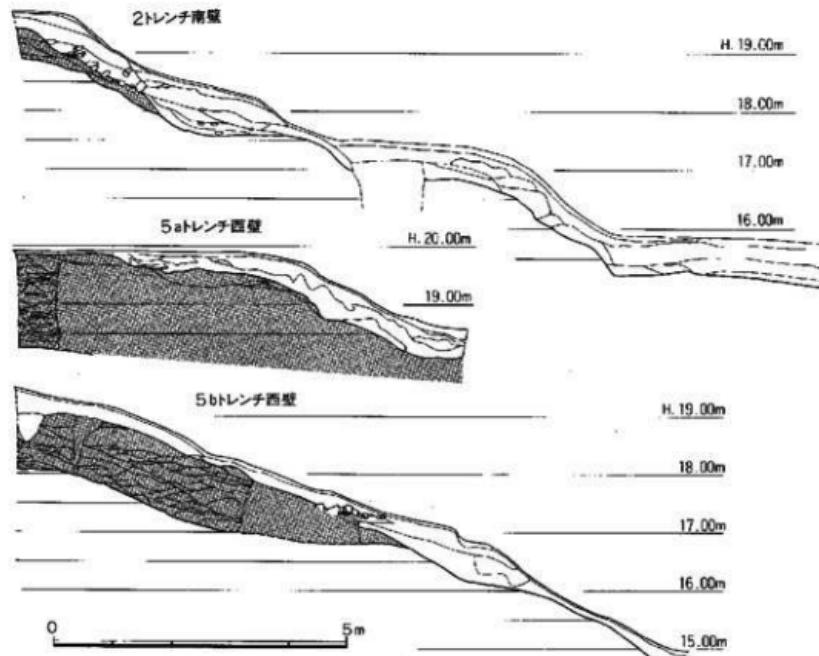


Fig. 22 前方部トレンチ断面図(1:100)
アミ月は填丘盛土をしめす

ラス面レヴェルは17.9m、幅約2.5mと推定される。墳丘第Ⅰ段の盛土は、基底面削り出し部端から版築状に細かく行われている。断面の観察から、上下2度に分けた盛土過程が知られた。

6トレンチ (Fig. 23, PL.14) 前方部の現墳頂面東側に幅1m、長さ6.5mに設定してⅡ段斜面の検出をはかった。表土、整地層下に厚さ30cmあまりの墳丘盛土があり、旧地表面にいたる。Ⅱ段斜面に相当するトレンチ東半分は擾乱の段落ちで削平され、旧状をとどめていなかった。

9トレンチ (Fig. 24, PL.15)

前方部Ⅱ段の東北隅角を確認するために幅1m、長さ6mに設定し、後に北側を 2×3.5 m拡張した。表土下30cmは整地層が広がり、その下に墳丘盛土がある。しかしトレンチの西半分は近代の擾乱が表土下1.2mまで入って段落ちをなす。東端近くで、擾乱下にわずかに地山を削り出したⅡ段斜面の端部と葺石を据えるための浅皿状断面形の溝を検出した。なおトレンチの一部を地山まで掘り下げたところ、弥生後期後半の竪穴住居址1棟を検出した。限られた部分調査のため、住居址の規模を把握しえなかったが、プランは方形でベッド状造構を備えていると思われる。壁高40cm、壁面下に幅10~20cmの壁溝がめぐる。住居址の埋土は黄灰色土、少量の弥生後期の土器片が出土した。



Fig. 23 6トレンチ断面図(1:100)

アミ目は墳丘盛土をしめす

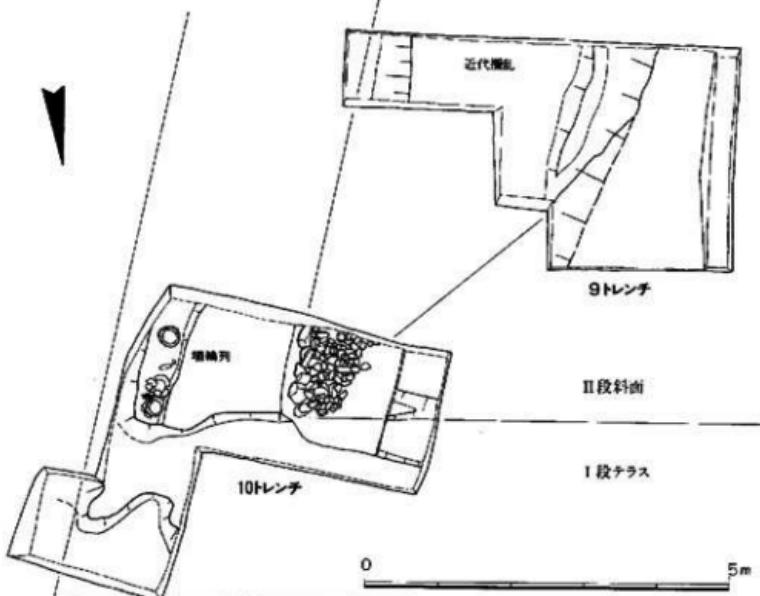


Fig. 24 9,10トレンチ平面図(1:80)

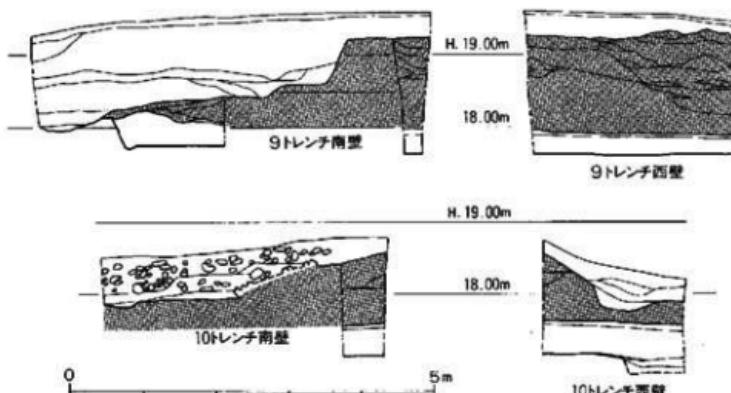


Fig. 25 9, 10トレンチ断面図(1:80) アミ目は埴丘盛土をしめす

10トレンチ (Fig. 24, PL. 16) 9トレンチの斜面下に幅2m、長さ4.5mに設定した。東端から埴輪列が検出されたため、さらに北側へ 2×2 m拡張した。このトレンチではさいわいⅠ段テラス面とⅡ段斜面の隅角を検出することができた。Ⅱ段斜面の側辺部側はテラス面から0.5mの高さに葺石が残っていたが、前面側の葺石はすべて崩落していた。葺石は基石に30~40cm程度の大ぶりの転石を据え、その上に20cm前後の転石を石垣状に積みあげる。使用石材は花崗岩と玄武岩がほぼ均等の割合で混合する。斜面傾斜角度は約20°をはかる。葺石を積みあげる前に、テラス面に幅90cm、深さ20~30cmあまりの浅皿状断面をなす溝状の掘り方をめぐらせ、その中に葺石基石を配置する。したがって、葺石の欠落した前面側も、おおよその基石配置線を想定することができる。

Ⅰ段テラス面は盛土で成形されており、高さ17.9mをはかる。円筒埴輪列は側辺部側のテラス面に検出された。列の中心線はⅡ段斜面端から1.8mの位置にある。埴輪は深さ10~20cm、幅60~70cmあまりの布掘りの掘り方に密に樹立する。トレンチ内ではⅠ段突堤以下を残す3本が検出された。いずれの埴輪も内部に小石をつめて樹立の安定をはかっている。

3) 小結

以上、各トレンチごとに調査結果を記述したが、個別にすぎて全体的な見通しに欠ける。以下、若干の要約をつけ加えておきたい。

1) 塩丘は、丘陵端の高まりを利用して構築する。後円部はトレンチで確認された範囲内ではすべて地山を削り出しての成形である。塩丘成形の盛土がみとめられたのは、6トレン

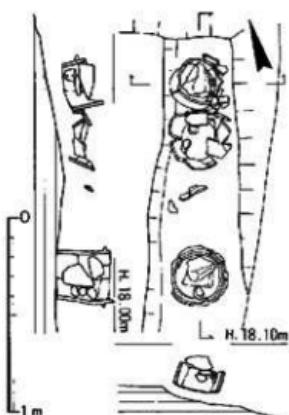


Fig. 26 10トレンチ埴輪列実測図(1:30)

より北側、すなわち前方部の中ほどから前端部にかけてである。

2) 墳丘段築は、前方部・後円部ともに2段まで確認された。前方部は明らかでないが、後円部は3段築成と思われる。

3) 墳丘基底面は、地山削り出し成形部はもとより、盛土部分においても地山をわずかに削り出して平坦に整形している。基底面レベルは、最高位で16.3m、最低位15.1mと若干の高低差がある。

4) 各段斜面は葺石が張りめぐらされている。基石に40~50cmの大ぶりの石材を横位に据え、その上に小ぶりの転石を石垣状に積みあげる。使用石材は西クリビレ部が玄武岩を主として花崗岩、砂岩を一部にまじえるにたいして、後円部南端では花崗岩を主とするよう、部位によって多少の変化がある。しかし葺石実施工程をしめすような区画線はみとめられない。

後円部南端の7、8トレンチでは1段斜面基部の外側に浅い溝がめぐるが、他のトレンチでは検出されていない。

また前方部では2段斜面葺石の基石を配置する際、テラス面に溝状の布掘りの掘り方を掘削している。

5) 各トレンチから多量の埴輪片が出土したが、樹立の原位置を検出したのは、4・10トレンチの1段テラス面である。いずれもテラス面の端部に沿って布掘り掘り方を掘り、その中に互いが接するように密に配列されている。

2 出土遺物

2 次にわたるトレンチ調査によって出土した遺物は、古墳に伴う埴輪のほか、墳丘下に埋没する弥生時代集落に関する土器・石器、さらに古代末～中世のものがある。

1) 墓輪 (Fig. 26~28)

1~10トレンチ、A・Bの2区でコンテナ約11箱分の埴輪が出土した。その大半は転落したもので縦片となっている。

埴輪の種類には、円筒・朝顔形埴輪と形象埴輪がある。

なお、埴輪はすべて土師質、器表に黒斑があるものが多く、いわゆる野焼きによる焼成と解される。

円筒埴輪

基部から口縁部まで接合できる資料がないため、全形を知ることができない。したがって、正確な突帯段数が知りがたく、透し孔の位置から3段の突帯が一般的であろうと推測するにとどまる。突帯の形状は、a 細くて突出度の高いもの、b 断面が方形で比較的高く突出するもの、c 断面が台形で全体に純重なつくりのもの、の3種がある。正確な比率をだしていないが、約4割がb、残る6割をaとcで折半する程度の割合である。

透し孔は突帯の直下にある。1段につき、対向する2個所に穿たれる。確認したところでは、第1段に逆半円形、第3段に逆三角形の透し孔を配置するのが多く、第2段に付した例はみられない。

基部成形は、高さ8~12cmの粘土板を3枚合わせたものが一般的である。基底部は不調整のものが多いが、削りを加えたものもある。

外面調整はタテハケ1次調整で終了するものが原則、2次調整タテハケを確認したものは朝顔形埴輪1例にすぎない。

内面調整は、ユビナデ、タテハケ、ヨコハケ、ナナメハケ、ナデのほか、少数のケズリがある。ケズリは板状工具小口端を用いた粗いもので、縦、横方向の2種があるが、前者2点、後者1点の破片を確認した程度である。

全体的に丁寧なつくりで、器壁のとくに薄いものがごく少量含まれる。器表の残りのよいものには、突帯第1段以上に赤色顔料の塗布がみられる。

円筒埴輪は、形態、調整手法のうえで3種に大別される（なお朝顔形埴輪のはあい、円筒部だけでは一般的の円筒埴輪と区別できるだけの特徴、差異をもたない。したがって、円筒埴輪として扱うものの中に、朝顔形埴輪の円筒部も含まれていると思われる。諒とされたい）。

I類 (Fig. 27-1~5, 9~13, Fig. 28-14~18, P.L. 23) 口径30~35cm、低径22~28cmで、器壁が9~21mmとやや厚いもの。おそらく埴輪全体の9割以上を占めるであろう。突帯はa、b、cがあり、その上下に強いナデを加えて付着させている。この埴輪は、直径に対して、突帯間の幅が広く、とくに第1段が25~28cmと高い。突帯段数を仮りに3段とした場合、器高は約70~80cm前後に復原される。

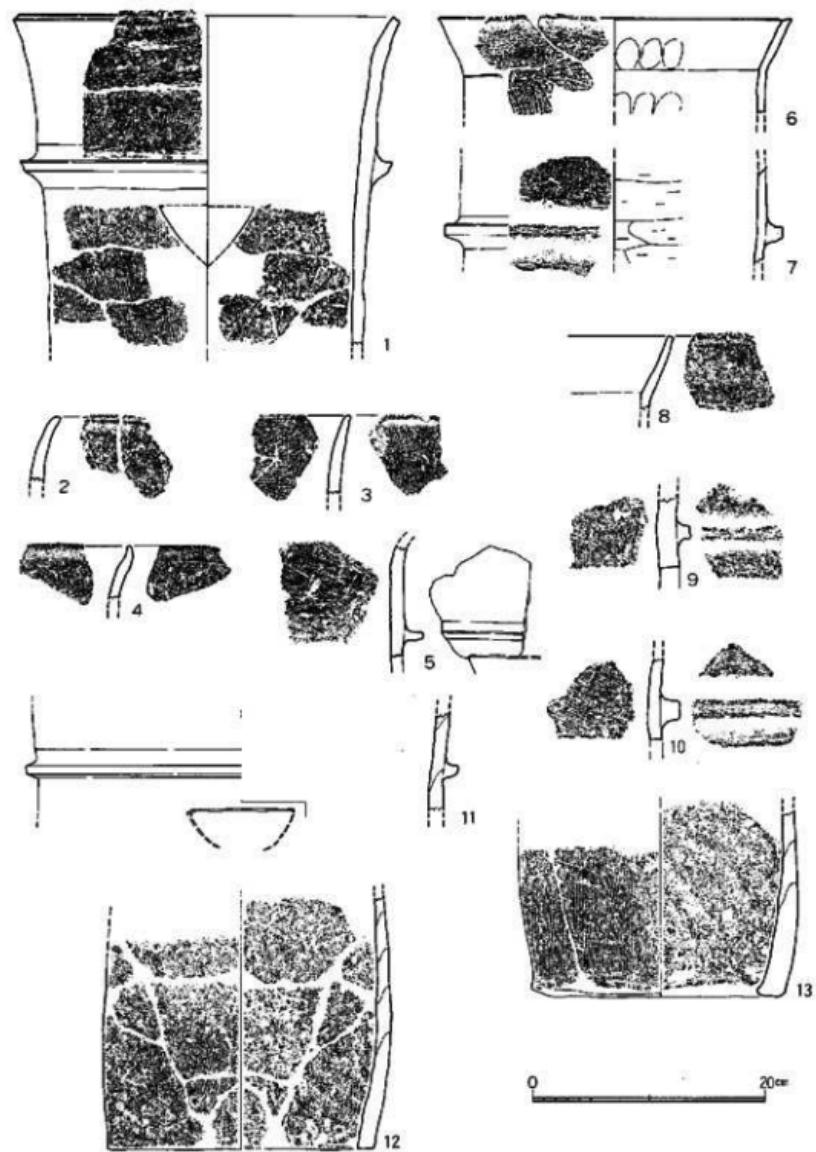


Fig.27 墓輪実測図 (1:5)

0 20cm

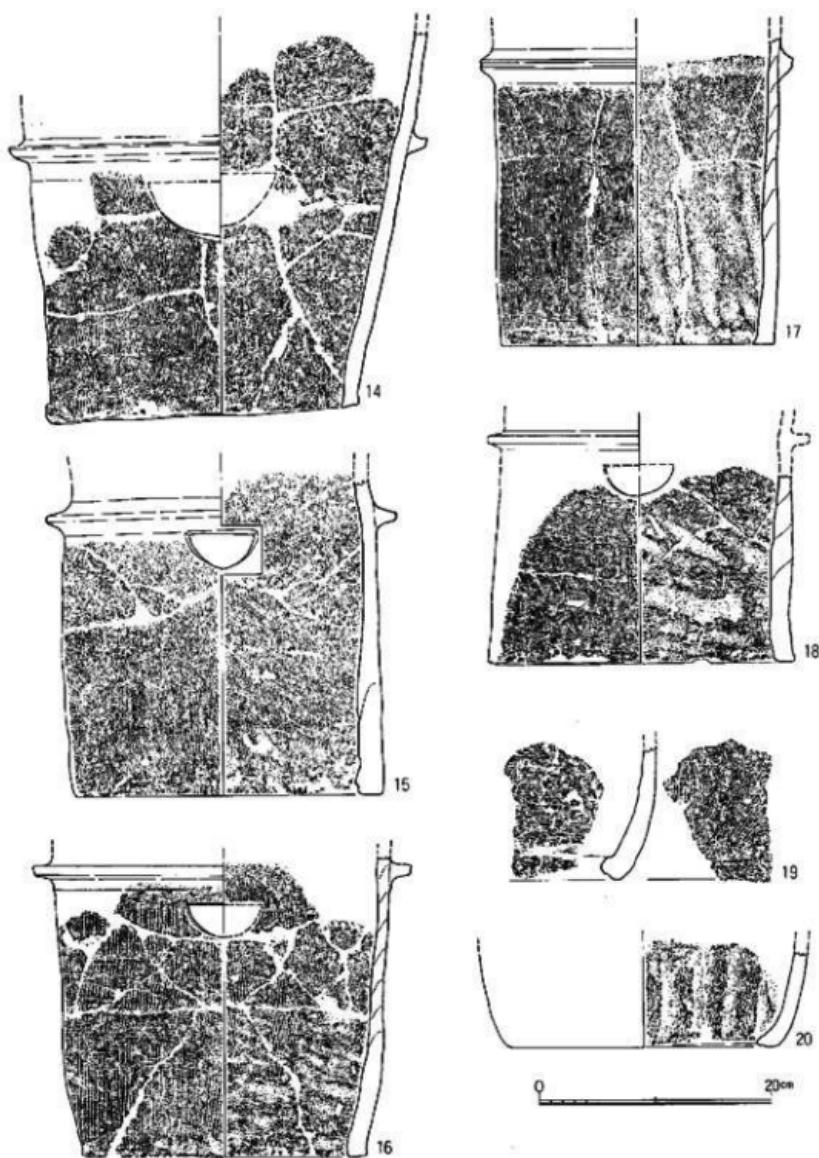


Fig.28 填隙实测图II(1:5)

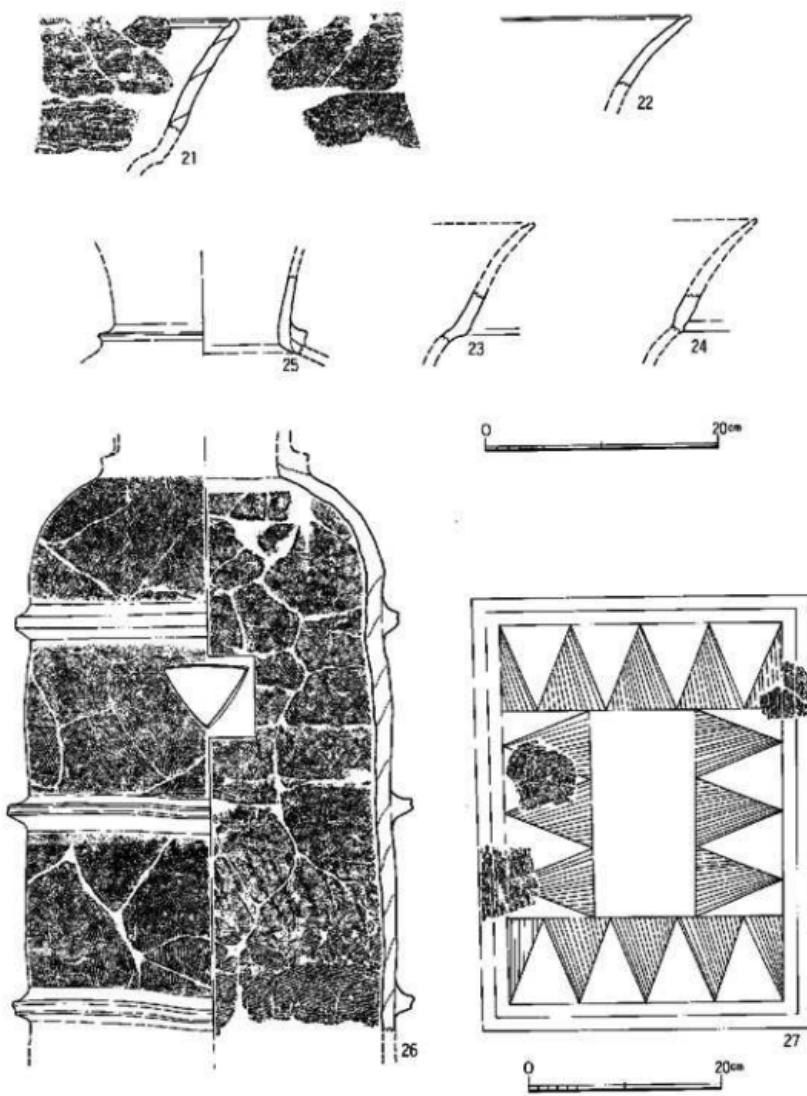


Fig. 29 墓室実測図III(1:5、27のみ1:6)

口縁部はあまり開かず、垂直ぎみに延びてわずかに外反する。1・2のように端部が面をなし、ヨコナデによって中央が凹むもの、3のように丸くおさめるもの、4のように内寄ぎみにおさめるものがあるが、1・2のタイプが多い。口縁部の内外面はすべてヨコナデ調整である。基底部外面は未調整のものがほとんどだが、14では丁寧にヘラケズリを加えている。

外面調整は前述したようにタテハケ1次調整のみである。1・16のように部分的にヨコナデを加えることもあるが、2次調整とよべるほど全体に行われていない。内面調整にさほど差異はない。第1段の下位から中位までは下→上、あるいはナナメ上につよいユビナデを行い、その上部がヨコ、ナナメのハケメとなる。突帯内面は、接合時にナデを加えるため、ハケメを消去する例が多い。

胎土には2・3mm程度の石英、長石粒が含まれ、他に雲母粒も目につく。全体に橙褐色系の色調で、第1段の破片には必ず黒斑がみられる。

II類 (Fig. 27-6~8, PL. 24) 器壁が6~8mmときわめて薄く、口縁部が短く、強烈に外反する。破片総数で10片あまりときわめて数少ない。6は口径30.2cm、7は突帯径29.1cmをはかる。7・9とも口縁下5cmほどから強く外反し、端部は鋭い面をなす。6の外面には、ヘラ書きによるゆるい山形沈線があるが、小破片のため、何らかの文様を描いたのか、一回するものか明らかでない。7の内面は横(右→左)位のケズリ調整である。内面にケズリを加えた破片はすべて器壁が薄く、この類に限定される手法かもしれない。胎土の混入砂粒の内容はI類に等しいが、混入度がやや少ない。

III類 (Fig. 28-19~20) 基底部のつくりと調整から他と区別したが、上部の形態は明らかでない。いずれも、基底部が著しく内湾するが、製作中の尚重にのみ要因を求ることはできない。19のはあい、外面がヨコハケ、内面タテ・ヨコハケ調整が、明らかに他類と異なる。20の内面はユビナデでI類に近い。

朝顔形埴輪 (Fig. 29-21~26, PL. 24) 全体を知りうる資料はない。朝顔形埴輪と認定した破片は図示したもの以外に、口縁部片8点、頸部片3点がある。

26は7トレンチで検出した埴輪棺S X02に転用されていたもの。口頭部と円筒部第1段を意図的に打ち欠く。最上段突帯径は32.5cm、現高49.4cmをはかり、口頭部と、円筒部第3段に逆三角形の透し孔を穿つ。外面調整はタテハケで、2・3段にのみ2次調整タテハケが観察される。内面はハケメ、ユビナデを交互に繰り返し、最上段肩部は丁寧なナデでおわる。調整の差異を乾燥単位に由来するとすれば、円筒部の成形に3回の乾燥段階があったと考えられる。胎土は円筒埴輪I類に等しい。茶褐色を呈し外面に黒斑がある。

口頭部全体を知りうる破片がないため正確を期しがたいが、頭部は約10cmほどの長さに外傾ぎみにのび、屈曲したのち外反する口頭部につづく。25は頭部下半の破片で径24.2cm、肩部に断面方形の突帯を付す。23・24は口縁部と頭部の境にあたる破片。小片なので詳細を知りがたいが、突帯を付きずにゆるい模となるらしい。

21・22は口縁部破片。21は外反度が弱い。口端内面がわずかに凹み、端部を丸くおさめる。22は強く外反し、やはり端部を丸くおさめたもの。外面タテハケ、内面ヨコハケ調整、端

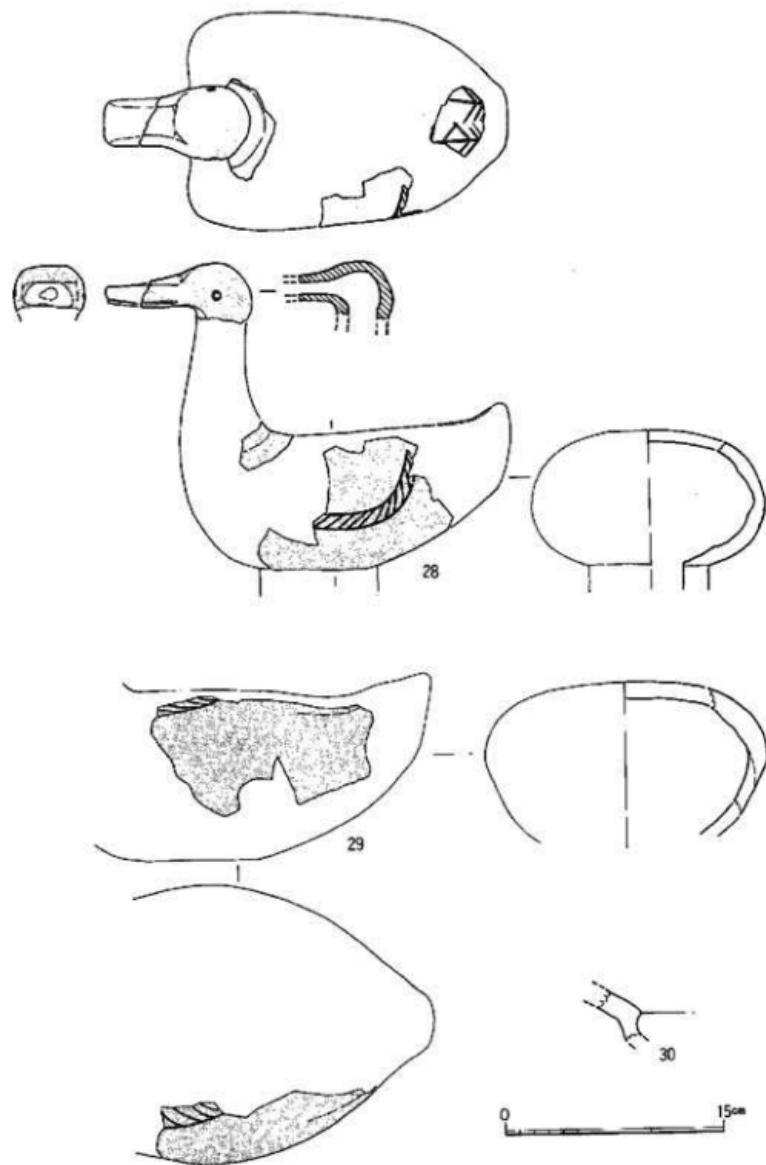


Fig.30 墓輪実測図 IV (1:4)

部はヨコナナデ調整をほどこす。

形象埴輪 (Fig. 29・30, PL. 25) 横1個体と木鳥2個体がある。いずれも4トレンチ上部から出土し、後円部墳頂もしくは丘段テラス面からの転落と考えられる。

橋 (27) 同一個体と思われる3点の破片があり、34×45cmの矩形に復原した。岡上では上辺を直線としたが、中央が山形になるかもしれない。内区文様は不明、外区は2条の界線の内側に外向の锯齿文をめぐらせる。ただし下辺鋸齿文の方向は確定できない。外区外縁のみ縁取り状に赤色顔料を塗る。胎土は他の埴輪とくらべて砂粒混入度が少なく、全体に丁寧なつくりである。

木鳥 (28・29) 破片部位が全部描かず、全形は知りえない。

28は、頭部、頸部、体部の一部が遺存し、大略図示したように復原されるであろう。頭部は扁平に近く嘴に向かってゆるく下降する。嘴は扁平で側縁中央に上下の境線を表現する。目は竹管を押して表現する。体部断面形は中央で16×9.5cmあまりの楕円形をなし、左右側縁に2本の弧線をヘラ描きして斜線を充填する。風切羽の表現であろうか。尾部上面はほぼ水平、尾端が上方に跳ね上がり、この部分に矢羽状のヘラ描き文を二本並列する。尾羽を表現したものであろうか。全体に丁寧なつくりで、砂粒の混入はほとんどなく、内外面をナナデ調整する。茶褐色、全面に赤色顔料を塗る。円筒部は径8cmあまりで、体部中央下に接合した痕跡が残る。

29は、28より一まわり大きめであるが、体部から尾部にかけての一部の破片のみで全体を知りえない。他に同一個体の破片が10点あるが接合しない。28に近い形態であろう。体部側縁の上部に28と同じように風切羽を表現したヘラ描き文様がある。胎土は28に似るが器壁がやや厚い。色調は暗茶褐色で外面に赤色顔料を塗る。

その他に、形態不明の形象埴輪の一部とみられる破片がある(30)。小破片なので径がとれず、また上下の関係も明らかでないが、一応図示した方向でよいと思われる。逆にしたばあい朝顔形埴輪の口頸部の境に似るがカーブが合わない。内面は粗いタテハケ、外面は丁寧なナナデ調整、凹部はヨコナナデ調整である。

土師器 (Fig. 31) 本来、古墳に供獻されたと思われる土師器が2点出土した。

壺 (1) 10トレンチ出土。体部上部から頸部にかかる部位の小破片。外面器表は剥落し調整不明。内面に指頭押圧痕がみられる。

高壺 (2) 4トレンチ出土。脚筒～壺底部の破片。脚筒外面は粗いミカキに見えるが縦方向のヘラケズリ、内面は横位のヘラケズリ、壺部の器表は剥落しており、調整不明。接合部は円錐充填である。

2) その他の遺物 (Fig. 32)

弥生土器 (1~4)

1は甕底部片。A区出土。器表が剥離して調整不明だが、底部内面の形態的特徴から弥生中期初頭に限定できる。暗褐色。砂

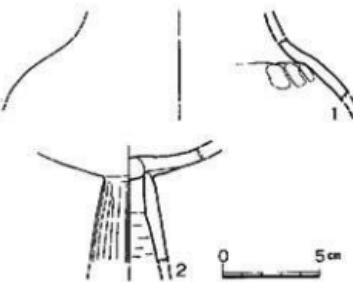


Fig. 31 土師器実測図(1:3)

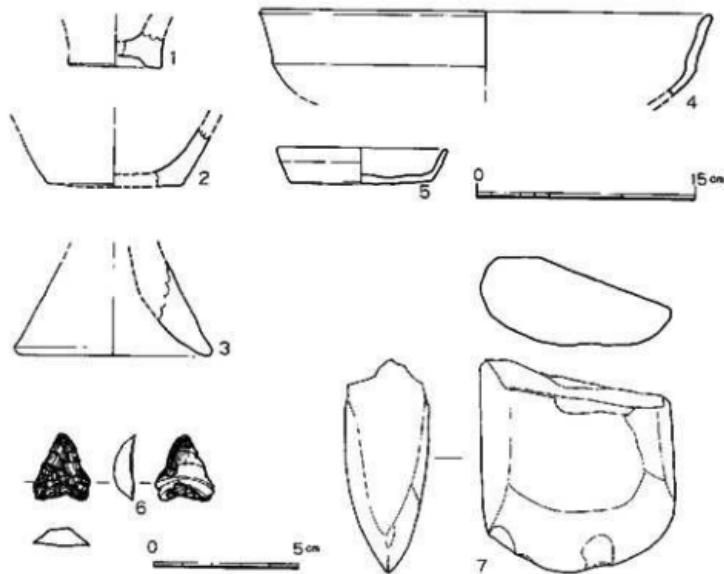


Fig. 32 弥生土器、土師器、石器実測図(1:4、1:2)
粒を多くまじえる。

2~4は、いずれも弥生後期後半に限定される。2は底盤。レンズ状にゆるく弯曲する。器表は剥落して調整不明。3は器台下端の小破片。器肉が厚く、純重なつくりのタイプである。器表が剥離して、調整不明。胎土に3~4mmの粗い砂粒を多量に含む、橙褐色。4は口径が31cmに復原される高环の口縁部である。内湾ぎみにのびる环部から、屈折して短く直立状に外反する口縁部につづく。器表剥離のため調整不明。砂粒の混入が多い。赤褐色。2・3は9トレンチの墳丘盛土、4は6トレンチの墳丘盛土から出土した。

上師器（5）

3cトレンチ拡張部で検出したSK01から出土した。口径9.5cm、器高2.4cmの杯である。器表が剥離しており外底の切り離し痕は不明だが、おそらく糸切りと思われる。茶褐色。砂粒の混入は少ない。14世紀代か。

石器（6・7）

石基（6） 3トレンチ上部出土。黒曜石製。基部に浅い抉りをもつ。裏面に主要剥離面を大きく残す。背面の風化がすんでいる。

石斧（7） 9トレンチの墳丘盛土から出土した。玄武岩製。上部を欠く、敲打後研摩したもの。

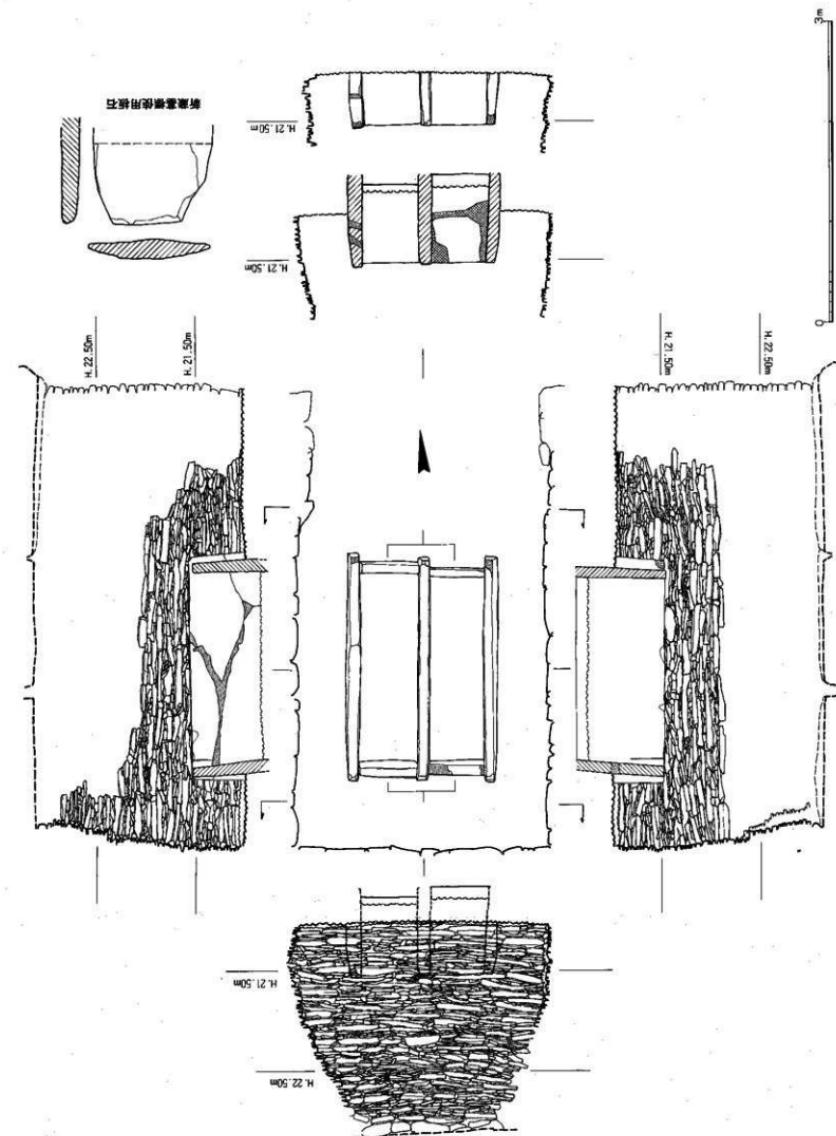


Fig.33 横穴式石室実測図(1-40) 石室のアミはセメント接着をしめた

3 横穴式石室 (Fig.33)

後円部中央の墳頂近くに構築された横穴式石室は、墳丘長軸からわずかに西に振れて前方部に向かって開口する。石室開口方向はN5°10' Eをはかる。

開口時に入口部が破壊され、その後墓宇建立にあたって手前2枚の天井石がはずされ、加えて側壁上部壁体が垂直に近く積み変えられたことは、研究史にみたとおりである。昭和2~3年に行われた修理は、原状をとどめる壁体はそのまま生かし、江戸時代積み変え部を新たに旧状近くに復元した。その際、奥壁上に遺存した天井石を移動して転石一段分を積みあげ、墓宇の入口左右に置かれていた2枚の板石と合わせて、三石からなる天井石を横架した。復原された石室は長さ4.6m、高さ2.1mである。

修理された玄室壁体のうち、石室構築時の姿をとどめている範囲は、現奥壁のすべてと左右側壁下半部である。平面形の奥壁幅2.5m、現状先端幅2.38mに移動はない。側壁で原壁体構成状をとどめる範囲は、左側壁で奥壁から3.95m、右側壁3.9m、それから先端の0.7mあまりは復元修理されたもので、原状の壁線よりも内側に入り込んでいる。また玄室の高さは断定しがたいが、奥壁最上段の積みあげ一段分を除去して、約2.0mに復元される。

周壁の壁体は、長さ40~50cm、厚さ5~10cmの玄武岩割石にさらに小形の扁平削石をまじえて小口積みしたもので、一部に転石が使用されている。壁面は削面を丁寧に描いて凸凹が少なく、全面に赤色顔料が塗布されている。

玄室の断面形は、奥壁中央部上端の出が床面より約30cmと傾斜がゆるいのにたいして、側壁の出は60~70cmと大きく穹窿状に持ち送り、蒲鉾形に近い。

奥壁と側壁の隅角は、床面から約1mのあいだは端正に突き合わせて縁を形づくるが、その上部は両側からかみ合わせているため丸みを持ち稜線が不明となる。

現在床面は、径3~5cmほど転石が5~8cmの厚さに敷きつめられている。おそらく旧状に近い状況をとどめたものと憶測され、本来砾床であったと推測する。

石室のほぼ中央に、中央壁（間壁）を共有する二基並例の組合式箱形石棺が設けられて石棺いる。石棺材は石室床面よりも約20cmあまり深く埋め込まれていること、中央間壁が正しく石室主軸線上に位置することからみて、石室企画の段階で設計に含まれていたと思われる。なお石棺の一部にセメントによる補修が見られるが、棺自体の移動はみとめられず、ほぼ原状を保つと思われる。

石棺は、長側、小口を各1枚づつの硬砂岩（松浦砂岩）切石を使用し、計7石で構成する。二基並例の見かけ（石室床面下が見えない）の幅1.47~1.52m、長側石3枚の長さは2.23~2.38mときわめて正確に作成されている。棺身の厚さは、長側石10~15cm、小口石7~12cmで、棺内面に赤色顔料が塗られている。

奥壁に向かって左をA棺、右をB棺とすれば、A棺の内法は幅55~57cm、長さ183cm、B棺は幅58~59cm、長さ189cmと、全体にB棺がわずかに大きめである。棺床は現在小さな礫が5~10cmの厚さに敷かれているが、これは本来のままとは思えない。現状での棺の深さは、A棺80cm、B棺70cmで一般の箱形石棺とくらべるときわめて深いものである。な石棺お、筑前国統風土記によれば「石の枕有」とあるが、現在棺内にみることができない。し

かし、石棺周囲に散在した石材を検討した結果、2点の石材がその嵌補として選びだされたので後述する。

この石棺がきわめて正確に組まれていることは先に述べたが、長側石内面の6箇所に小口石のアトリの位置をしめすと思われる線刻がある。現小口石に合うものと若干ずれるばかりがあるが、修理時の追刻とは考えられず当初に付されたものと考えたい。刻出部位は、いづれも長側石上端から垂直に20~30cmあまり、幅・深さとも3~5mmで刀子などの先端の鋭い工具を使用したと思われる。A棺長側石内面には両小口部分に縦線がみられる。ち

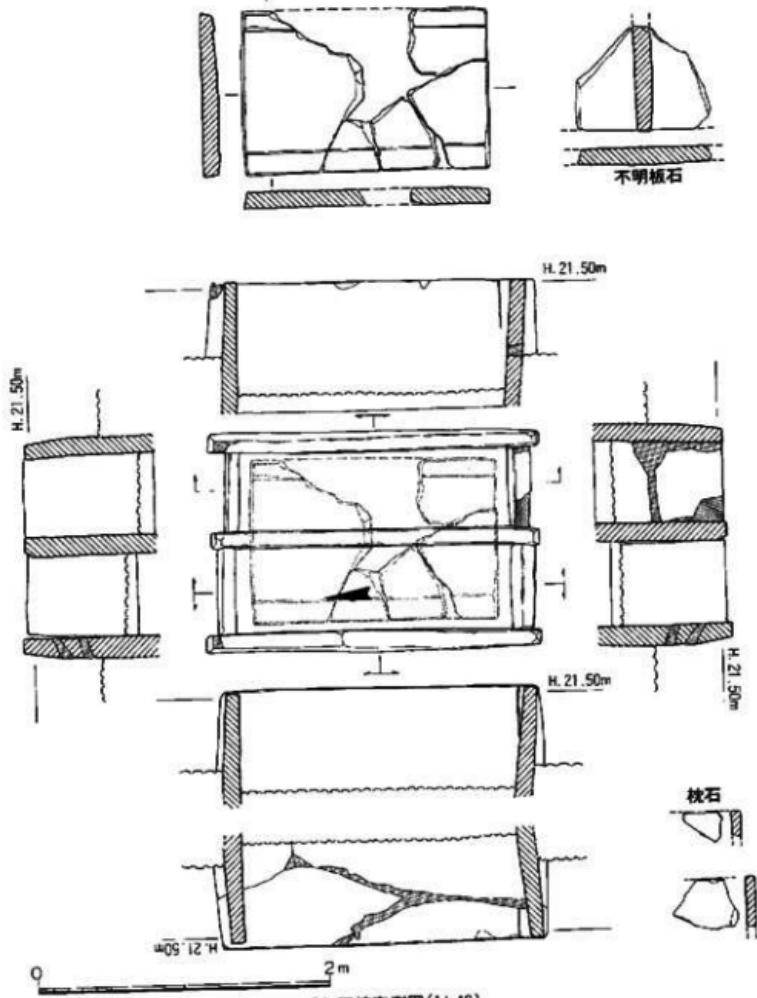


Fig. 34 石棺実測図(1:40)
アミ目はセメント補修をしめす

なみに実長をとると、左側石で1.77m、右側石1.79mである。

さらにこの右棺で注意を要するのは、右棺の丁寧さばかりではなく、加工手法と長側石の形態にある。棺材内面は敲打によって平坦に整えられているが、上端に近い部分はさらに 石棺の加工ノミ加工が加えられる。中央の間駄のはあいは、さらに上端面をノミ加工した後に、端部を1~1.5cm幅で面取りしている。左右長側石のはあい、棺内面を垂直に整えているのにたいして外面をゆるく外膨みに仕上げている。この手法は明らかに長持形右棺に由来すると考えられる。

この点に関連するのが、棺蓋と推測される大形石材の形態である。棺蓋の存在は早く島田寅次郎によつて紹介されたが、今回の調査に際して、石棺周囲に散在した石材を撤出し 墓室復原を試みた。その結果、全体の1/5程度の欠失部分があつたが、Fig.34にしめすような形態を確認した。接合部がきっちり合わないところがあるため、若干の差異があるかもしれないが、長さ1.69m、幅1.1~1.13m、中央の厚さ12cm、松浦砂岩製である。

下面は敲打によって平坦に仕上げ、全面に赤色顔料が塗られている。上面中央部分の調整は分からぬが、周縁部にノミ痕が残る。上面の形態は、中央がわずかに高まって低い蒲鉾形の断面をなす。どうじに、長側外縁に沿つて、12~16cm幅、高さ2cmあまりの凸縁をつくりだしている。一方の凸縁幅が他方よりもわずかに広くなっている。

この石材をもつて直ちに、右棺に伴う蓋と断するにはいささか問題がある。ひとつは法量のうえで、棺身内面よりも小さいことがある。Fig.34に、ちなみに破線でその組み合わせを図示したが、幅、長さとも不足する。とはいひ、中央間壁上にバランスよく置けば乗らぬことはないし、いずれか一方の棺上に寄せれば蓋としての機能を果たすことはできる。本來この棺身に伴うか否か疑問の余地はあるにせよ、同一の石材を使用する点、かつ上面にみられる膨みが棺身長側石と同じ手法で長持形右棺加工技法との関係を示唆することから、他所からの持ち込みとするよりも、何らかの事情で棺身との規格が合わなかつたと推定しておきたい。

さきに石枕ではないかと想定した石材は、一つは27×21cm、厚さ7cm、一端部に外側縁が残る破片である。いま一つは42×35cm、厚さ7cmの破片で一端部に外側縁が残る (Fig.34)。この2片は同一個体の可能性もあるが接合しない。石材は棺に等しい。上・下面是敲打とノミによる平坦な仕上げで、抉込みはみられない。両面ともに赤色顔料の塗布が観察される。外側縁は、ノミによる削りで端部を丁寧に面取りしている。加工手法からすると石棺の中央間壁に近いが、間駄は完存しており、かつ厚さが異なる。小口の補修部分に入る破片かと思って検討したが、この2点の入る余地はない。また痕跡程度とはいえ、両面に赤色顔料がみとめられるため、石枕としての可能性が高いと考えられる。

石室内には、いま一点使用部位不明の石材片がある (Fig.33)。91×73cm、厚さ12cmで一端部に平坦に仕上げた外側縁が残る。片面の器皿が剥離し調整不明だが、残る片面は敲打調整で平坦、全面に赤色顔料がみとめられる。破片規模からみて、かなりの大形材の一部と推測される。また片面に赤色顔料を付した点からすると、先にみた棺身と棺蓋の規格差によって生じた空隙部補充材とも想定しうるが、破片部位が少なく断定にいたらない。

注

- (1) 石室周壁、石棺に塗られた顔料はベンガラである。右棺床面および枕石に塗られた顔料はベンガラに微量の朱HgSが含まれる。光学顕微鏡による観察(400倍)とケイ光X線分析の測定結果より、各々の顔料をベンガラFe2O3、朱HgSと同定した。昭和文化財センター本田光子氏の分析による。

V 総括

1 墳丘

今回の墳丘調査は性急な事情のもとに計画され、かつ樹木を損わないという制約のもと必要最小限の範囲で実施した。したがって得られたデータのみで墳丘全体を理解するには不充分な点が少なくない。しかし大形前方後円墳の墳丘調査例の乏しい九州においては貴重である。また基準的な位置をしめる古墳ということもあって可能な範囲内での復原を試み、残された課題は将来に託したい。

立地 高祖山北麓、周囲との比高差が8~10mの丘陵尾根端に位置する。墳丘はもともと丘陵端が瘤状に高まつたところに後円部を配し、その上方を削り出したいわゆる丘尾切端で築造されている。現在、切断部周辺は宅地あるいは畠地として変形し旧状をとどめないが、後円部墳丘端から南に20~25mあまりの範囲が凹地として半周しており、この部分を切断部と想定したい。前方部を丘陵尾根下方の北に配し、後円部に構築された横穴式石室は、まさに北方玄界灘に向かって開口する。古墳造営当時、このあたり一帯は砂丘内海となっており、古墳から0.5kmほど北側まで海が入り込んでいたと推定され、海上からきわだった墳丘の姿を見ることができたと思われる。

墳丘の復原 先に述べたように、墳丘復原にはデータ不足だが、まづ得られたI段テラス面以下データを整理し墳丘プランと規模を推定する。

まづ、各トレンチでの墳丘底面（I段斜面葺石基石下部）とI段テラス面（II段斜面葺石基石下部）レヴェルを整理すると、つぎのとおりである。

Tab. 3 墳丘トレンチ計測表

単位:m

	後円部			クビレ部	前方部					
	7トレンチ	8トレンチ	4トレンチ		3トレンチ	2トレンチ	B区	5トレンチ	5トレンチ	10トレンチ
I段(基底面)	16.3	16.2	—	15.7	15.7	15.7	15.2	—	15.1	—
II段	—	—	17.9	—	18.0	(17.6)	—	17.9	17.9	17.9
I段傾斜角	—	—	—	18°~20°	17°	19°	—	—	28°	—
II段傾斜角	—	—	23°~25°	—	—	—	—	—	—	20°

上の数値で気付くことは、基底面レヴェルが最も高い後円部端（8トレンチ）で16.3m、低位の前方部端（5bトレンチ）15.1mと、全長80mを上まわる規模の墳丘を削り出した割には、比高差1.2mと水平に近く実施されたことである。さらにI段テラス面に至っては、搅乱のための低くなっている2トレンチを除いて17.9~18.0mとほとんど水平に整えられ、きわめて正確な施工が知られる。したがってI段斜面の比高差は、前方部端で2.9m、クビレ部で2.3mとなる。未確認の後円部南端のI段テラス面レヴェルが他所と同じと推定すれば、この部分での比高差は1.8mとなり、I段斜面は後円部から前方部に向かってわずかに下降する側面観をなしたと思われる。

I段テラス面の幅は後円部と前方部で若干の差異がある。後円部でもクビレに近い4トレンチでは、埴輪列の中心がII段斜面基石から2.4mの位置をめぐることから、布掘り掘り方の幅を加味すると3mを前後するテラスの幅が推定される。これにたいして、前方部隅角の10トレンチで検出された埴輪列の中心は、II段斜面基石から1.8mの位置にある。後円

部同様、埴輪列がテラス面端近くにめぐると思われる所以、前方部テラス面の幅は後円部よりも狭く2.5m前後と推定される。

I段テラス幅を以上のように推測するならば、発掘調査で作成された実測図から、II段斜面以下の墳丘規模はつぎのように復原される(Fig.35ではII段テラス上も図示するがこの点については後述する)。

Tab.4 墳丘規模計測表

	全長	後円部径	後円部高	クビレ部幅	前方部長	前方部幅	前方部高	■平均径 m
I段	84.6	59.4	2.3	30.4	29.6	43.8	2.85	
II段	67.8	49.6	3.0	15.0	25.8	26.4	—	

なお、径円部径と中点の算出は実測図の操作によって行ったが、径の中点は石室奥壁の中央に求められたことを付記しておきたい。

以上の復原は、データから推測可能なII段斜面基部までだが、後円部に構築された石室は最上段のIII段に位置することはたしかである。石室入口部の墳丘中にしめる位置は、初期横穴式石室の系譜を考えるうえで重要な鍵であり、III段についても検討を加える。

まづII段テラス面の高さからはじめよう。前報告によれば、前方部は今よりも1mあまり高く残っていたと記す。それは石室復元修理時の写真によっても明らかである(Fig.9-II段テラス面1)。また4トレンチ上端で標高20.2mまでII段斜面葺石が確認されていることから推して、少なくともII段斜面は石室床面に近い21m前後まで存在していた可能性がある。

II段斜面の上端部を21m前後とする理由の一つは、前方部II段の上にはたしてIII段が存在したかという問題とも密接に関係する。仮りにいま、II段斜面上端を4トレンチで検出された20.2mとしたばあい、II段テラス面幅をI段のそれよりも狭い2mとしても、III段基部のクビレ部幅はわずかに6m強しか取れない。それでもなおIII段を構築しないこと

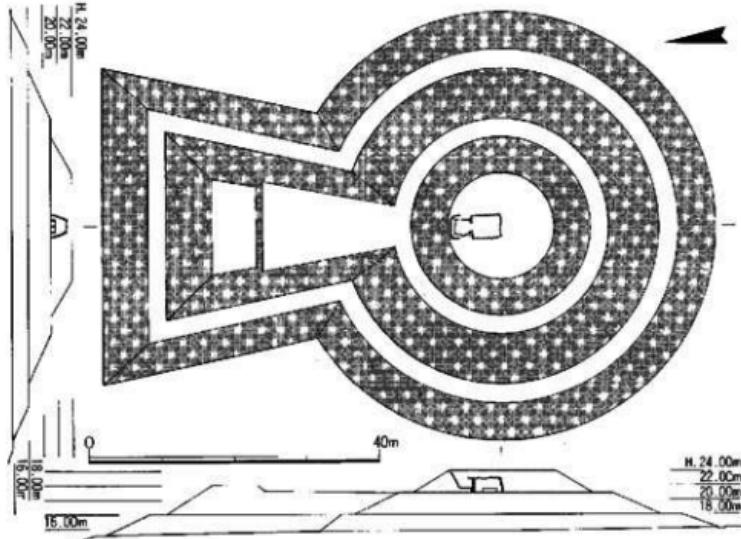


Fig.35 墳丘復原図 (1:800)

はないが、墳丘構成上のバランスが著しく崩れる。またこのばあい、前方部Ⅱ段斜面は比高差2.2mにたいして斜面長3mとなり、じつに47°という急角度に構築されねばならない。以上の点から推して、前方部にⅢ段は設けられることなくⅡ段構成であったと推定し、Ⅱ段テラス面の高さを石室玄室床面に近い21m前後と想定する。

このようにⅡ段テラス面の高さを21m前後とすると、Ⅱ段斜面の傾斜角度(22°~26°)から導きだされるテラス端径は約30mである。テラス面幅を推定する根拠は何もないが、
Ⅰ段斜面 Ⅰ段テラス同様に埴輪列がめぐらしていたことは各トレンチでの埴輪出土状況から明らかで、同様な配置手法とすればテラス面幅は2.5~3mと推測可能である。したがってⅢ段斜面の基部径は24~25m前後の可能性がつよい。

つぎに現存する石室から墳頂面の高さを考える。復原される石室天井高は標高23.0m、
後円部墳 天井石の厚さを20cm前後と推定する。その上の盛土を鋤崎古墳や笠塚古墳例から30~40cm
頂高 と想定すると、墳頂平坦面は23.5mを前後する高さに復原される。そのばあいのⅢ段斜面の高さは約2.5mで、Ⅱ段斜面の高さよりもわずかに低い程度と想定される。

先に述べたように、墳頂平坦面の規模は石室入口部の構造と不可分の関係にある。九隈山古墳石室の入口部は、純論から先にいえば後円部墳頂面から急傾斜で下降する堅坑状の墓道が接続すると考えられる。そのばあい、墓道端は少なくとも墳頂平坦面内に収まると考えられる。その要件を満たす墳頂平坦面径は、石室の位置からみて直径15m前後と推定される。

以上を約して、基底面での墳丘規模と推定した各段の規模はつぎのとおりである。

Tab.5 墳丘規模復原値

	全長	後円部径	後円部高	クビレ部幅	前方部長	前方部幅	前方部高
I段	84.6	59.4	15.7(2.3)	30.4	29.6	43.8	15.15(2.85)
II段	67.8	49.6	18.0(3.0)	15.0	25.8	26.4	18.0
III段	—	25	21.0(2.5)	—	—	—	—
墳頂	—	15	23.5	—	—	—	—

埴輪の配列

すべてのトレンチで埴輪を採集したが、樹立の原位置をとどめた埴輪列は、4・10トレンチでⅠ段テラス面をめぐる一部が検出されたにすぎない。Ⅱ段テラス面を検出していないが、Ⅲ段斜面調査の段階で上部から転落した相当量の埴輪を採集しており、同様に埴輪列がめぐらしきことは明らかである。とすれば、該期の前方後円墳がそうであるように、墳丘の各テラスと墳頂面の3段に埴輪列がめぐらしていたと思われる。

検出されたⅠ段テラス面をみると、埴輪はテラス端近くに幅0.9m、深さ0.3mあまりの溝状をなす布振りの振り方の中に突帯1段下まで埋め込んで樹立している。互いの側縁を接する密な配列である。円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪の破片もあり、一定間隔で朝顔形埴輪が配列されたと思われる。しかし、樹立状況をとどめる埴輪は突帯第1段の上位を欠き、円筒部をもって朝顔形埴輪と特定しないためその配置状況を知りがたい。

Ⅰ段テラス面の埴輪列がトレンチで検出されたのと同様な手法で配列され、かつ墳丘を全周するとすれば埴輪列の総延長は約222mとなる。樹立1本の平均値を0.35mとして全周するには約630本を要する。Ⅱ段、後円部墳頂も同様としたばあいⅢ段で約420本、墳頂平坦面(墓道前面を除く)110本の計1160本という数値が求められる。大まかな数値だが樹立された埴輪量を考える一つの目安となるであろう。

2 横穴式石室の復原

後円部に開口する復元修理後の状況と旧状については、IV章で述べたとおりである。ここでは、一步すすめて初期横穴式石室の一つとしての構造的特質を踏みつつ、入口部を含めた石室全体の形態復原を試みる。

構築時石室の旧状をとどめる範囲は少なく、石室復原にあたってはつぎの3点が解決されなければならない。

- 1 玄室規模（長さと高さ）
- 2 入口部の構造
- 3 墓道の構造

以下、順をおって検討する。

玄室規模 先述したように、石室は開口後に入口部と天井石（手前2枚）を取り除かれ、側壁上部が積み変えられた。昭和初期の修理は、江戸時代の積みかえ部を旧状近くに復元したとみられる。

復元修理後の天井石は3枚、ほぼ水平に横架する。奥の1石は修理時まで石室上に存したものを使用し、手前2石は入口の左右に立てかけられていたものである。現状の石室の高さは2.1mだが、奥壁最上部に修理時に転石を4個1段に並べて高さを増している。この部分を差し引いた2.0mの高さが本来の天井石架構位置に近いと思われる。

問題は玄室の長さである。現状の石室長は4.6mだが、入口端から0.7m付近までのあいだは底面から復元された壁体である。修理時の原則からすれば、この部分は江戸時代に積み変えられた壁体を旧状に復元した部分といえる。そこで改めて修理前の写真（Fig.9-2）を注意して観察すると、左側壁は上部の積み変えばかりでなく、現入口部に近い部分に積み変えた壁体が存在する。石室構築時の壁体が小ぶりの割石を面を揃えているのにたいして、大ぶりの石材を用いており面の凹凸が著しい。この部分は明らかに後の積み変えである。写真からは右側壁の状況をうかがえないが、おそらく同じ状況であったと想定する。すなわち、構築時様相をとどめる側壁端手前の壁体は、江戸時代に積み変えられたものにさらに修理を加えたということが知られるのである。

では、構築時本来の側壁長はどのあたりに求められるのであろうか。論証は後にして結論から先にいえば、現入口部から0.7mあまりの修理された壁体を除いて、現在確認できる構築時側壁の端をほぼ本来の側壁端に近い位置と推定する。その前面にある積み変え修理された壁体は、入口部破壊後の玄室建立時に側壁上部を積み変えた際、新たに付設されたと思われる。この推定案は、いささか唐突な感を与えるかもしれないが、一つは石室平面图形の構成手法、いま一つは石室入口部の構造によって承認されると考える。

まず玄室プランは、奥壁幅2.50m、先端幅2.38mをはかる。旧状をとどめる側壁の長さは左壁で3.95m、右壁3.90mを確認できる。ちなみに、これまで調査された成立段階から5世紀中頃までの横穴式石室の玄室規模をしめすとTab.6のようになる。城2号墳、孤塚のように若干小形の例を除くと、幅に多少のバラツキがあるものの長さは3.1~3.9mときほどの差異をみとめない。玄室プランプロポーションの目安になる玄室比（長/幅）か

現石室入口付近
壁体の積み替え

玄室プラン

らいえば、方形に近い釜塚を異例として、1.3~1.6に収まり、とくに1.5と1.6に集中する。丸限山古墳もおそらくこの範囲のなかに収まる可能性がつよい。現状の左壁長3.95mをとったばあいの玄室比は1.56である。これを一步すすめて、尺度による石室平面图形の企画を考えると、奥壁幅2.5mは1尺=25cmとする晋尺系尺の10尺、長さは16尺にわずかに不足する。丸限山古墳石室に

玄室長は晋尺系尺の16尺

もっとも近似する規模の横田下古墳の玄室は、1尺=24cmとして幅10尺、長16尺の原企画が復原される。こうした平面图形の企画がみとめられるとすれば、丸限山古墳の玄室長は25cmを1尺とする基準尺の16尺(4.0m)で企画された可能性がつよい。

入口部の構造 この問題を考えるうえで重要な手懸りとなる二つの記録がある。Ⅲ章で記した『筑前国続風土記』と、島田寅次郎の報告ならびに論文である。

前者は閉塞状況について大石を用いたとする。後者は、石室の天井に使用したとする板状大石の数を確認し、つぎのように記す。「蓋石は今は右側の前面及背二つ宛合せて四つ建ててあり、今は一つは現在蓋石となり、一つは比塚の發掘者新蔵の墓標となっているので、合わせて六つで全塚を覆ふ様になる」。すでに述べたように島田は本石室を竪穴式石室と考え、確認した大石をすべて蓋石と考えていた。復原した天井部に使用された板石は3枚であるから、残る3枚は石室のどの部位に使用されたものであろうか（この三枚のうち現存するのは新蔵の墓標に使われている幅1.2m、高さ1m以上の一枚（Fig.33）のみ、他の二枚は所在不明）。島田の確認した石材が他所からの搬入でなく、確實に石室に伴ったとすれば、3枚の板石のうち2枚を横口部袖石、残る1枚を閉塞石と想定しうる。

すなわち、鶴崎・横田下古墳などのように割石小口積みの狭小な狭道部を接続せず、釜塚・小田茶臼塚古墳などと同様に、玄室の左右側壁端に板石を立てて横口部を構成する手法である。さらにいえば、割石小口積みの狭道部を放棄して板石を袖部に配置するという新たな手法を最初に試みた例ではないか、と想定される。このはあい、他の横穴式石室がそうであるように、玄室床面と入口部床面とのあいだに40~60cm程度の段を設けたことは明らかであろう。

玄室長を約4mとし、その端部に板石を立てて横口部を構成したという復原案からすると、復元された一番手前の天井石は石室前面に大きく突出することになる。復元した天井石が本来の石材でないという憶測も成り立つが、じつはこうした構造が釜塚古墳に存在するという事実があり、直ちに否定する根拠にはならないであろう。

古墳名	幅(m)	長(m)	高(m)	長/幅
若河3号石室	2.1	3.2	1.4	1.5
鶴崎	2.6	3.4	(2.0)	1.3
横田下	2.4	2.9	2.0	1.6
城2号墳	1.6	2.4	1.7	1.5
孤塚	1.7	2.6	—	1.5
蓋塚	2.6~2.6	3.1	2.1	1.1~1.2
小田茶臼塚	2.2	3.5	1.5	1.6
丸限山	2.5	(4.0)	(2.0)	1.6

Tab.6 初期横穴式石室玄室規模

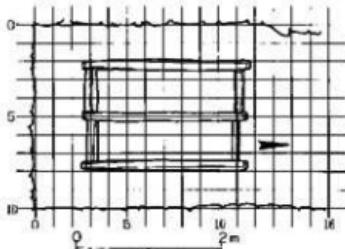


Fig.36 石室平面図と方眼の適用関係(1:80)

大形板石
の數

横口部は
板石配置

先に、左右側壁長を現在確認しうる端に近いと推定したが、これは側壁端が垂直に近く終っていることと関連する。上述したように袖部に板石を配置したばあい、側壁端は板石に突き合わせる構成であり、このような手法に由来した結果の終り方と考えられる。

墓道の構造 では、横口部のさらに前面、つまり墳丘上から石室にいたる墓道の形態はどういうに復原されるのであろうか、これも近年の調査例を検討することによって、一定の見通しをたてることができる。墓道が前方部に抜けるという老司3号石室は異例だが、丸澤山古墳に前後して築造された鉤崎・釜塚の2例との比較は、同一地域での繼続的な関係にあるだけに示唆するところが大きい。

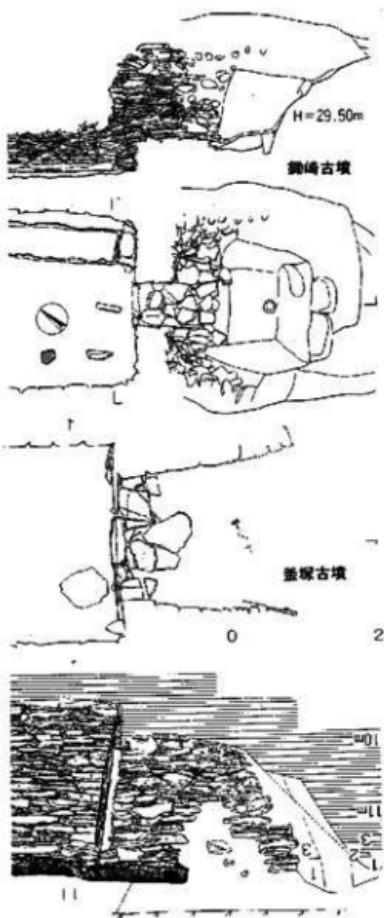


Fig. 37 墓道の構造

おおまかにいえば、鉤崎・釜塚の墓道構造は墳頂平坦面から急角度に掘り込んだ堅坑状墓道としてほぼ同一手法といってよい。堅坑状墓道鉤崎古墳は深さ1.7m、釜塚では2mに達する深さであり、横口部前面の左右に貼石状石積みを付す。これは墓道と横口部のあいだに生ずる墓壁表面を整える手法であって、より時代の下る釜塚のばあい、一種の側壁ともいるべき丁寧な壁面を構成する。釜塚よりも若干遡る孤塚の墓道も同様な構造である。

この2基のあいだに位置付けられる丸澤山古墳石室の墓道構造は、平面規模を推測しえないとしても、基本的にはこれらと共通する可能性がきわめて強いと思われる。より具体的にいえば、墳頂平坦面から40~50°の急角度に掘り込まれた墓道ではなかつたか、といえる。墳頂平坦面が23.5m前後の高さに復原されることからすると、墓道底面が21.5m程度と考えられるので、深さ2~2.5mに近い堅坑状の墓道が復原される。さらに付け加えれば、横口部と墓道とのあいだの側面には釜塚に近い側壁状積石が行われたと推測される。

以上の検討結果から推定される石室像はFig. 38に開示したとおりだが、最後に石室の墓壁について考えておきたい。初期の大形横穴式石室で墓壁を確認した例はあまり多くないが、例えば鉤崎古墳のばあい、地山を掘削した1辺8mという大規模な墓

墓道の深さ

基準

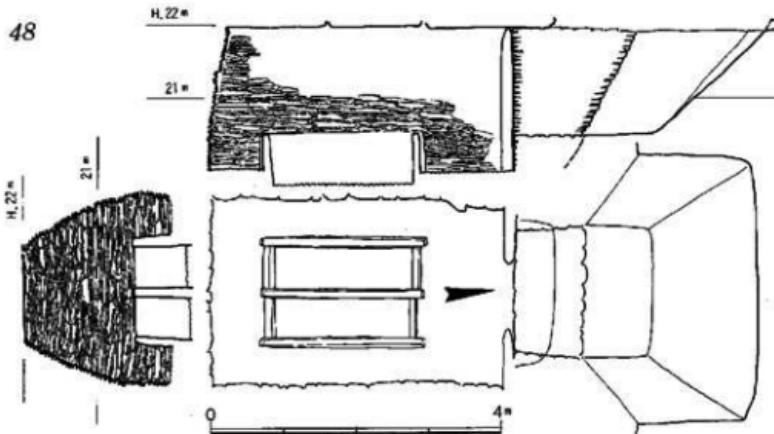


Fig. 38 石室復原図

塙中に石室が構築されている。蓋塙の石室は盛土のなかにあるが墓道のつくりと側壁状石積みからみて、かなり大形の墓塙が推測される。孤塙例は、石室が収まる程度の墓塙であってさほど大形とはいえない。

丸隈山古墳のばあい、石室駆面の裏側に4尺幅にわたって割石と粘土をまじえた捨え積みがあったことが確認されており、少なくとも4.5m以上の墓塙幅が推測できる。また墳丘復原において、第Ⅲ段の上部までが地山削り出しによる成形と推定したので、石室の墓塙はおそらく地山を掘削した大規模なものであったと思われる。

石棺 玄室の床面中央に配置された石棺は、形態上はたしかに組合せ式の箱形石棺である。しかし松浦砂岩という遠方の石材を使用し、かつ棺身・蓋の形態と加工手法に長持形石棺に通じる点のあることはIV章に述べたとおりで、特異な棺として注目される。

九州のなかで、典型的な長持形石棺といるべき例は佐賀県谷口古墳、福岡県月の岡古墳であり、家形石棺や箱形石棺の一部に長持形石棺の影響を受けたとみられる例のあることはすでに説かれているとおりである。丸隈山古墳の石棺もその一例に加えるべき要素を備えているが、留意すべきは、上面中央をわずかながら高く仕上げ、長側縁に幅の狭い凸縁をつくりだした棺蓋の形態である。

松浦砂岩

和爾下神社
境内石棺材

じつはこの棺蓋と同形態の石材が、奈良県大和郡市和爾下神社境内にある(Fig. 39, P.L. 21)。丸隈山古墳例にくらべてはるかに大形である。幅1.58m、厚さ23~26cm、両端小口面を欠く現存長2.66mで、石材は竜山石と推定されている。下面是平坦、上面は中央がわずかに膨んで全体に丸みをもつ。両側縁に沿って幅14~18cm、高さ1cmあまりの凸縁が刻出されているが、凸縁幅は同一でなく一方が狭い。小口面のつくりを知りたいが、形態的にはまさに丸隈山古墳例に等しく、使用石材と法量が異なるにすぎない。この二者が、時と場所を違えて偶然に製作されたとするには、あまりにも形態が類似する。どちらかの存在を知っていたか、あるいは別のモデルを見てそれぞれが製作したか、その関係は不間に付すとしても、二者のあいだに何らかの脈絡を想定せねばなるまい。

この石材の使用部位については、堅穴式石室の天井石、もしくは長持形石棺の長側石と

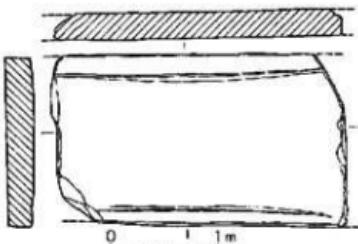


Fig.39 和爾下神社境内所在棺材 (注12文献より)

推定されているが、いずれにせよ確たる資料に欠けるようである。またこの石材がどの古墳から持ちだされたかも明らかでないが、竜山石が長持形石棺の製作と深く関連していることからすれば、ある程度年代が絞られよう。

ここでは和爾下神社境内に所在を介して、丸山古墳石棺の蓋と推測される石材は、該地工人集団の創案に成るものではなく、おそらく

長持形石棺

と指摘するにとどめ、5世紀前半における両地域首長層間の交渉の存在を想定させる資料と解しておきたい。

長持形石棺に由来する特異な製品であるとの関係

3 横穴式石室の系譜

以上みてきたように、丸山古墳横穴式石室の構造は、北部九州における初期横穴式石室の推移過程の枠を大きくはずるものではない。鶴崎古墳の概報でも略述しておいたが、初期横穴式石室についての筆者の考え方と前稿と異なるところがあり、ここでは訂正を含めて成立期から5世紀後半にいたる北部九州の横穴式石室の系譜について検討しておくことにしたい。

まづ前稿で訂正しておかねばならないいくつかの点がある。第1に、A・B 2つの型に区分したうちのA型を一般の意味の横穴式石室として北九州型石室とし、豎穴系横口式石室はB型に限るということである。第2に、A型石室の変遷を横口部構造の変化に二期を求める、I・II・IIIa・IIIb の4期に区分した部分である。III期成立の要因とした横口部上の橋石あるいは冠石の配置手法は、おそらく横田下古墳石室にみる前壁上部の羨道天井石と玄室天井とのあいだの割石積壁体に由来すると思われ、早くも割石積み羨道を接続する城2号墳で採用している。城2号墳以降では、蓋塚のようにこの手法を採用しない例がむしろ異例であって、横口部構造の一般的手法と考えられる。したがってこの手法の成立をもってIII期の開始とした部分を訂正し、III期をII期の中に含める。第3に、いくつかの古墳の年代観を訂正しなければならないが、以下の叙述の中で補足する。

石室小口壁の一方に開閉装置を付設し、追葬を前提とした構造の横穴式石室は、漢代塚室墓を源流として旧秦漢地域で成立した。はじめは塚を石材に転換した形態をとどめるが、板石墓の手法、例えば天井部に三角持送りや平行持送りなどの手法を採用して横穴式石室として完成し、高句麗、百濟の墓制として広く採用されるにいたった。遅くとも4世紀後半に百濟に伝えられ、4・5世紀の交わり頃には北部九州玄界灘沿岸部にも波及したとみられる。

わが列島最古と想定される石室例は、老司古墳（前方後円墳、全長90m）と鶴崎古墳（前方後円墳、全長62m）が知られている。老司古墳の後円部中央に構築された3号石室は、成立期の横穴式石室

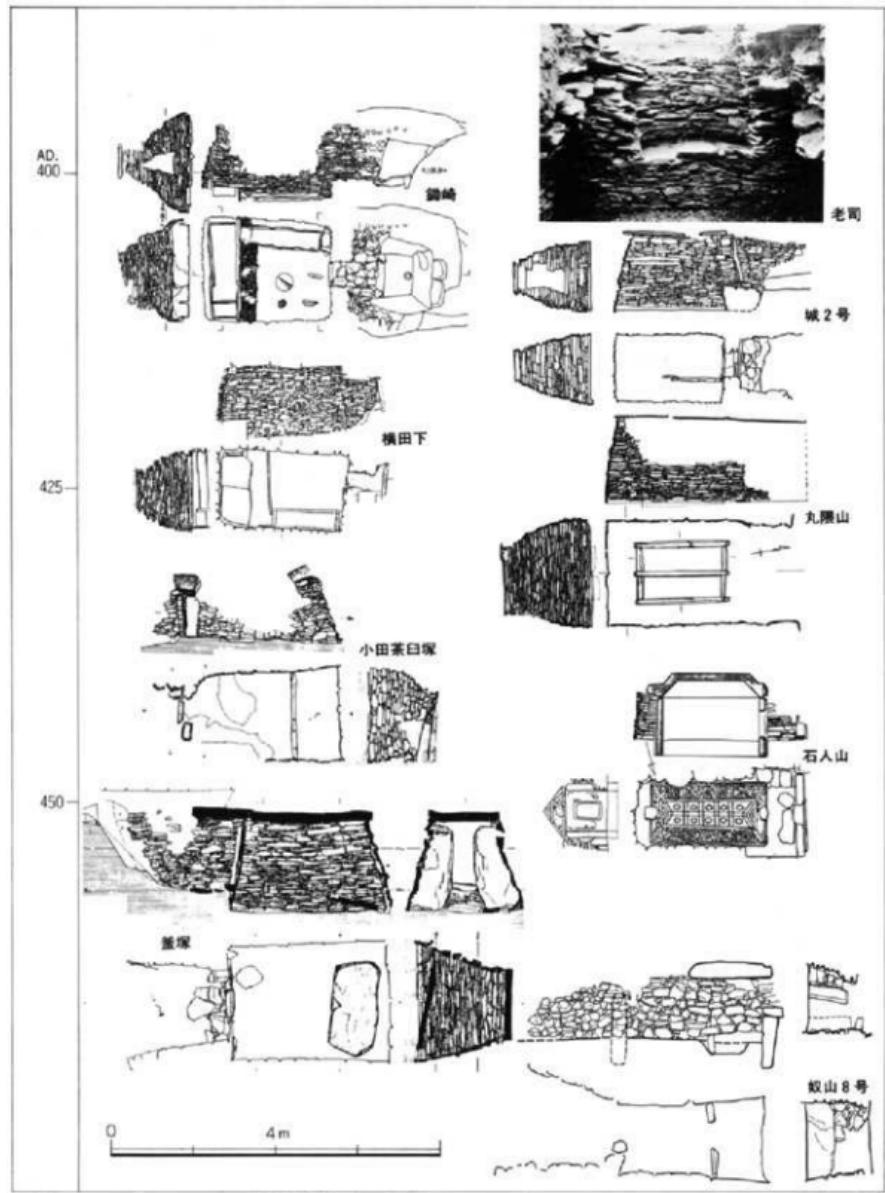


Fig.40 初期横穴式石室編年図 (実測図は各報告書より引用)

深さにあり、地山を掘削した墓壙中に構築され、厚い挖積みがみられる。まさに竪穴式石室に等しい構築方法といえる。したがって、本来竪穴式石室であるものに、横口部を付設した源初的な横穴式石室であるという解釈がなりたつ。しかし筆者は、幅広い石室プランと横口部の構造は、竪穴式石室の中からの生成ではなく、横穴式石室そのものをモデルとしたが、竪穴式石室構築技術の中で処理した変形と理解する。いま直ちにその結論を導きだしえないが、いづれにせよ、該期の高句麗・百濟の横穴式石室との接觸を抜きにして語ることはできない。

老司古墳3号石室にやや遅れるとみられる鶴崎古墳例は、狭小ながら割石小口積みの狭道を連接し、横穴式石室として整った形態をつくりあげている。この鶴崎古墳例にもっとも近い石室例に佐賀県横田下古墳がある。狭小な狭道は中央よりやや片側に偏しているが、周壁構築手法は鶴崎古墳にきわめて類似する。狭道床面は、他の例と同様に玄室床面よりも1段高く（約50cmと推定できる）設けている。こうした割石小口積みの狭道部を付設した石室は、この2基のはかに熊本県城2号墳、朱塚（未調査のため断定しないが可能性がつよい。片袖）、長崎県黄金山古墳などがある。前稿ではこの一群に注意していなかったが、狭道部構築手法につよい関連性がみとめられ、近接した年代観が想定される。この一群の石室では、未だ須恵器を出土した例がなく、おそらく5世紀前半に集中すると思われる。

割石積み狭道の系譜

すでに指摘したように、九隈山古墳石室は、割石積みの狭道部をもたず、側壁端の左右に大形の板石を配置して横口部を構成する手法である。須恵器を伴わず、埴輪も有黒斑焼成である。5世紀前半でも、ほぼその中頃を前後する頃の造営と考えられる。いまのところ、板石配置手法でもっとも遡る例である。おそらく、この手法を採用した最初の石室の可能性がつよく、以後、北九州型石室では割石積み狭道は放棄されたと想定する。先に述べた割石積み狭道を連接した一群でも玄界灘側でない3例はこの限りでなく、丸隈山古墳よりも後出するかもしれないが、さほどの年代差を考慮する必要はないであろう。

横口部板石配置の成立

この5世紀前半でも早い段階までは、横穴式石室は玄界灘沿岸を中心にして有明海沿岸地域に点的に分布するにすぎないが、中葉に近くになると各地域に一勢に広がる。熊本県下を中心とする肥後型石室もこの頃成立したとみられ、最古例として熊本県将軍塚（丸山6号墳）をあげることができる。また筑後から肥前にかけても、肥後型と北九州型を折衷したようなタイプがあらわれる。佐賀県丸山2号墳、福岡県木塚古墳などがこれにあたる。方形に近い玄室プランでありながら、肥後型のように周壁上部を穹窿状に持ち送ることなく、北九州型に類似した鉢形に近い断面形の壁体構成をとる。さらに横穴式石室内に妻入横口式石棺を収める特異な墓制もこの頃にはじまる。いわば、玄界灘沿岸地域で醸成されてきた横穴式石室の伝統と新たに招来され、後に独自に発達する肥後型石室が競合する段階ともいえる。

肥後型石室

北九州型石室は、5世紀後半にいたって周壁下部に大形板石を横位に据える腰石を採用する。この手法は有明海北部沿岸地域では5世紀前半に成立しており、その影響下に採用されたと思われる。また腰石上の割石も、扁平なものから次第に大形化する傾向がみられる。紙幅の関係で細部に触れることができなかつたが、大まかの石室推移をFig. 40に図示しておくことにしたい。

4 結 語

これまで述べてきたところを要約し、結語にかえたい。

墳丘の調査は、部分的な限られたトレンチであったが、変形が著るしく、これまで推測の域をでなかった墳丘形態と規模についての多くの情報を提供した。墳丘規模は、全長84.6m、後円部径59.4m、同高7.8m（クビレ部基底面から）、前方部長29.6m、同幅43.8m、クビレ部幅3.0.4mと推定される。墳丘の段築は後円部3段、前方部は2段の可能性がつよい。

墳丘の築造は、丘陵を削断して成形するいわゆる丘尾切断によるが、丘陵低位の前方部前面側はほとんどが盛土による成形である。

墳丘の各段斜面には、玄武岩、砂岩、花崗岩の転石（10~50cm）を使用した築石がめぐらさせる。

円筒埴輪列は、I段テラス面で確認されたにすぎないが、おそらくII段テラス面と墳頂面にもめぐっていたと思われる。I段テラス面のそれは、布振り振り方の中に互いを接する密な配列である。他の2段の配列状況が、I段テラスと同様な配列手法とすると、墳丘に使用された円筒埴輪の総数は約1100本あまりと想定される。

形象埴輪は原位置をとどめないが、クビレ部から水鳥形と横形の2種が出土した。

円筒埴輪（朝顔形も含む）は、全体に丁寧なつくりで、外表面に黒斑をもち、野焼きで焼成されたと思われる。突帯段数は3段と推定され、透し孔は突帯の第1段と第3段の直下に、逆半円形と逆三角形が1段につき2個対向する位置に穿たれる。外面調整はタテハケ1次調整を基本とし、2次調整は例外的である。全体的に鈎崎古墳の埴輪に近似するが、つくりの丁寧さ、シャープさにおいて後出的である。

かつて川西宏幸氏は、丸隈山古墳の埴輪を限られた資料からであったが、Ⅲ期に位置付けた。しかし、氏の編年基準からすれば、丸隈山古墳円筒埴輪の諸特徴は、Ⅳ期というよりもむしろⅡ期に近い。地域に即した緻密な編年作業が要請される由緒である。²⁶

このほか古墳に伴う遺物として、クビレ部と前方部前面から土師器が出土した。壺の小破片は何ともいいがたいが、器形の知られる高杯は御床松原遺跡15号住居址出土品に類例があり、須恵器出現の前段階に属することは明らかである。²⁷

出土した埴輪と土師器のしめす年代観は、現在の研究状態に即しても5世紀中葉まで下らず、五世紀前半でも第1、第2四半世紀の交りを前後する頃に求められる。かつて小林行雄氏が、石室内出土遺物の検討から導かれた年代観とも一致する。

こうした縦年の位置付けは、後円部に營まれた横穴式石室の構造からも支持される。横穴式石室は入口部が破壊され、不明な点が少なくなかつた。だが、以前に記された記録類の検討と、徐々に進みつつある初期横穴式石室の形態研究の成果を突きあわせることによって、大まかながら当初の石室形態を復原することができた。その当否は、今後の調査実例によって明らかにされるであろうが、現在の研究レヴュエルとして検討ねがえれば幸いである。

この横穴式石室の中央に設けられた組合式箱形石棺は、詳細な検討の結果、思ひかけない方向に転回する問題を孕むものであった。詳細は前述したとおりだが、この石棺の製作にあたって長持形石棺製作工人集団との何らかの関わりを想定させる。松浦砂岩使用の意

味を含めて、今後深められるべき課題であろう。

今回の調査で、今宿地区首長墓系列のなかで最大規模の丸隈山古墳について、一部だが実体解明の手懸りを提出したと思う。丸隈山被葬者前代の首長墓と推測される御崎古墳は、列島でもっとも早く横穴式石室を採用した。丸隈山古墳では、それをさらにすすめ、独自の解釈にもとづく石室の改変を行っている。袖部板石配置がそれである。これ以外にも、二者のあいだに異なる手法もある。例えば、玄室周壁隅角の処理法もその一つであり、これなど新たに百濟側から伝来した手法といえるかもしれない。

形成期の北部九州横穴式石室は、こうした意味で、百濟との不断の交渉を前提としている。玄界灘沿岸有力首長層と百濟側との交渉の一端をしめすものであり、その実体と質的意味の解明に取り組む必要があろう。

注

- (1) 城2号墳発掘調査団(三島格代表)「城2号墳」(宇土市報第3集)1981
- (2) 前原町教育委員会「糞塚」(前原町報第4集)1981
- (3) a 柳沢一男「横穴式石室平面图形の検討」「相原古墳群」(福岡市報第28集)1974、b 同「北部九州における初期横穴式石室の展開」「九州考古学の諸問題」1975
- (4) (3)b文献で検討した
- (5) 貝原益軒編著「筑前國統領土記」(福岡県史資料続四)1944
- (6) a 島田寅次郎「丸隈山古墳」(福岡県報第1集)1925、b 同「丸隈山古墳の保存工事」(福岡県報第3新)1928、c 同「丸隈山古墳を概観して同時代前後に於ける本県内の主なる古墳に及ぶ」(筑紫史談38)1926
- (7) a 松尾植作「横田下古墳」(佐賀県報第10輯)1951、b 店津鴻周辺遺跡調査委員会編(岡崎敬代表)、「末麗古」1982
- (8) 前原町教育委員会「蓋塚古墳」(前原町報第4集)1981
- (9) 甘木市教育委員会「小田茶臼塚」(甘木市報第4集)1979
- (10) この事実を指摘したのは間壁忠彦・西子氏である。「長持形石棺」(倉敷考古館研究集報第11号)1975。
- (11) (10)文献
- (12) 西田雅昭「天理市北部地域所在古墳・石室材の実測調査」(昭和53年度文部省科学研究助成一般B(代表者 西谷真治)「古代豪族勢力圈の考古学的研究」)討論資料)1979、資料をお送りいただき、種々教示いたまわった西田氏にお礼申しあげます。筆者は1985年1月福岡考古学研究所補元新大・朴美子氏のご案内で実見することができ、その類似に驚いた。P.1., 21の同写真は朴美子氏の撮影になる。記してお礼申しあげたい。
- (13) 福岡市教育委員会「御崎古墳調査報告」(福岡市報第116集)1984
- (14) 柳沢一男「野穴系横口式石室再考」「森貞次郎博士古稀記念古文化論集」1982
- (15) 九州大学考古学研究室編「老司古墳調査概報」(福岡市報第5集)1969
- (16) a (15)文献、b 西田寅次郎「裝飾古墳の発生まで」「古代の日本」3 九州 1970、c 小田富士雄「横穴式石室の導入とその源流」「東アジア世界における日本古代史講座」第4巻 1980
- (17) (14)文献
- (18) 富田純一「古墳時代」「鹿本町史」1976
- (19) 小田富士雄「長崎県大村市黄金山古墳調査報告」「九州考古学39・40」1970
- (20) 柳沢一男「肥後型横穴式石室考」「鏡山猛先生古稀記念古文化論集」1978
- (21) a 三島格「古墳時代」「城南町史」1965
b 熊本県教育委員会「塚原」1975
c 熊本県教育委員会「上の原」I(熊本県報第58集)1983
- (22) 佐賀県教育委員会「久山遺跡調査概報」1978
- (23) a 佐藤茂「久留米市善導寺町の木塚古墳」(九州考古学49・50)1974
b 久留米市教育委員会「木塚遺跡」(久留米市報第14集)1977
- (24) 川西宏幸「円筒地輪統論」(考古学雑誌第64巻第2号、第3号)1978
- (25) 志摩町教育委員会「御床松原遺跡」(志摩町報3集)1983
- (26) 小林行雄「古墳時代における文化の伝播」(史林33巻3・4号)1950、「中期古墳時代文化とその伝播」「古墳時代の研究」1961

(付録1) 丸隈山古墳横穴式石室出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集 1970より抜粋、再録にあたって、一部掉墨を組み変えた。

現存する副葬品の種類、数量は次のとおりである。

- A. 鏡 鐵 2面（「続風土記」には3面とある） 仿製二神二獸鏡 1 仿製六獸鏡 1
- B. 巴形銅器 2個分？（破片3）
- C. 裝身具 勾玉2 管玉7 小玉71
- D. 武器 刀2 剣1 鐵7

いずれも石棺内に副葬されたものであったらしいが出土状況の詳細は記録されていないので不明である。以下遺物について略解することとする。

仿製二神二獸鏡 直径17.2cm (Fig.41, PL. 26)

鏡背には紐をめぐらして四等分した内区に脇侍を伴なう神像と疾駆する獸形を交互に配している。神・獸間には乳一個あてで配してある。圓形は半肉彫りの手法に陽鏽線でかたどっているが細部の表現にいたっては舶載品の精巧さに及ばない。やや脱化しているが原型は十分うかうかに足る。地文は唐草化した線文で埋めている。仿製品としては普通の作であろう。圓形の外には擬銘帯がめぐらしている。その外にさらに梯齒文帯がみられる。外区は外周が幅1.3cmの素文帯平縁に終り、その内側に複数波文帯の内外を外行陽起鋸齒文帯がめぐらしている。鏡面に反りがあり、周縁で5mmの反りがみられる。全体黒鏽を呈する。

仿製六獸鏡 直径22.1cm (Fig. 42, PL. 26)



Fig.41 仿製二神二獸鏡(1:2)

鏡背には内区を乳文で6区に分ち、左旋回する同類の獸形六箇がめぐらしている。獸形は半肉彫りに陽鏽線を加え、獸首には目、鼻も表現されている。地文は唐草文様曲線で埋められることは通例のとおりである。獸文帯の外側に半円方形帯がめぐらしているが、地文は連珠文で埋め方形帯内を複線で四区に分った中は文字が略されて珠文に代えられている。外区は梯齒文帯、菱雲文帯、幅1.4cmの素文帯平縁に終っている。内区と銘帯、銘帯と外区の境界は断面三角状に高まる梯齒文帯、外行陽起鋸齒文帯で区分されている。全体に圓形の表現は正確で、原型鏡の製作をよく踏襲していて、仿製品

としても出色の作品である。鏡面の反りは周縁で6mmである。全面緑鏽におおわれて美しい光沢を放っている。神獸鏡と共に中國三国時代の鏡鑄を模倣したものであることがうかがわれる。

巴形銅器 (Fig. 43, P.L. 27)

現存するのは径2cm、高さ1.2cmの円錐体中心部と2個の脚片である。本来一個体分であったものか、二個体以上あったものか不明である。中心部の円錐体にはさらに幅3mmの円座がついており、四脚が付されていた形跡がこついている。円錐体の内側には径3mmの銅棒が横に鋳造されていて器物



Fig.42 仿製六獄鏡(1:2)

にとりつけるための固着装置と思われる。脚は厚さ1mmで表面の彎曲した外縁には面取りがある。現存する2個の脚は幅、彎曲度などに大小あって同一個体とするよりも、二個体を考えた方がよさそうである。弥生時代には半球形或は截頭円錐形、九脚、七脚、六脚などがみられ、北九州でも井原鏡溝、鹿津市桜馬場などの豪富出土例が知られているが、古墳時代に下っては本古墳例だけである。九州以外の古墳では山口・岡山・大阪・奈良・三重・岐阜・静岡・群馬などの地域に発見例があり、いずれも円錐形座四脚式の形態である。多くは革縫の飾金具として使用されたと考えられる。本古墳例は脚が左曲りである点弥生時代のものに通じている。

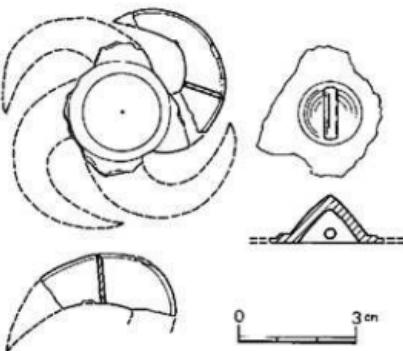


Fig.43 巴形銅器実測図(2:3)

鉄鎌 (Fig. 44, PL. 27)

本来の数量は知りえないが桜皮巻の接着した茎4箇(4~7)と三種の鎌頭(1~3)がある。鎌頭はいずれも堅抜なく、扁平な作で、先端の平たく広がった斧頭式のもの(1)と、先端の尖った両丸造のもの(2・3)に分けられる。

剣 (Fig. 44, PL. 27)

剣身の先端に近い部分の破片一箇がある。身幅4.4cm、厚み9mmの両丸造である。

刀 (Fig. 45, PL. 27)

身幅のせまい刀身片2箇がある。一は身長25.3cm、幅2.2~2cm、厚さ5mm。もう一つは身長26.4cm、幅2cm、厚さ4mmでやや内反りの傾向があるので素環頭太刀の可能性も考えておいてよい。

勾玉 (Fig. 46, PL. 27)

2箇ある。共に鮮緑色半透明の良質硬玉である。一は長さ2.7cm、厚さ8.5mmで頭にいわゆる3箇の丁字刻みがある。もう一つは長さ2.8cm、厚さ1cmでおなじく頭に三箇の丁字刻みがある。共に穿孔は面刺りである。

管玉 (Fig. 46, PL. 27)

緑色碧玉製品で7箇現存している。いずれも両側穿孔である。計測値は左のとおり(単位・ミリ)。

小玉 (Fig. 46, PL. 27)

ガラス製の小玉71箇がある。色調による内分けは水色70箇、藍色1箇となる。一般には厚み、径ともに4mm、孔径1mmのものが大部分であるが、なかに4×6.5mm孔径2mmのやや大きなもの、また2×4mm、孔径1mmの小さなものがみられる。(小田富士雄)

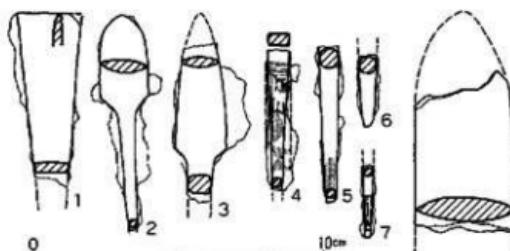


Fig. 44 鉄鎌、剣実測図(1:2)

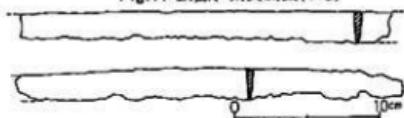


Fig. 45 鉄刀実測図(1:4)

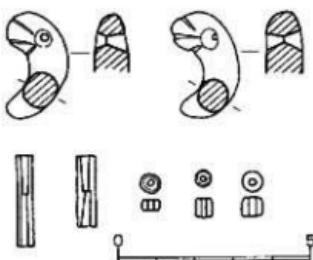


Fig. 46 玉類実測図(2:3)

No.	長さ	径	孔径
1	235	4	1.8~2
2	155	4	1.8~2
3	195	4	2
4	180	4.5	
5	255	4	
6	205	4	
7	190	4	

Tab. 7 玉類計測表

出土頭骨片について

残存している一つの大形骨片の大きさは約13cmに12cm位のものである。骨質の保存は非常に良好である。内外両面に丹が附着している。この骨片の頭骨における部位は後頭骨上鱗から右側頭骨部分約1/3と左側頭骨の一部からなる。従って或る程度癒合の進行した人字縫合がみられる。骨壁は厚く、外後頭結節は強く突出している。他に性別を推定すべき根拠となる部分はないので、以上の所見からおそらく男性であろうと思われる。年令も癒合の癒合度から推定せざるを得ないが、熟年には達しているものと思われる。骨の外表は光沢があり、手すれがみられない。(永井昌文)

(付録2) 築前国統土記(抜粋)

問船寺

村の名也。雷山のふるき文書には、主船司とかかり。寛永六年四月十一日、村民新蔵といひし者、村の南道路の上なる九隈山と云所に、石棺あるよし夢にみて、八月廿一日より掘かり。同廿七日にはり出せり。石棺長七尺横五尺、其内にへて有て、右の枕有、頭稚兩方に二あり。一は女人の首と見えて、手をぶれし時則くだけぬ。一は大なる脚體にて今猶在せり。棺の中をは薪木を以てつめたり。又棺中に刀鎌なくきりて、かた許腰れり。鏡三面有、大なるは八寸、中なるは五寸五歩、小なるは五寸許あり。右の大なる脚體並鏡など、稱新蔵か子孫の家にあり。石棺の外に石窟あり。長二間横七尺、高六尺ばかり有。上は大石をおひ、口も亦石で是をふく。棺と石窟の間も朱にてつめてたり。前の國主忠之公北由を聞玉ひ、三間四方の堂を彼地に作りて、脚體を納させ給ふ。彼堂見る中頗破して今はなし。是誰人の墓そや。姓と名とらず。右棺明器などの有様は、さばかりの京貢の人を葬れる所なるべけれども、碑字なれば知かたし。原田氏などを弔りしにや。

(付録3) 妙正寺所藏文書

總音指出候次第從御上御尊ニ付左之通口上書指出候事

(寛政八年再写本)

周船寺村新蔵御夢想之趣御尊ニ付申上ル事
一寛永十六年四月十二日夜「子程之親吉新蔵」と御起し被成候。九隈山ニ響り居申候間急き振出し候得と御申候御夢想之内、北ノ方より御候得と御申候間振を持三郎打申候得者白米出申ヲ候

我等母ゆ里ともいと二つにてすくひ取候其時口少し開き申候時内ニ這入見候得ハ親吉其米にて御供を供し候得と御申ニ付木志升五合程燒キ中則御佛盤上ヶ候得者新蔵不思議なるもの擬申候とて地家之若き者共參会式間ニ三間之御堂にて御座候をかや道具を盛ミ申時我等其時いうやつハ雨降申候ハ、親吉御深レ可申と申候得者その時親吉御申候者大事なく後ハミな／＼哭し候と御申候内ニ夢覺申候

一四月十三日夜御夢想ニ急起振出し申候得と被成候と被仰候を畏候と御諸仕候内夢さめ申候又其後八月リ日夜御夢想ニ親音御申被成候者新蔵なしほり不申候哉急き振候得と被仰候其段畏候と御請ケ申候得者夢覚申候

一同廿一日之朝銀立仕召置地家中庄屋年寄ニ中聞せ同廿七日口ひらき申候

一此山之内廣サ長丈二間横七尺高サ毛間但口ハ北向にて御座候

一中ノ石ノ幅七尺横五尺其内ニ中チ御座候然申候

一鏡大小三面御座候

一刀矢ノ根と見は申候面くされ形チ斗御座候

一其上に仮籠をかけ申事長三間横八尺口ニ横家ニ長三間横它間半塗屋作り方甚いたし直候

一十月十八日夜御夢想ニ石ノ幅七尺御座候は親吉之由被仰候急き振出し候得と御申候成候同廿一日之朝丈二寸程之佛指出申候

一右之御夢想之處相達(達)不申上候

一被親音六親音之内ニ事何親吉ニ西候哉と御尋ニ候何親吉とも知不申候事

一毎月御縁日午ノ日ヲ用候哉十八日ヲ用申候哉御尋ニ候十八日用ひ候事

一右之御座候立候事ハ九隈山之内ニ御立御座候事

一木ノ用候ハ親音ニ志ゆ里頭ヘツ用ひ申候已上

寛永十七年正月

吉祥院

水運機

山部久左衛門様

怡土郡周船寺村
新蔵

SUMMARY

Marukumayama kofun, which was designated as an important historical monument in 1927, is located in Susenji Nishi-ku, Fukuoka-City.

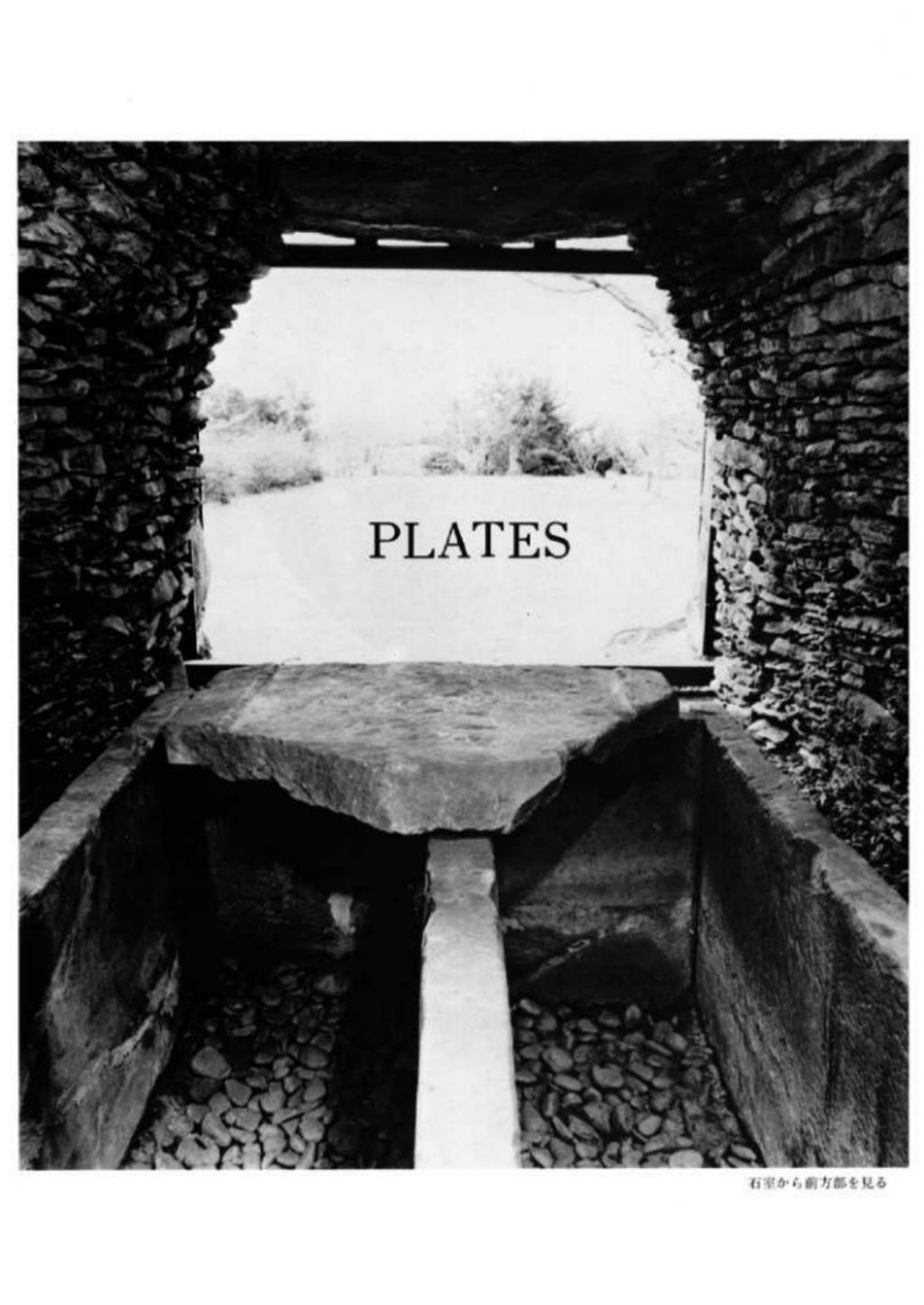
This kofun dated to the first half of the fifth century is a keyhole-shaped tumulus. The edge of the northern slope of Mt. Takasuyama was cut into such shape. The mound, however, has recently levelled down and badly deformed. Therefore, when the preservation of the designated area started in 1985, we opened twelve trenches on the mound to have precise knowledge about the size and shape of the kofun.

As a result, the edge of the mound, and the lower and middle slopes paved by stones have brought to light; the kofun is 85 meters in length, 59.4 meters in diameter, 46 meters in width and 30 meters at the narrowest area. We have, moreover, learned that it had three terraces on the slopes.

We unearthed a row of cylindrical haniwas standing around the mound on the lower terrace. Other haniwas more likely stood on the middle and upper terraces because we found figured haniwas such as birds and a shield there.

A chamber tomb of the kofun was buried in the ground of the rear part of the mound and had a side entrance facing to the north. The chamber was partially looted by locals in the early seventeenth century. We fortunately can see these recovered objects today such as bronze mirrors, swastika-like bronze objects, swords, daggers, arrowheads and gems.

The chamber was built in corbelling; these basalt rocks were roughly cut into small slabs, and the short side of the slab was used as the inner wall. The chamber is 2.5 meters by 3.9 meters and 2.2 meters in height. A stone sarcophagus is rested in the center and is divided into two rectangular rooms by slabs. The chamber's walls and inside of the sarcophagus were painted in red. This chamber tomb belongs to one of the oldest specimens in Japan; this type was directly influenced from Korean peninsula.



PLATES

石室から前方部を見る



石室内出土鏡
(1:2)

1. 徒製六獸鏡
2. 徒製二神二獸鏡



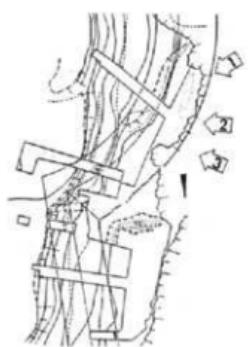
墳丘トレンチ

1. クビレ～後円部
(A区)
2. 前方部Ⅱ段隅角
(10トレンチ)



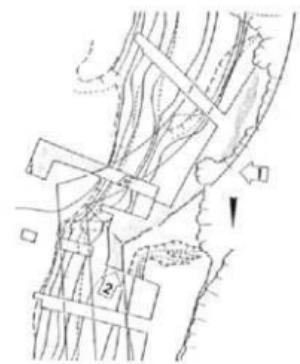
填丘（空撮）

1. 北東から
2. 北から



後円部

1. 後円部調査区全景
(南西から)
2. クビレ～後円部
(西から)
3. クビレ～後円部
(西から)



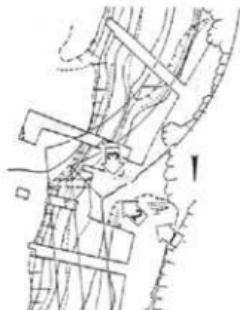
クビレ部全景

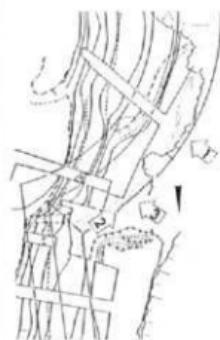
1. 東から
2. 北東から



クビレ部

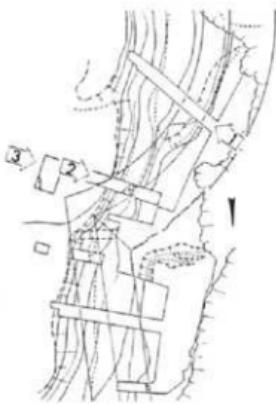
1. 北西から
2. 北西から
3. 南から





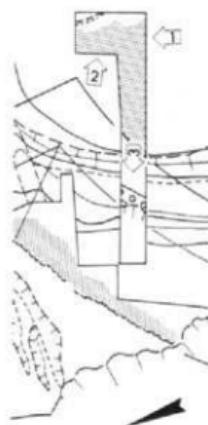
後円部葺石

1. 北西から
2. 北東から
3. 北西から



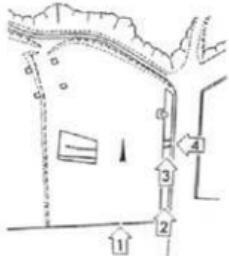
後円部トレーンチ

1. トレーンチ（北西から）
2. 4トレーンチII段斜面とI段テラス面（東から）
3. 4トレーンチ全景（東から）



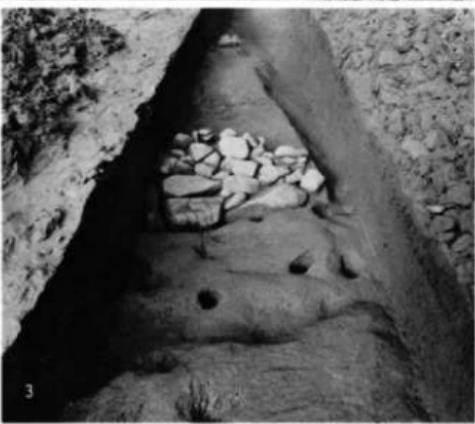
4トレンチ

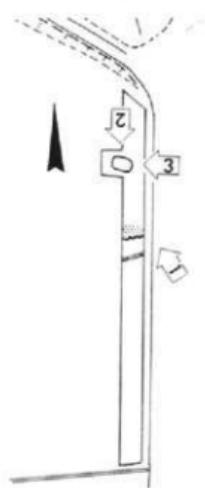
1. 豊石の状況（南から）
2. 豊石の状況（西から）
3. 塗輪列（東から）



7・8トレンチ

1. 全景（南から）
2. 7トレンチ（南から）
3. 7トレンチI段斜面葺石（南から）
4. 7トレンチI段斜面葺石（東から）





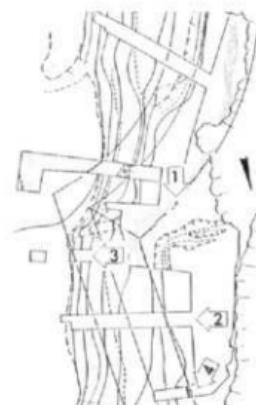
7トレンチ

1. 基底面、I段斜面葺石（南東から）
2. SX02（北から）
3. SX02（東から）



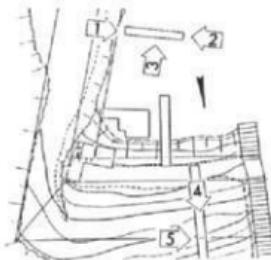
8トレンチ

1. 基底面、I段斜面（南から）
2. 基底面、I段斜面（西から）



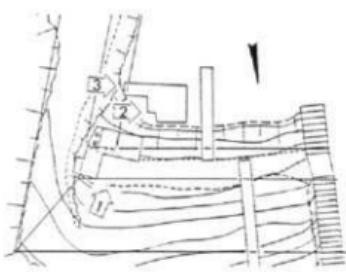
前方部各トレンチ I

1. B区全景（南から）
2. 2トレンチ（西から）
3. 3bトレンチ、II段斜面葺石（西から）
4. B区基底部断面（南西から）



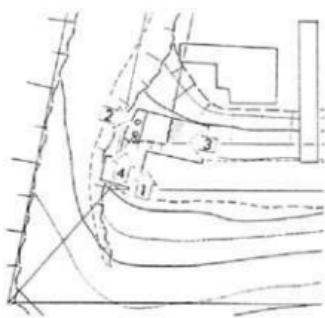
前方部各トレンチ I

1. 6トレンチ発掘状況（東から）
2. 6トレンチ発掘状況（西から）
3. 6トレンチ近代擾乱の段落ち（北から）
4. 5bトレンチ発掘状況（南から）
5. 5bトレンチ墳丘基底面削り出し（東から）



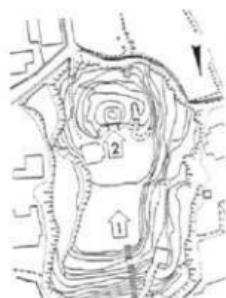
9-10 レンチ

1. 9-10 レンチ全景 (北東から)
2. 9 レンチ西壁断面 (東から)
3. 9 レンチ基底面 (東から)



10トレンチ

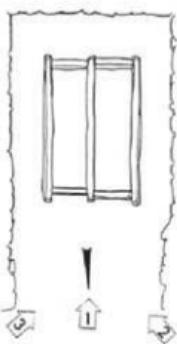
1. テラス面状況（北から）
2. II段斜面蓋石（東から）
3. 墓輪列（西から）
4. 墓輪列（北から）



横穴式石室

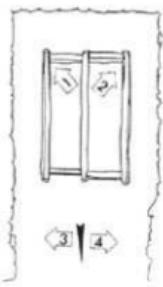
1. 遠景(北から)
2. 全景(北から)





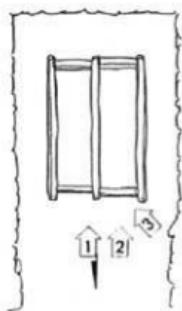
横穴式石室各部 I

1. 石室中央（北から）
2. 左側壁（北西から）
3. 右側壁（北東から）



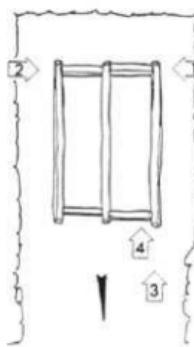
横穴式石室各部 II

1. 左側壁奥壁隅角
2. 右側壁奥壁隅角
3. 左側壁先端部
4. 右側壁先端部



石棺 I

1. 正面全景
2. 正面全景
3. 中央間整石材

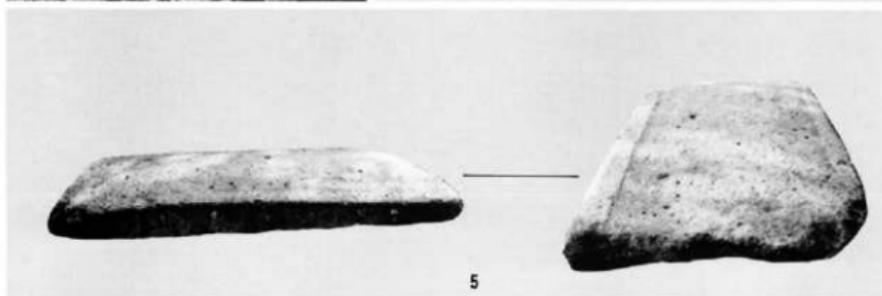
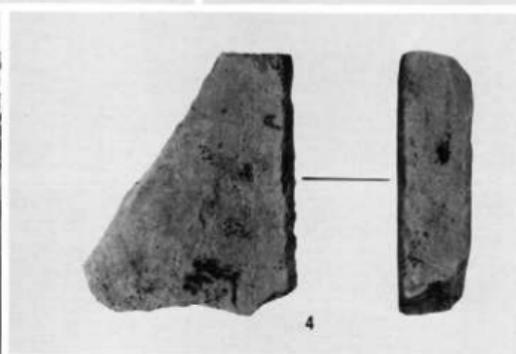
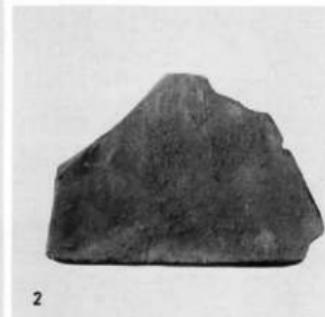
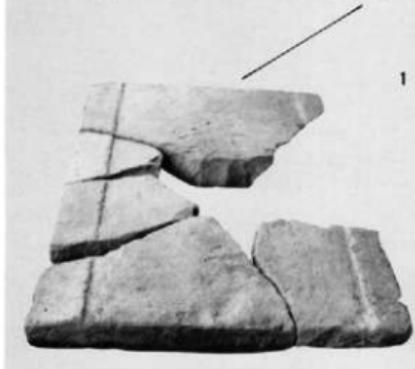
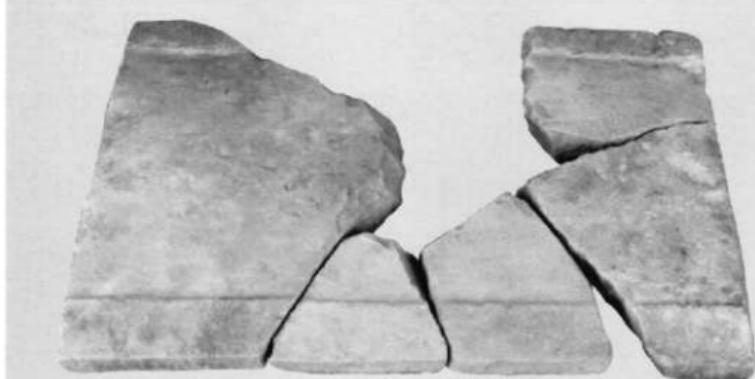


石棺II

1. 小口壁と線刻（西から）
2. 小口壁と線刻（東から）
3. 棺蓋架構状況（北から）
4. 棺蓋の加工

石棺蓋・石枕

1. 棺蓋
2. 加工石材
3. 大形板石
(新築基標)
4. 石枕
5. 和爾下神社境内
石棺材





14



15



16



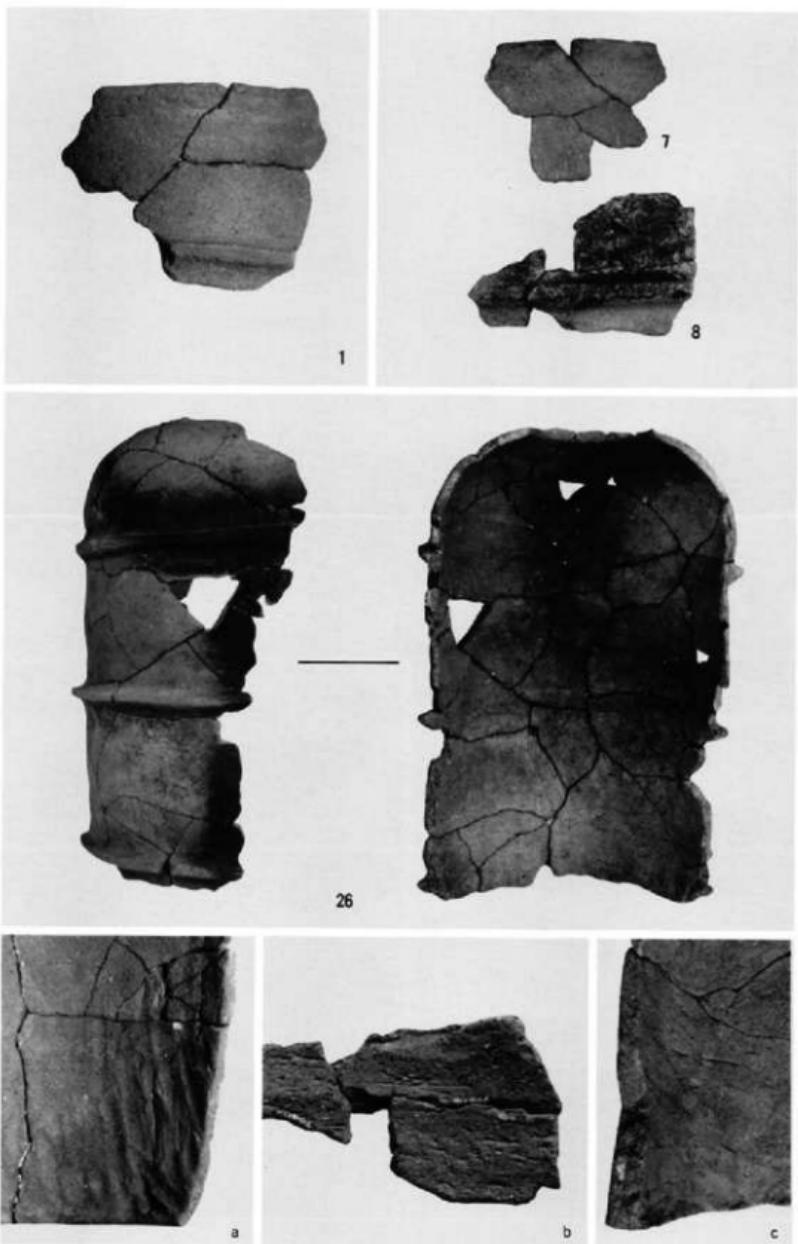
12



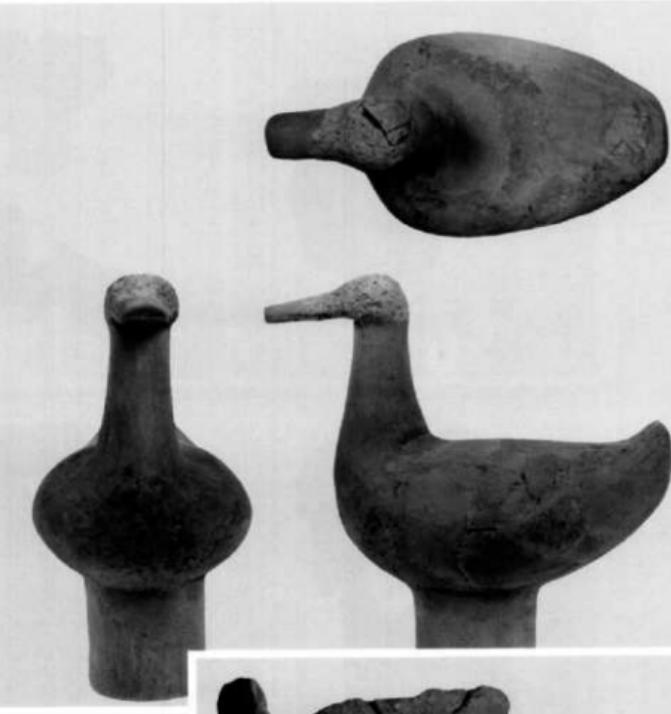
13



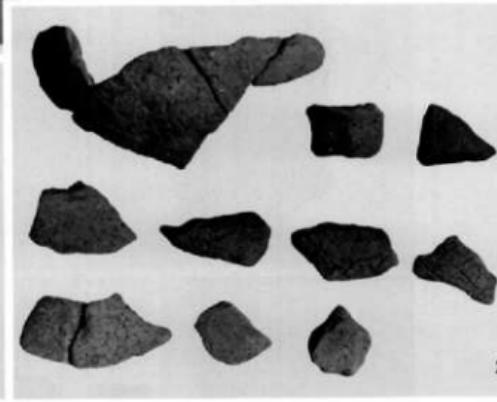
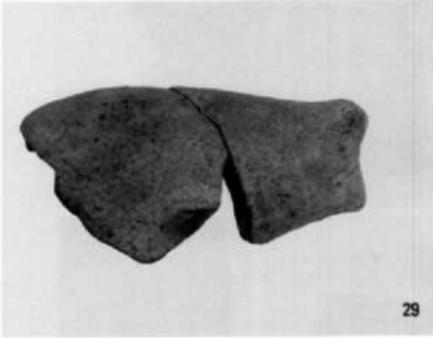
18



調整手法
a ユビナデ
b ケズリ
c ユビナデ、ハケメ



28



29



30



PL.26 石室出土遺物 I



1



2

1. 仿製六獸鏡
2. 仿製二神二
神鏡
(1:2)

PL.27 石室内出土遺物 II



1. 巴形銅器 (1:1)
2. 巴形銅器 (1:1)
3. 刀
4. 鐵鎌
5. 刺
6. 玉類



3



1



2



3



4



5



6



7



5



6



古墳

NTT今宿アンテナ台より



福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集

九郎山古墳 II

1986年3月20日 発行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市中央区渡辺通5-14-9

MARUKUMAYAMA KOFUN

Excavations and Studies of
Keyhole-Shaped Tumulus
in Susenji, Fukuoka

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
JAPAN
March 1986